

ブルペンは今日も平和です。

通りすがりの猫好き

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

常勝軍団名古屋ブルーバース。

その躍進を支えているのは、鉄壁とも呼ばれるブルペン陣だった。

そんな彼らが送る、笑いあり、NGなし、暴言ありのドタバタ放送劇（になる予定）！

さあ、今日も今日とてブルペンに『ON AIR』の明かりが灯る！

小説家になろうでは「砂糖醤油」という名義で投稿している作品です。

他の小説と違ってゆるふわっとした雰囲気味わえたらと思います。

※この作品はギャグを書こうとして書けなかった作者の末路です。まあ息抜き程度なので気軽にどうぞ。

目次

# 5	# 4	# 4	# 4	# 4	# 4	アウエーでも投げますよ	# 3	# 3	# 3	# 3	# 3	# 2	# 2	# 2	# 2	# 2	絶対零度のクローザー	# 1	# 1	# 1	# 1	# 1	プロローグ
part 1	part 5	part 4	part 3	part 2	part 1		part 5	part 4	part 3	part 2	part 1	part 5 + $\alpha$	part 4	part 3	part 2	part 1		part 5	part 4	part 3	part 2	part 1	
116	111	105	100	94	89	84	78	72	68	62	57	53	49	44	39	34	29	24	18	14	10	6	1

#	#	#	#	#	#	#	#	#	偶然じゃない	#	#	#	#	#	#	#	#	お披露目	#	#	#	#		
9	9	9	9	8	8	8	8	8		7	7	7	7	7	6	6	6	6	6	5	5	5	5	
p	p	p	p	p	p	p	p	p		p	p	p	p	p	p	p	p		p	p	p	p		
a	a	a	a	a	a	a	a	a		a	a	a	a	a	a	a	a		a	a	a	a		
r	r	r	r	r	r	r	r	r		r	r	r	r	r	r	r	r		r	r	r	r		
t	t	t	t	t	t	t	t	t		t	t	t	t	t	t	t	t		t	t	t	t		
4	3	2	1	5	4	3	2	1		5	4	3	2	1	5	4	3	2		5	4	3	2	
247	241	235	229	224	219	214	209	204	199	195	189	183	178	173	168	162	157	152	147	141	137	131	126	121

#11	#11	#10	#10	番外編：ブルーバードのショート事情	#10	#10	#10	選手名鑑（コメント有）	#9
part 2	part 1	part 5	part 4		part 3	part 2	part 1		part 5
303	298	293	289	286	281	275	268	261	254

## プロローグ

プロスポーツ。それは競争社会となった現代において特に争いの激しい世界である。シーズン中は一流選手同士が火花を散らし、オフにはその年棒の高さで世間の羨望の視線を集める。それは無数のファンの視線をくぎ付けにし、国を、そして世界を酔いしれさせる。

そんな華やかな表の世界とは打って変わって裏の世界は残酷だ。結果を残せず消えていった選手、怪我で人知れず消えていった選手たちはごまんという。そう、彼あるいは彼女らは無数に重なる屍の上で今日も生きるか死ぬかの戦いを繰り返しているのだ。

その中でも特に入れ替わりが激しいのがプロ野球のリリーフ陣だ。4、5年もすればその面々はがらりと変わり、第一線を張っていた投手は加齢や酷使による劣化や相手の研究によってその姿をくramsしていく。リリーフとして10年持つ投手などほんの一握り、15年もなると指折り数えるほどしかない。

だと言うのに、守護神と呼ばれる抑え投手を除けば彼らにスポットライトが当たる事はあまりない。せいぜい最優秀中継ぎというタイトルがあるのみだ。だが、考えても見てほしい。先発がもし5回投げ切ったとして、残りのイニングを誰が投げているのか。高校野球でも分業制が浸透し始めているこの野球というスポーツにおいて、最も割を食ってあげているのは誰なのか。リリーフというポジションは最早先発失格の烙印を押された者が集まる場所ではない。チームの勝利を導く尊ばれるべき立ち位置なのだ！そのために我々ができることは何か。現状をひたすら嘆くことか？否、彼らの戦うさまを余すことなく伝える事である！

「…っという企画を考えてみたんですけど、どうですかね？」

愛知県にホーム球場を置く、名古屋ブルーバース。その球場の一室で監督の金子<sup>かねこ</sup> 真寧<sup>まねい</sup>を唸らせていたのは、ブルーバースの誇るクロージャー、黒鵜座<sup>くろうざ</sup> 一<sup>はじめ</sup>が提出したとある企画書だった。その表紙には『ブルペン中継ラジオ』とデカデカと書かれている。この企画書によると、黒鵜座が司会として他のブルペン投手たちとの会話をラジオにして送るというものだった。試合中にそういう事をやるというのがまずありえない。そもそも広告担当でもないたかだか選手がこういうたものを自ら書き上げることなどまずもって前代未聞だ。

「色々聞きたいことはあるが、まず一つ。何でこんなものを提案しよう?」

金子の鋭い視線に対して黒鵜座はにへら、といった感じの笑みを浮かべたまま平然としている。彼は頭を面倒くさそうに掻きながら話し始めた。

「いやー、こういうの夢だったんですよね。誰だって一度はテレビに出たいと思ったことあるじゃないですか。要はそれと同じ感覚ですよ」

「そういうのは地元のテレビ局が取材してくるだろう。それに出版ばいいじゃないか」

「いやいや監督、分かってないですね。今は選手から自分をアピールする時代ですよ。それに普段あまり日の目を見ないリリーフ投手に焦点を当ててみるってのも面白い案だとは思いませんか? 選手への固定ファンが増えればグッズの売れ行きも良くなります。そうすれば監督の懐も潤うんじゃないっすかね」

懐が潤う、その言葉を受けた金子の肩が少しだけ動いたのを黒鵜座は見逃さない。元より金子が守銭奴かつ金に目ざとい性格である事

は知っていた。聞けば夫人に相当な浪費癖があつて苦勞しているらしいが、そんな事はどうでもよかつた。黒鷲座は金子に対する敬意などほとんど払っていない。世間では名将、と言われている金子だがその実は現在強いチームの成績にあやかっているだけの木偶の坊である。現場で戦う黒鷲座はそれをよく知っていた。僅かに金子が揺らいだのを確認すると、これがとどめ、と言わんばかりにまくしたてる。

「他の球団と同じことやつてるようじゃ、いつまで経つても利益は平行線をたどるままですよ。ここは一つ、新しい可能性に賭けてみるのも一興だとは思いますがね」

しばらくの沈黙が走つたのち、金子は大きなため息をついた。

「…分かつた、上に掛け合つてみよう。ただし一つ、条件がある。お前が司会をやる以上は、それなりの成績を残してもらわなければならぬ。そちらに現を抜かして成績を残せなかつたら、批判は必至だろう。よつて『2敗、セーブ失敗は5度まで』だ。それ以上成績が悪化するようならこの企画は即打ち切りとする」

「いいつすよ。まあそのくらいは覚悟の上ですし」

かなり厳しい条件であるにも関わらず、あつけらかんとした様子で黒鷲座は答える。昨シーズンの成績は2勝1敗で防御率2.33、セーブ数は29。大台の30セーブにはギリギリ届かなかつたものの、抑え投手としてはそこそこに優秀な成績を残せている…とは思ふ。セーブ失敗もそこまで多くはないし。まあ4回くらいかな。今シーズンからは新しい秘策も用意してあるし。

「まあそれでいいなら全然自分はOKつす、じゃ上にもよろしく言つておいて下さいね」



「ちよつ、待つ……あの馬鹿。本気でやる気か……」

まさか本当にやる気とは思わなかった。黒鷲座が上機嫌な様子で勢いよく出ていった後、一人監督室に残った金子は大きく息を吐いた。

「ありえんだろ普通……何のためにそこまで入れ込むんだ」

うちのチームは投手が他と違って充実しているし、黒鷲座はその中心だ。チームを支えるいわば大黒柱とこんな事でいざこざを起こすのは得策ではない。かといってこれを球団が許可してくれるのかと言えば、そうもいかないだろう。

(どうすりゃいいんだ……)

常勝軍団の監督が幸せかというのと、これが中々そうもいかない。勝利を義務付けられ、思い通りにいかないとすぐにファンは罵詈雑言を浴びせてくる。その上、選手は選手で自由が過ぎる。プロ野球選手である以上、どいつもこいつも我が強いのは分かりきっていたことだが、監督となるとそれを強く痛感させられる。

ああ、俺が現役の頃は全員拳で黙らせればそれで良かったのに。昔はそうさせられてきたし、それが正しいものだと思っていた。今じゃ手を出せば一発アウト、暴言でも場合によっては処分を受けなければならぬ。本当に嫌な時代になったものだ。そうやってまた一つ、頭痛の種が増えた。

その後、監督とその周囲の尽力によってこの難題ともとれる計画は何とか軌道に乗り、地元の小さなケーブルテレビとラジオによってその放送が決定した。放送日は開幕戦、3月25日に生放送される予定だ。

これが後に伝説となる、『ブルペン放送局』の幕開けであった。

# #1 part 1

「……さあやってまいりました、開幕戦！という事はつまり、この番組『ブルペン放送局』の始まりというわけでございます！テレビをご覧の皆さん、ラジオをお聞きの皆さんこんばんわ、司会兼ブルーバースのクローザーを務めております黒鵜座くろうざ はじめ一です。いやー待ってました、待ちかねましたこの時を！僕はね、ずっと夢に持ってたんですよ、こうやって自分が司会の番組を持つのが！まあ自分が立ってるのはひな壇じゃなくてブルペンですけど！ってやつかましいわ！……ゲフンゲフン、えー、ってなわけでやってまいりましたけどもね。まずは栄えある初回のゲストからご紹介しましょう。我らがブルーバースが誇るサブマリン！火消しはもうお手の物！へり下った投法から打者を仕留める若手リリーバー、石清水いwashimizu緑郎君です！」

「……ど、どうも。ねえ先輩！その紹介でどんな顔して出てくればいいんですか！ちよつと、というかかなり恥ずかしいんですけど！」  
「ほらほら、そんな事言わずにさあ緑郎。カメラはこっち！はい、とびっきりの笑顔！」

「ええっ!?えつと、こ……こうっ!？」

青いショートヘアに黒縁の眼鏡をかけた青年、石清水緑郎がカメラに向かってぎこちない笑みを見せる。緑郎は若いシルックスもいい方で、今はやりの草食系男子というやつだ。女性人気もそこそこある。この顔をテレビで見える事が出来ているファンにとつては僥倖だろう。ラジオで聞いている人にとつては残念なことだろうが。それにしたって作り笑いが過ぎるその笑顔に、黒鵜座は思わず吹き出しそうになった。

「ぶふっ……お前、お前その顔最高！放送中ずっとその顔でいてくれるっ。」

「やれっていったの先輩ですよね!?!っていか記念すべき第一回の放送がこれって大丈夫なんですか！」

「まあ大丈夫でしょ。よほど変な事言わなけりや打ち切りはないってさ」

「というか僕なんかが第一ゲストで本当にいいんでしょうか……地味だし、あまり話も上手い方ではないし、それに、ブツブツブツ……」  
出た。 禄郎の十八番。 考え込みすぎる悪癖が顔を出した。 禄郎は割と結構なペースで考え込んでしまう事が多い。 言ってしまったら、根が真面目すぎるのだ。 もう少し何とかかなると思つていけば色々楽なのに。 損の多い性格だと改めて思わされる。 でも今は生放送中だ。 番組の説明をしないといけない。

「禄郎が恒例のネガティブタイムに入った所で話を進めましょうか。 あー、そうですね。 んじゃまあこの番組の説明から始めましょう。 この番組はですね、試合開始からブルペンの様子を中継で伝え、プロの中継ぎが普段どんな様子で過ごしているのか。 それを皆さんにも知つてもらおうというね、番組なわけなんですけども。 大体中継が終わるのは9時になるか、僕がブルペンで投球練習に入るまで、まあ大体8回くらいまでになるんですかね。 まあ結構時間あるんで、のんびりやっていきましょう。 とういわけで、ハイ禄郎！カムバックー！」

完全に自分の世界に入りきっている禄郎を揺さぶつて現実に引き戻す。 もともと禄郎がネガティブなのは把握しているが、こうなると揺さぶるか登板するまで戻つてこないのが結構面倒くさい。

「あばばば……、ハッ!?自分、何か変な事言つてましたか!？」

「大丈夫大丈夫、放送コードには抵触しない範囲だったから」

「つてことは何か口走つてたんですか!?!うわあ最悪だ……家族も見るって言つてたのに……!！」

「冗談だよ、だから早く戻つてこい」

「このまま禄郎をいじり倒してやるのも一興だが、それでは視聴率は上がらない。 話を進めよう。」

「早速ですが、お便りが来ております。 いやー、これが結構寄せられているんですよ。 まだ放送してないのにありがたいことですよ本当に。 それじゃあ早速読んでみましょうか。 えーと、じゃあまず一通目。 ペンネーム、『青鳥軍団』さんから。 『こんな事してないで練習しろ』……あつ、ふーん。 そう来たか。 禄郎、これ破り捨てていい?」「何でOKが出ると思つてるんですか、ダメでしょ現実的に考えて

……」

「というかそもそも何故これを通した撮影陣！」

撮影しているスタッフたちから笑いが起こる。いや、はははじゃないんだが？いきなり初回から放送事故になる所だったぞ貴様ら。

「……んまあ一応お便りを送ってくれたわけですし、真面目に答えましようか。プロって球団によつては練習量がまちまちだとは思いますが、うちってその中でも結構厳しい方なんですよ。常勝軍団って呼ばれてるだけあって、その分ふるいにかける人もいるわけです。その中でずっと生き残り続けるっていうのは中々難しいことなんですよ。と、いうわけで我々も結構頑張ってますって聞いたんですけど、これじゃ不十分かな？」

「十分ではあるとは思いますが、それじゃ納得しないファンもいるかもしれないですね」

「うん、でもまあ相手もプロだしこっちも人間なんで。調子の良い悪いもありますし、相手の方が一枚上手をいくことだってあります。相手を全員打ち取れば最高なんですけど、どうしてもそうはいかない時はやっぱりありますからね。こればかりは仕方ない事です。それでも僕のピッチングが不満なら、この番組まで送ってきて下さい。まあ次回来たら破つちやうかもしれないですけど。あ、僕にならいいですけど他の投手の方への批判は抑えて欲しいです。ピッチャーって生き物はどうしてもこう、繊細なものでね。心持ち一つで悪化しちやう事もあるんで」

「確かに、僕に対して批判の手紙が届いてきたら、結構凹むかもしれないです」

「碌郎の場合は極端なんでもいいとして」

「いや良くはないんですけど」

「まあ僕はメンタルが強い方なんですけど、そういう批判が来るのが怖いって人もいますよね。そういう場合は一旦周りからの情報を絶ってみるっていうのも一つの手ですよ。人を傷つけるためだけに生み出された言葉なんて、百害あって一利なしですからね。いちいちそんなものに付き合っていると疲れちゃいますから」

「……おお、普段ちゃらんぽらんな黒鵜座先輩がまともな事言ってる」

「禄郎は僕の事なんだと思ってるの？」

「そりゃあ性格の悪い遊び人って感じですけど」

「酷くなーい？あ、そろそろCMの時間らしいですね。では続きはコーマシヤルの後で！番組はまだまだ続きますよー！」

## #1 part 2

「えーじゃあ丁度CMも明けたみたいなので、とりあえずもう一、二通くらい読んでみましょうか。ど〜れ〜に〜し〜く〜よ〜う〜か〜な、ハイこれ！ 禄郎読んで！」

箱の中に入った手紙たちに手をつっこみながら、黒鷲座は適当にシャッフルする。その中から一通の手紙を掴むと、禄郎のもとへと差し出した。おずおずと禄郎が手紙を受け取り、その内容を話し始める。

「あっはい。えーとペンネーム『烏骨鶏』さんからですね。『黒鷲座選手、石清水選手こんばんは』、どうもこんばんはです」

「こんばんはー！」

『僕は幼少のころからブルーバースの大ファンです。こうしてお便りを送ることは初めてなので、とても緊張しております』

「いいよいいよー、物怖じせずにとんどん送っちゃってー！」

『球場にも時折足を運んで応援をしています。そこで質問なのですが、いつも球場にきた時何を食べるか迷ってしまいます。よければお二人の球場飯を教えてくださいませんか』

「二通目にしてまともな質問キター！ そうそうこういうの！ こういうの求めてたんだよ！」

黒鷲座が鼻息を荒くしながら立ち上がる。どうやらテンションが爆上がりしているらしい。それにしても、と禄郎は考える。やはりこういう質問を求められた時は定石通り、自分プロデュースの球場飯をお勧めした方が無難だろうか。

「あー、そうですね。僕がおススメするのは……」

「やっぱりビビンバかな〜！」

「ちよっ、遮らないで下さいよ今僕が言おうとしてたのに！ つていうかビビンバ!? それって確か野手の李<sup>イ</sup>選手がプロデュースしている料理ですよね!?!」

「いやあ本場の味って言うの? ピリ辛なのがいいんですよ! 結構食べ応えのある量だし、値段もリーズナブル! 食べたことがないなら是非

食べてほしいね！」

ダメだ全然こつちの話が伝わってない。普通自分がプロデュースした料理を選ぶでしょ。頼むよ、半ば救いを求めるような目で黒鵜座を見つめる。それで察してくれるような人間なら苦労などしてないのだが。仕方ない、こつちからヒントを出すか。

「それもいいですけど、先輩がプロデュースした食べ物がありましたよね？ほら、『絶対零度のクローザー』にふさわしい『か』から始まる食べ物！」

「あー、そういえばやったなあ」

黒鵜座があごに手をつけて考え始める。しめた。これできつと思いで出してくれる。緑郎はほっと胸をなでおろした。

「か……か……なんだっけ、カキフライ？」

「な・ん・で・そこで間違えるんですか！わざとですかわざとなんですか!?!」

なでおろしたはずの胸を返せ。やっぱりこの男はちやらんぽらんでふざけた人物だと思い知らされる。まともな返答を求めた自分が馬鹿馬鹿しくなってしまう。緑郎はげんなりした様子で肩を落とした。

「いやほら、カキフライって多分冷凍だろ？そういう意味じゃ『絶対零度のクローザー』にふさわしいかと……」

「そういう事は言うなあ——!!もしそうだったとしてもそういう事は言わないお約束でしょうが！今の生放送じゃなきやカットさせていただきますよ！」

思わず緑郎が声を荒げる。撮影陣の間には笑いが起こっているが、こちとらそれどころじゃない。はははじゃないんだよははははははは。当の言われた本人は相変わらずヘラヘラした様子だし。

「んな怒んなよ緑郎。耳に響く。端正な顔が台無しだぞ？」

「怒ってないです、先輩に普通の答えを期待してた自分に失望しているだけです……」

「まあそうしよげんなよ。大事な所はちゃんとわきまえてるからさ」

黒鵜座がこごぞとばかりにへつたくそな目配せをする。下手。本



当に下手くそだ。できないなら最初からやるなよ。

「誰のせいだと……って今の話、本当ですか」

「そうそう、ちゃんんと分かっているって。何てったって自分が作ったメニューだもんな。『か』から始まる食べ物でしょ？か……か……か……カレ……は他の選手がやっているし、寒天……なわけないし。おいおい緑郎、そんな不服そうな顔しなくてもいいじゃん。そう、かき氷だかき氷ーいやはや、盲点だったー」

「全然盲点じゃないですよ。かき氷より先に寒天が出てくるって思考回路どうなってるんですか……」

「そらお前」

「いやいいです。聞きたくて言ったわけじゃないですもん。というか聞きたくないです」

「あ、そう？でもさこの時期にかき氷つてもあんまりないよなあ。だってまだ三月だぜ？風邪ひくって」

「まさかの作った本人が全否定!?いやいやこの時期でも全然食べれますってかき氷!」

かけてあげた梯子を勝手に外すんじゃないよ全く。何とか軌道を修正しなくてはいけないなくなった。本当はこの時期にかき氷なんて普通食べたいとも思わないけど、商品を出している以上持ち上げなくては。は。

「えーそうかなあー?」

黒鷺座がいたずらっぽく笑みを浮かべる。あれは何かを企んでいる顔だ。そこそこ付き合いの長い緑郎だけに、ある程度察することができた。しかし緑郎は決心した。嫌な予感はあるけど、やってやろうじゃないか。球団の面子のため、自分のイメージのために。

「食べます食べますーいや逆についていえばいいんですか?この時期だからこそいいんですよー」

「ですって。スタッフの皆さん、聞きました?」

緑郎は甘く見ていた。黒鷺座の事ではなく、この番組の撮影陣の悪い意味でのノリのよさに。一人のスタッフの手に握られていたのは、小さなサイズのカップから山のように青く、はみ出たかき氷だった。

「売ってたので、是非にと買ってきました！」

「なっ、なななっ……」

「ほらほら、この時期だからいいんでしょ？かき氷。優しい優しいスタッフさんが用意してくれましたよ。食べないの？」

てめえハメヤがったなこの野郎。もはや先輩という敬称も忘れ、碌郎は心の中で叫んだ。この人はやつぱりとんでもなく性格が悪い。とはいえ、今更引くわけにもいかない。

「わ、わあくオイシソウダナ、先輩は食べないんですか？」

ええい、死なばもろともだ。お前も一緒に極寒地獄に落ちてもらうぞ黒鵜座一エー！

「いや僕はいいや。後でお腹壊すといけないし」

世の中、割を食うのはいつだって真面目な人間だ。彼らが誰も知らないところで犠牲になっている事でその礎は築かれているのだ。そう、ちやうど今の碌郎のように。恐る恐るスプーンに手を伸ばす碌郎を、ニヤニヤしながら黒鵜座が見つめている。

「どう、お味の方は」

「……トテモオイシイデス」

「うんうん、良かったですね！僕プロデューサー、碌郎おススメのかき氷ブルーハワイ味、絶賛発売中！それではそろそろCMに入りまーす」

「僕何とも言っていないですけどお!?」

「えっ、じゃあおススメじゃないの?」

「うぐっ、……おススメです」

# #1 part 3

「はい、またCMも明けたということですね！次のお便りに入っ  
ていきましょー！って緑郎？何頭抑えてんの？」

「頭が……かき氷を一気に食べたせいで頭がガンガンする……」

「あっはっは、全く緑郎は抜けてるなあ」

「誰のせいだと……！」

「じゃあ時間も押ししてるんでね。続きいきますよ」

「無視ですか」

「ドゥルルル……デーーン！」

しよぼくれた後輩を差し置いて、黒鷲座はまた箱の中に入った手紙を混ぜはじめた。自作のふざけた音楽と共にその中から一通、適当に指に当たったそれを抜き出した。

「今回のお便りは、んゝ字からしてまだ小学生かな？ペンネーム、「とりから」さん。『くろうぎせんしゅ、いわしみずせんしゅこんばんは』、はいどうもこんばんは〜！『ぼくは野球をはじめてまだ数年ですが、投手をやっています』」

「お、僕達と同じじゃないですか！これは将来有望ですね！」

『まだ早いとお父さんからは言われますが、変化球を投げられるようになりたいです。二人のとくいな球しゅを教えてください』」

「これは中々に当たりじゃないですか」

「いや待て、これは子供からの手紙に見せかけたライバルチームからの罠かもしれない」

黒鷲座の顔はいつにもなく真剣だ。恐らく本当に疑ってかかっているのだろう。どうした、その性格のせいであついに誰も信じれなくなったか。緑郎は大きくため息をついた。

「……前々から思ってたけど、先輩って変なところで馬鹿ですよ  
ね」

「馬鹿!?馬鹿って言った!?……そうはいっても性分なのかな、どうしても心のどこかで他人を疑っちゃうんですよね」

「そんな事言っつて、キャッチャーの扇屋おうぎや選手の事だけは信用してるん

じゃないですか?」

「そりゃあもう……ね?」

「へへへへへへ」

「ってこんな事言ってる場合じゃないですよ、質問に答えないと。うーん、まあ僕自身球種はそこそこある方だと思いますけど、一番の生命線はカーブですね」

「ほうほう。して、その心は?」

「アンダースロー、もっと分かりやすく言えば下手投げですね。それに転向したのが高校生の頃の話なんですけど。球筋が他の投手と違って独特になる分、やっぱり球速は落ちちゃうんですね。そうなるかどうかでも他の球種を見せて緩急・これはスピードの差ですね、を付けないといけなくなるんですよ。そういう意味ではカーブは結構いいボールでして。覚えるのに一番苦労した球種だった分、これを覚えたら世界が一気に変わりましたね。カーブをちらつかせて空振りを取れるようになりましたし、ストリート狙いの打者の裏をかくこともできる。カウントを取るのにもちょうどいい球だから、これが使えないとなると大変です」

ちよつと長々しくなっちゃいましたけど、と碌郎が付け足す。それに感心した様子で、黒鷲座は何度も首肯してみせた。

「碌郎がそんなにペラペラ喋るの初めて見たかも」

「感動するのそこなんですか!」

「とはいえなるほど、アンダースローにはアンダースローなりの戦い方があるよ」

「まあそんな感じですね。今の時代、アンダースローは貴重ですから重宝されますよ。ぜひ『とりから』さんもアンダースローに挑戦してみてはどうでしょうか。ところで先輩は何の球種が一番大切なんですか?」

「僕は……そうだな」

唸り声を上げながら黒鷲座は深く思考する。黒鷲座の球種はプロの中でもかなり少ない方だ。しかし、もしかするとその球種一つ一つが必殺の球であるとしたら?もしそうなら彼はその狭間で何が一番

重要なのか、悩んでいるかもしれない。子供からの質問に対しては真面目に考えるんだな、と碌郎は感心していた。

「やっぱりストレートかな」

「え？」

「え？」

二人の間に疑問符が浮かぶ。予想だにできなかった回答に驚く碌郎と、その反応に首をかしげる黒鷲座。ブルペンはその二人の微妙な空気に包まれていた。

「……いやいや、この子は変化球を投げられるようになりたいって話してたじゃないですか。その流れで行くなら普通変化球になるものだと思いますけど」

「分かってないなー。』とりから』君も碌郎も」

ちつつちち、と黒鷲座は舌を打ちながら指を振る。何だコイツ。本日何度目かも分からない苛立ちを胸に抑え込みながら、碌郎はひとまず話を聞いてみることにした。

「まあ話だけは聞いてあげますよ。くだらない理由だったらいよいよぶっ飛ばしますけどね」

「あれ、碌郎何だか今日は過激じゃない？」

「今日だけで黒鷲座さんへのヘイトが一気に上がりましたから」

「そんなかき氷食べさせられたくらいで大げさだな」

「食べさせたってとうとう白状しましたね。……それで、ストレートを選んだ理由は何なんですか」

「考えてもみろよ碌郎。一部例外はあるが、ほとんどの投手の投球割合を占めるのがストレート、もしくは速球だ。いくら軟投派といっても大体40%。つまり5球に2球はストレートを投げる計算になる。碌郎、お前のストレートの割合はどのくらいだ？」

「まあ言われてみれば確かに僕も5割くらいでストレートを投げますけど」

「でしょ？そんなに高い割合を投げるんだから一番狙われやすいボールなんですよ。もしかしたらもう監督が誰かに教わっているかもしれないですけど、ストレートに振り遅れないようにするのはよく

言われてる話ですね」

「あー、そうですね。僕も高校時代、そんなことをコーチから言われた気がします」

「だから僕はやっぱりストレートに落ち着きますね。スカウトも結構直球に関してみる人が多いですよ。どれだけいい変化球を持つても基本はストレートですから。だからプロの投手になりたい！と本気で思うならまずは直球を磨くことですね。ウイニングショットとかは二の次でいいんです」

「なるほど、ちゃんとした理由あつてのことなんですね」

「あとただ速いんじゃないですか。ボールの伸びとか制球とか、最近で言うなら回転数とか。今は質が重視されますからね」

「プロではよく言われますよね、必要なのはスピードじゃなくて質だとか」

「一番大事なのはコントロールですね。とにかく失投を減らす事、それが一番の近道です」

「やっぱり技巧派は言う事が違いますね」

「碌郎だって技巧派の癖に」

「へへへへへへ」

「あ、そろそろまたCMの時間みたいです。それでは一旦コマースャル入りまーす。次は試合の解説でもしましょうかね」  
「うっ」

「どうした碌郎」

「試合の事を考えると……胃が痛くなってきました」

「ふーん、かき氷のせいなんじゃね？」

「鼻ほじんな。だとしたら既に拳が出てますよ」

## #1 part 4

「それじゃCMも明けた事ですし、そろそろ野球選手らしく試合の解説でもしますかね」

ブルペンからは試合の中継映像を見る事ができる。とはいえ、見る事が出来るのは黒鷲座たちだけで、テレビの視聴者でもそれを見る事はできない。他の局が放送しているものだから仕方がないとはいえ、やはり映像が無いと参考にはならないだろうか。そう考える黒鷲座の横では、緑郎が深々と首を垂れながら何やらぶつぶつと呟いていた。

「もうダメだ……おしまいだあ」

「早くも緑郎がグロッキーになってますけど、まあ放っておけば勝手に直るので大丈夫です」

「そんな人を家電みたいに、って駄目だあ上手い事例えられない。終ってる、プロ野球選手としてもテレビに出る人間としても」

「はい、試合は4回の裏ですね。うちの先発の那須選手はここまで1失点。ここまではブルーバースが3点リードしていますね。まあそこそこの調子といったところででしょうか。開幕投手ですし、これくらいはやってもらわないと困りますけど」

「……でも那須さん、ここまで毎回ランナー背負ってるんですよ。球数も70球くらいいつてましたし、上手く見積もって7回、6回投げられればいい方ですね」

緑郎は顔を青くしながらも、落ち着いて分析する事が出来ている。多少動揺してもいつも通りを崩さない事、これもプロ野球選手にとつ

て重要な要素だ。

「お、そこらへんは冷静に見れるんだな。偉いぞ緑郎」

黒鷲座が感心し、緑郎の頭を撫でようとする。が、緑郎はそれを右手で振り払った。

「茶化さないでください。……まあ自分が登板するかもっていう状況には敏感ですから」

「ピンチを背負ったところで緑郎に出番が回ってくるかもな」

「それが嫌なんですよ……何でいつもいつもピンチで登板しなきゃいけないんですか。こちとら毎回心臓止まりそうになるんですけど。あれ何かの嫌がらせですか、嫌がらせですよ。強いプレッシャーをかけて僕の事を使い潰す気なんだ……入る球団間違えた……」

緑郎はそう嘆くが、恐らく他の球団に入団したとしても彼の運命は変わらないだろう。今こそこんな感じだが、実際ピンチで登板するときの緑郎のマウンド度胸は黒鷲座からしても目を見張るものがある。

「その内良い事あるって」

「そういう中途半端な慰めが！一番人を傷つけるんです！」

いよいよキレイたよ。キレイやったよ。おいおい逆切れだよ。黒鷲座は呆れながら思った。人の事をめんどくさいとか性格悪いとか何だか言ってたけど面倒くささで言えば君も大概だろ、と。

「先輩はいいですよね……延長戦じゃない限り投げるのは9回だけって決まってるんですから、僕なんていつ投げるか分からないんで常に



戦々恐々ですよ」

「ま、それが嫌なら早いとこクローザーの地位を勝ち取る事だな。まあ俺が移籍するか引退してからの話になるだろうけど」

「う——わ嫌な言い方。でも今のところそれが事実だから言い返せないのが一番腹立つ……。はあ、もうやだ、移籍したい」

「あ、そんな事を言っている間に攻撃終了しましたね。相手の先発もまがりなりにも開幕投手ですから仕方ないとはいえ、我々投手陣としてはもっと余裕が欲しいところです。ほーら、碌郎の出番が刻一刻と近づいてくるよ」

「ああああああ……」

碌郎が登板するのは大体リードしているとき、なおかつチームがピッチを迎えた時だ。今日の先発の那須はのらりくらりとかわしてはいるものの、それもいつまで持つか分かったものじゃない。そうなれば碌郎が危惧していたようにランナーを背負った状態で登板するのも十分に起こりうる事だ。

「本当に反応が面白いな碌郎は、多分一生いじっても飽きないわ」

「他人事だと思って……」

「だって他人事だし」

「言い返す気力も起きない……」

そんな事を話している内に、ブルペンに電話がかかってくる。試合は現在5回表。この状況で電話がかかってくるという事はつまり。

雑談ではない。そういう事だ。

「ロク、準備しろ」

電話を受けたブルペンコーチが淡々と告げる。ロク、というのはコーチから呼ばれている碌郎のあだ名だ。名前の頭を部分をとって、ロク。安直だけど、あだ名なんてそれくらいがちょうどいい。

「はい……」

意気消沈した碌郎が体を動かし始める。黒鷲座はその背中を思い切り叩いてやった。

「痛って！何すか先輩！」

「まあいつもの事だけどそんな固くなんなよ。いつも通り投げれば大丈夫だって」

「……そうですね。まあ出来るだけやってみますよ」

「試合は他の皆さんテレビかラジオで見ているでしょうし、カメラさん。碌郎の事映してやって」

軽いストレッチを済ませ、碌郎がブルペンのマウンドに上がる。息を大きく吐いて、ボールの握りを確認する碌郎の姿に、カメラの標準が合わせられた。

「さあ今からは碌郎が普段どのように準備しているか、その裏側にピントを合わせていきましようか！」

「……せっかくなさっきの言葉に感動したのに。そう言われると余計緊

張するんですけど」

「まあまあ、碌郎はいつも通りやってくれればいいから。僕らがそれを勝手に解説するだけ、それでいいでしょ」

「はあ、どうせ何を言っても聞かないでしょうし、もうそれでいいですよ。それじゃストレート行きます」

そう言つて碌郎が投球フォームに入る。投球フォームと言っても碌郎の場合ランナーがいる状況での登板が多いため、動きは至ってシンプルだ。入団当初はもつとゆっくり構えてから投げていたが、プロでの経験を経てモデルチェンジしている。そうして下から繰り出されたボールは、唸りを上げてキャッチャーミットへと収まった。

「……よし」

「見ましたか今の投球、そして碌郎を！アンダースローっていうのはものすごく軌道がキモいんです！何せ下から投げるんですもん！それで見てください！碌郎の表情！さっきまで子羊のように震えていたのが嘘のよう、今じゃもうキリツとしてる、カッコいい！皆さんに見て欲しかったのはこの表情なんですよね！」

「ちよ、先輩」

「いや、今のストレートは凄い軌道でしたね！ラジオで見れなかった皆さん、どうか音だけでも覚えて帰ってください！」

「先輩」

「ん、どした碌郎」

「そこまで行くと恥ずかしいです」

「……あ、そう。いいと思ったんだけどな。はいCM入りまーす、次映る時には禄郎がもう登板しているかもですね」

「そんな縁起でもない！」

## #1 part 5

「次、カーブでいきます」

これで6球目。投げられたボールは一瞬浮いたかと思つた矢先に横滑りしながら沈んでいく。ワンバウンドするその球をブルペンキャッチャーが掴んだ。

「……あ、もう回つてる？えー、ごほん。今は緑郎のピッチングに注目している所ですね。見ての通り、つて言つてもラジオの人は見れないか。まあ見れば分かるんですけどアンダースローは変化球も厄介なんですすよね。総じて言えば全ての球種がキモいです」

「何かデイスる声が聞こえたんですけど」

「気のせい気のせい。さて、試合の解説に戻りましょうか。五回裏の攻撃があつさり三人で終わつて、今は早くも六回の表ですね。あ、打たれた。せつかくーアウト取つたのもつたいたいない」

「今度はシンカーで」

黒鷲座の声をよそに、緑郎は淡々とボールを投げ込んでいく。額にじむ汗をぬぐつた。体中に熱が走り始める。そうだ、この感覚。この熱気がいつだって自分の事を燃え上がらせてくれる。

「那須選手はちよつと体力的にキツそうですね。ボールのコントロールもあまり定まっています。だからこうしてカウントが悪くなつて……ほら、四球を出した」

テレビの中では投手コーチたちが輪を作っている一方で、またブルペンに連絡がかかってくる。これでまた打たれるようならいよいよ

交代、という事なのだろう。黒鷲座はブルペンで準備をしている。緑郎に視線を飛ばす。肩はかなり温まってきたようにだし、いつ登板しても大丈夫そうだ。

「さあ初球、ここの入りは大事ですよ……おおっと打たれた！うーん悪い球ではなかったんですけど、ボールが高くなっちゃった分外野手の前に落ちちゃいましたね。二塁ランナーが生還してこれで2点差です。監督が上がってきて……投手コーチがボールを受け取りました。あーやはり交代ですか、ここで交代になります。那須選手は試合こそ作ったんですけど、ここでの降板は悔やまれますね。さあこの状況で登板するのは……？ん我が誇るサブマリン！石清水緑郎だあー！」

「……よし、行ってきます」

軽く水を口に流し込んで、緑郎がゆつくりとブルペンを出る。撮影陣も、黒鷲座も、その背中に対して拍手を送った。

『投手交代をお知らせします。ピッチャー那須に代わって石清水。背番号19、石清水緑郎が上がります』

観客たちが拍手で帰ってくる那須を迎える。その裏で緑郎に対する拍手は少ない。まあ、たかが中継ぎに対する声援なんてそんなものだ。だけどそれでいい。それくらいの期待感で見えてくれた方が緑郎にとっては丁度心地よいプレッシャーだ。

「いいねえ、やっぱりこういう痺れる場面で登板するのはリリースの特権ですよ。まあ僕はやりたいとは思いませんけど」

おら、笑えよ、という視線を受けてまばらな笑い声が撮影陣の間で起こる。

「緑郎が投球練習している間は暇なんで、ブルペンコーチでも呼びますか。おーい、仲次なかつぎコーチー！こっち来て話しませんか〜！」

「断る。大体俺は電話を受けるので忙しいんだ、他当たれ」

と言われても7回を主に投げるカイルも、8回に投げる予定の北きたも既にブルペンで準備し始めている。

「ちえっ、つれねーでやんの。大人ってのは嫌だねえ、理詰めで頭がカチカチになっちゃう。おっと、そんな事を言っている内にいよいよ緑郎が投げる番が来ましたね。相手は右打者、きつと初球を狙ってるからここは入りに気を付けたいところですね」

緑郎が深呼吸してサインに頷く。その初球、打者の胸元近く、つまりインハイへボールを投げ込んだ。際どい球だったが、審判がストライクをコールする。

「お、いきなり厳しいコースを攻めてきました！これはバッテリーも強気ですね。ここはゴロを打たせてゲッツーを取るのが理想でしょう。……さあ三球目、投げた！キタキタキタ！これは注文通りの打球！はい、4！6！3！ゲッツー——！さっすが緑郎、たった三球でゼロに抑え込みました！ここからも聞こえるでしょうか、球場は大きな拍手に包まれています！見たかファンの皆あ！これが石清水緑郎だあ！」

ちよつと興奮気味に言ってしまったし、これはラジオ中継っぽいのか、と黒鷲座は若干後悔していた。だがしかし、チームの危機を救って見せたのは事実だ。これぞ完璧な火消し、緑郎の真骨頂。これを評価せずしてどうする。ベンチで熱い歓迎を受ける緑郎を見ながら、黒鷲座は喋るのをやめない。

「……ん、ゴホンゴホン。すみません、少し興奮しました。とはいえこれが石清水緑郎選手のすごさです。皆さん名前だけでも覚えて帰ってください。ちよつとプロっぽい事を言うなら、最後の球はシンカーですね。右打者の手元に沈んでくるボールで、打者はストリートと錯覚したんじゃないでしょうか。最初の一球が上手くいった結果です、これはバッテリーの勝利でしょう。あ、じゃあ次は軽い運動がてらストレッチの話でもしますか」

「はい、まあ僕がいつもやってるメンテナンスはこんな感じですよ。えー試合に戻りましょうか。今は6回裏の攻撃中なんですけど、まあもうワンアウトだし下位打線なんですぐ終わるでしょう。……え、そんな事言うなって？仕方ないじゃんウチの下位打線の弱さなめんなよ。あ、テレビをご覧の皆様には分かるでしょうが、何と登板直後の緑郎が帰ってきてくれます！いやー緑郎、ナイスピッチング。ところでベンチにいらなくて良かったの？」

「まあ代打送られるしうちのリリーフ、七回からは特に鉄壁なんで大丈夫でしょう。それとも何ですか、抑える自信がないんですか？」

「あ、今喧嘩売った？そりゃあ抑えるよ、当たり前じゃん抑えますよ」

「言いましたね？絶対ですよ？」

「分かってる分かっている！あ、そんな事言ってる間にもうツーアウトですね。このペースじゃもう終わりそうですね。んー次の打者が初球ピッチャーゴロ。……ほんつとウチのチームが守備力と投手陣で勝ってるのが分かりますね」

「いや放送中にそういう事言うのはまずいですって！下手したら干されますよ!?!」



「さあ七回のマウンドにはカイル投手、大きく縦に割れるカーブが武器のピッチャーですね」

そんな話を話している内に、ブルペンに電話がかかってくる。ブルペンコーチの仲次がそれを受けると、何やら話し込んだ後に黒鷲座の元へと歩いてきた。

「ハジメ、準備だと。肩作つとけ」

「え、いやでも視聴者には8回までやるって」

「二度は言わんぞ、仕事はちゃんとやれ」

「……分かりましたよ。あー分かりました、やりますよ。でもちよつと次回予告だけさせて下さい。はい、祿郎後は頼んだ」

そう言つて黒鷲座が席を立つて肩を回し始める。グラブを手にはめ、軽くその場で足踏みをしはじめる。今から準備、と言つた感じだ。

「ええつ、僕ですか!? あ、これ読めばいいんですね。えー次回のゲストは『経験豊富なベテランリリーバー』芝崎<sup>しばさき</sup> 怜司<sup>れいじ</sup>選手です。はい、じゃあ次回お楽しみにー……これでいいですか?」

「ん、オーケーオーケー。じゃあ次回は明日のデイゲームですね! はい、じゃあお楽しみにー!」

## 絶対零度のクローザー

「ごおん、ごおん、ごおん。三度、低い鐘の音が聞こえた。それが聞こえるやいなや、すぐごと球場を去っていくアウエーのファンの姿が見られるようになる。残っているファンもファンで、顔を青くしている。これはある選手の登場曲だ。曲、というにはシンプルすぎるが。一方でブルーバードズのファンのテンションは最高潮にまで達していた。球場にいる誰もが、みなあの男を待っている。」

『選手交代をお知らせします。ピッチャー、北きたに代わりまして黒鷲座くろじうざ。背番号99、黒鷲座くろじうざ一はじめが上がります。また、角井すみいに代わって扇屋おうぎや。線番号63、がキャッチャーに入ります』

そのアナウンスで、球場中が揺れた。

「くーろうざ!!くーろうざ!!」

場内は黒鷲座の大合唱だ。しかし当の本人はそんな事に眉一つ動かさず、ゆっくりとマウンドへ歩みを進めていく。そして同じくキャッチャーとして出てきた扇谷とクラブ越しで話し始めた。

「調子は」

「まあぼちぼちってところですよ。ストレートもそこそこで、決め球もバッチリ投げられます」

「お前の言う『ぼちぼち』は信用できんからな。何か始めたらしいが、そのせいで調子悪いとかはナシだぞ」

「ははは。大丈夫大丈夫、分かっていますって」

「ならんか」

扇谷がポジションへと帰っていく。黒鷲座は上に広がる天井を見上げながら、左の胸に手を当てた。……さあ、ここから試合を締めるのが俺の仕事だ。しつかり頼むぞ、俺の右腕。マウンドを踏みしめ、確かめるようにボールを投げる。

(何が調子はぼちぼちだ)

扇谷は今年36を迎えるベテランキャッチャーだ。その経験上、1球ボールを受ければ今日の投手の調子が何となく分かる。まあ投球練習とはそういうものを確かめるためのものでもあるのだが、扇谷の場合は観察眼に優れていた。たった数球で使えるボール、そしてその制球や球威、ひいては今日はどんなリードをするのかがいいのを見極める事ができるのだ。

(中々にクールじゃねえか……!)

さて、黒鷲座が投球練習に入っている間に彼の軽い経歴、そして昨シーズンの成績を振り返ってみるとしよう。黒鷲座一。身長184cm、体重92kg(開幕前時点)、出生は愛知県名古屋市。岐阜県の私立高校に進学し、高校を卒業後4位指名で名古屋ブルーバースに入団した。ドラフト当時は縁故採用だの地元優遇だのインターネットで好き勝手言われていた彼だが、3年後にリリーフとして初の開幕一軍を果たすと、それから一軍に帯同し続け実力でファンを黙らせて見せた。それから4年、つまり7年目となった昨シーズンも開幕一軍を果たすとセットアッパーとして好調を維持し続けた。そしてシーズン途中からはクローザーとして抜擢され、29セーブを上げる大車輪の活躍を見せる。その信頼は今シーズンになっても揺るがず、オープン戦ではヒットを一本しか許さない好調ぶりを見せつけた。そんな黒鷲座が、今シーズン初のマウンドに上がろうとしている。

(よし、肩はできたし、そろそろやつちやいますかね)

右の打席に打者が入って、審判がプレイの再開を告げる。確か彼は今年が1年目の、ピツカピカのルーキーだったと黒鷲座は記憶していた。一年目から開幕スタメンを果たすのは充分優秀な証だが、ここは現実を見せてやらないといけない。キャッチャーの扇谷から出されたサインに黒鷲座が頷く。元より、断れるほど球種があるわけでもない。黒鷲座のフォームは癖が無く、悪く言えば特徴のない標準的なフォームだ。

(OK、その球ですな)

初球、真ん中高めへのストレート。厳しいコースではなかったが、打者は手を出すのをためらったか、それとも出せなかったのか。軽く首をかしげていたのを、扇谷は見逃さなかった。今度はアウトコースいっばいのストレート。これにも手を出さず、一気にバッテリーが追い込む形となった。

(勝負は一瞬。迷ったら終わりよ)

テンポよく3球目を黒鷲座が投げ込む。今度は高め、見逃せばボールになる釣り玉。しかし打者のバットが思わず出てしまった。ボールはバットをすり抜け、キャッチャーミットに収まる。悔しそうに見える打者の事など意にも介せず、平然と黒鷲座は次の打者への準備をする。

次のところで代打がコールされた。打者は中堅、オープン戦から売り出し中の内野手だ。その初球、ストレートを狙っていたのだろうか、思ったところでボールが来ない。打者のタイミングを惑わす魔球にして黒鷲座の得意球、チェンジアップだ。完全に引っかけた打球が

ショートへと転がり、これを難なく捌いてあっという間にツーアウトとなった。

「あと一人」コールが球場を支配する。試合はもはや青一色だ。

(よしよし、丁度肩も温まってきたな)

打順は1番打者へと戻ってくる。ここまではほんの小手調べだ。ツーアウトから打たれるということも普通に起こりうるから、とにかく丁寧を心掛ける。

ここで、何故黒鷲座の球が打たれないのか解説しよう。彼の直球は平均速度145 km/h、最速が148 km/hだ。プロ野球界の平均球速が144 km/hというから、プロの中ではいたって平均的、それほど大したものではない。しかし昨シーズンの彼のストレートの空振り率は20%程度。これは歴代の中でもトップクラスに並ぶほどの記録だ。

ではなぜそこまで空振りがとれるのか。少し話がそれるが、最近の野球のデータのひとつとして重要視されるものに回転数、というものがある。これは投げたボールが一分間にどれだけ回転するのかを示すものだ。ストレートのこの数値が多いとどうなるか。打者の視点から浮き上がって見えるのだ。ストレートの回転数はプロ野球では2200回転、大リーグでは2500回転ほどが平均的と言われる。それに対して、黒鷲座の数値はどうなっているか。

「ストライーク！」

その回転数、およそ2800回転。これは海を渡って世界一の胴上げ投手に輝いた某日本大リーガー、そしてオールスターで全球直球で三振を取った事で有名な某投手の記録した2700回転を上回る

数値である。つまり、彼の直球は文字通りホップアップして見えるという事になる。先ほど彼は石清水禄郎選手のボールの軌道を「キモい」と表現したが、彼の軌道の方がよっぽど気持ちが悪い。

「ストライクツー！」

また、空振りを取った。一球ごとに大きな歓声上がる。それに対して黒鷲座は喜ぶことも、動揺する事もない。マウンドに上がった時の黒鷲座はとにかく静かだ。ただ静かに、淡々と、それが息をするのと同じであるかのように当たり前に当たり前に投げる。

（クッソ！何とかバットに当てねえとそもそもヒットにならねえ！）

打者がバットを短く持つて対応しようとする。が、そんなもので対応できるならそもそも彼が一流と呼ばれることなど無いだろう。サインに対して首を縦に振って標準的な構えから投げようとする。彼の投球はホームだろうとアウエーのだろうと関係なく敵チームのファンを凍り付かせるような支配的なものとなる。だからファンは

（こ、の野郎……!!）

「ストライク、バッターアウト！ゲームセット!!」

だからファンは、彼の事を「絶対零度のクローザー」と呼んだ。

## #2 part 1

「いやだからもう渋っても遅いって……、ってん!? もうカメラ回ってる!? そういうのは早く言つてよ! ……えーごほん、皆さんごきげんよう。ブルペン放送局、第二回の始まりでございます。まあ最初ちよっと荒れていたのは許してください。生放送にありがちな放送事故つてやつです。えー昨日に第一回を放送したわけですけども、結構その反響と言いますか、結構色んな方からお声をいただきましたね。まあそれ自体は嬉しい事なわけなんですけども、一番多かったですよ。『黒鷲座選手つてそんなに喋るんですね』つていう感想ですよ。いや皆さん僕のことどう思っていたんですかね、そりゃあ試合になったら集中もしますし静かになりますよ。まあいいや、これもある意味ギャップという事で。皆さん、萌えてください。え、男だから無理つて? うるせえ萌え萌えビームぶつけど。さて、前回と同様に前口上が過ぎました。今回のゲストを紹介しましょう。天然がウリの経験豊富なベテランリリーフ! 正に縁の下の力持ちというべき選手! 芝崎<sup>しばさきれいじ</sup>怜司選手です! はい拍手!」

「どうもー」

拍手の中、芝崎がカメラに映る。しかしそれだけでは飽き足らずそのまま彼はフェードアウトしていく。それに目を丸くした黒鷲座が立ち上がって芝崎の背中を引きずり何とか元の場所に復帰させた。

「つて違う違う! 何一般人みたいに通り過ぎようとしてんすか! さつきも言いましたけど今日のゲストは芝崎さんつて決まってるんですからしつかりして下さい!」

「さつき言つたらう、俺はそもそもこの企画に賛同してない」

「いやこの前話をしてた時はうなずいてましたよね」

「……そんな話をしたか？」

「したじゃないですか。え、もしかして忘れてたんですか？ ほら、最後のオープン戦の時僕この話をしたと思うんですけど。その時は何度も頷いてくれたじゃないですか」

「ああ、あの時か。寝てたから覚えてない」

あんまりにも堂々と言うものだから、思わず黒鷲座も一瞬呆気にとられて何も言えなかった。間が空いたのち、意識を取り戻した黒鷲座が大きく響く声でリアクションした。

「寝・て・たア!? かなり苦しいですよその言い訳は！ ……え、マジ？ マジで寝てたの？ あの時普通に試合中でしたけど」

「本当だ。俺が嘘をつくと思うか？」

至って冷静に芝崎がダンディな声で話を進める。いや、そんな格好よく堂々としても言っているのは試合中に居眠りしていたという衝撃の事実だからね？ 後で懲罰調整されても知らないですよ？ 黒鷲座は遠い目で芝崎から生えたあごひげを見つめていた。

「そんなキメ顔しても寝てた事実が変わりませんかからね？ まあいいです、寝てた罰だと思って甘んじて受け入れてください」

「……納得はいかんが、仕方ない。これもファンのためだ」

「そんな、アタシの為だったらやらないっていうの!? 酷い！ アタシと野球どっちが大事なの!？」



黒鷲座のオカマ口調に対しても芝崎は動じない。じつと黒鷲座の方を見ている。いや、見ているというかこれは……見透かしている!？ 僕の後ろに何かいるんですかね!？」

「何だその喋り方。いいから早い所話を進めるぞ」

「ちえっ、碌郎ならもうちよつといい反応してましたよ。まあいいや。とりあえず今回もお便りを呼んで行きましょうか。じゃあはいコレ、選んでください。お便りボックスです」

そう言つて黒鷲座が出した白い箱の中に芝崎は手を突っ込む。しばらく中身をかき混ぜてから一通のはがきを取り出した。

「これを読めばいいのか？」

「はい、ではお願いします」

「……えー、田中……」

「違うそこじゃない！ 本名呼んじやだめだから！ ほらペンネームあるでしょー！」

「あ、これか。ペンネーム『幸せの青い鳥』さんから。『黒鷲座選手、芝崎選手こんにちは』」

「うーす、こんにちはー！」

『私は現在草野球で投手をやっています。そこで質問なのですが、お二人が投手を始めたきっかけを教えてくださいませんか』……だつてさ黒鷲座」

黒鷲座は少し考える仕草を見せながら、こう思った。多分先に芝崎が投手を始めた理由を話した方がウケるんじゃないかと。だから自分はまだ思いつかないふりをして、先に芝崎に話させようとした。

「うーん……先に芝崎さん言ってもらえます?」

「……俺か?俺の場合はそりや楽だったからかな」

「おっと、今野球をやっている全方位に喧嘩を売るような発言が聞きましたけど。まあ話は最後まで聞きましょうか」

場合にとつてはとんでもない爆弾発言だ。この人は試合中に寝た事といい今の爆弾発言と言いこれが放送されているという危機感が無いのか?

「俺が投手を始めたのは高校2年の時の話だ。投手の頭数が足りないから、なんて理由で監督に勧められた。それからの練習は楽だった。基本的に走る事以外は投げるだけでいいからな。打つことなんてほとんど考えなくていいし楽だった。幸い俺は大学に入ってから目立った成績を残せるようになって、こうしてプロにいるわけだが」

「高校野球って投手も打席に立ちますよね。そこんとこ大丈夫だったんですか」

「監督には『とにかく投げる事に集中しろ』と言われていたから、打席では何も考えなかったな。それでも打てたし」

「はあ、これだから才能マンは嫌ですよねえ」

「で、お前は?」

「僕はですねえ、野球というスポーツにおいて投手程強いポジションはないと思っただので。ほら野球つて三割打てれば万々歳じゃないですか。ということは、ということはですよ？ 悪くても七割の確率で投手が勝つんです。それつてもうほとんど投手有利ですよ。うえーい野手の皆さん見ってるく!? 野球は投手のスポーツですよく!?」

「お前もお前で大概野手に喧嘩を売っていないか？」

「これは愛のある煽りなんでセーフです！ それでもまあ打たれる時は打たれるんでそこは割り切りが必要になりますね。あ、そろそろCM入るそうです。いきなり波乱というか放送事故みたいな開幕を迎えました。番組はまだまだ続きます！」

## #2 part 2

「はい、ではやってまいりましたブルペンラジオ。引き続き視聴者の方々から寄せられたお便りを読んで行きましょう！ 先ほどは芝崎さんに読んでもらったので、今度は僕が読んで行きましょうかね。なっに出てるかな♪ なっに出るかな♪ はいこれ！ えーペンネーム、『ハラミ先生』さんから。この前の『とりから』君といいみんなお肉が好きなのかな？ みんなお肉大好きだろうけどちやんと野菜も食べましょうね、あと大きくなりたいたいなら米食え米。実はうちの実家米農家なんで、がんがん消費して日本の農業を守っていきましよう。はいそんな事はどうでもいいんですよ。送ってくれたんだからありがたく読みましようね芝崎さん」

「え、何？」

「どうやら芝崎さんは耳に水でも入ってるようですね。ほつといて質問に入りましょう。『黒鷗座選手、芝崎選手、こんにちは』、はいどうもこんにちはー、ほら芝崎さんも手振って」

「そういうのはお前に任せる」

「ええい、ごちやごちやうるさいわ！ これもファンサービスなんだよー」

黒鷗座の言葉に少し不満そうな表情を見せるも、ファンサービスという言葉に反応したのかため息をついてカメラに向けて手を振り始める。

「ファンサービスって言っとけばほとんど何でもする当たり芝崎さんって思いの外チョロいっすね。まあいいや、続き話します。『僕は野球は未経験ですが、野球ゲームが好きな高校生です』、はーなるほど

僕も好きですよ野球ゲーム。特に選手のデータを見てこの能力は違  
うだろっていちやもんを付けるあたりが特に」

「性格悪いな」

黒鷲座が眉をひそめる。アンタもアンタでかなりの天然でしょう  
が。そういう人の方がよっぽど扱い難いんだぞ、現に今僕はアンタ  
の扱いに苦労しているんだし。

「まあよく周りからはそう言われますが。野球選手は素行で問題さえ  
起こさなければ別に性格なんて多少悪かろうがどうだっていいわけ  
ですよ」

「お前そんなだから女性人気ないんだぞ」

せつかくいい事を言ったのに水を差すんじゃない。というか既婚  
者は黙ってやがれ。黒鷲座、性格が悪いというか子供よりである。

「うるさいなあちよつと声がいいからって調子乗んなよ！ ……ごほ  
ん、失礼しました。続きですね。『その中でも特に好きなのが今はや  
りの野球ソシャゲのプロ野球スターズというゲームで、よく他のユー  
ザーと対戦をするのですが、黒鷲座選手の能力が弱すぎます！ 黒鷲  
座選手からも何とか言ってやってください！ 後、芝崎選手は強い  
のでよく使っています！ これからも頑張ってください！』だそうで  
す。良かったつすね芝崎さん、ついで程度ですけど」

「……そもそもプロ野球スターズってなんだ？」

純粋な疑問——。芝崎怜司、33歳、既婚、これまで野球一筋で  
やってきた男。彼が若いころにはソシャゲはあったかもしれないが  
スマホなんてものはまだ黎明期である。ゆえにゲーマーでない以上

知らなくても当然といえば当然の話ではあるのだが。

「あー、そこからっすか。面倒くさ……いえ、何も言っていないですよ。ほんとほんと。だからその疑いと軽蔑に満ちた視線を送るのやめてもらっていいっすか」

説明しよう！ プロ野球スターズとは！ 今野球のソシヤゲの中で最も売れているゲームと言われている（他に競合するゲームがほとんどない）！ 実在の選手達をガチャで手に入れ、自分だけのオールスターを作り上げようというゲームである（ここまでゲーム説明文）！ イベントなども様々行っており、そのフォームの再現度の高さから選手達からの人気も高い。さらに前述の通り他のユーザーともリアルタイムで対戦が出来るなどファンを楽しませる要素も多い。

「……まあ大体そんなところです。分かりましたか？」

「そんな事より普通に野球した方が楽しくないか……？」

「ちよつと身もふたもない事言うのやめてもらえますか？ これ一応ゲームの親会社色んなチームのスポンサーやってるんすよ。それ言っちゃうと球団から怒られちゃうかもしれないんで」

「……野球ゲーム、楽しい」

「それも言うわされている感半端ないんですけど、かえって逆効果なんですけど。あーもういいや、こんなオールドタイプのおっさんは置いといて答えましょう。実は僕もですね、軽ーくなんですけどこのゲームやってるんですよ」

今はスマホ鞆にあるんで見せられないっすけど、と黒鵜座が付け足す。

「まああのゲームに関しては言いたいことも色々ありますけど。ゲームだから仕方ないとはいえ普通の配球が通用しないすよね。さんざんインコース意識させても外角のボールに踏み込んでくるんですから」

「なるほど、全員が好打者になると。それは厄介だな」

「まあそんなところですよ。つってもウチのチームの選手は弱いもんですよ。長距離砲が外国人くらいしかいないものだから、ホームランが大正義なこのゲームにおいてはよほどファンじゃない限り打者が使われる事は無いですね残念なことに。唯一<sup>り</sup>選手が足の速さとパンチ力から使われることが多いらしいですけど」

「それで手紙で言われていたお前の能力が低いというのは」

「あー、このゲームのウリはやっぱりプレイヤー同士の対戦なんですけど、僕そのモードで全く使われないんですよ。本人の僕ですら使わないレベルなんで相当ですね。何でかって言うと球種が少ないんですよ。えー確かストレート、スライダー、カーブ、チェンジアップ。このゲームでのチェンジアップは変化量関係なくすごい弱いんであんまりというかかなり弱いですね。まあさらに言うならスライダーもカーブもそんなに使わないけど、つとそんな事言ったらまた能力下げられちゃいますね。せめてストレートが上方向に変化するよう設定してくんないかなー、みんな僕のストレートは『浮いて見える』って言ってくらいだし」

「よく分からんな」

「ま、所詮ゲームはゲームですよ。それで芝崎さんが強いって言われるのはツーシームを投げられるからですね。あのゲーム速いボール

が強くて、それが変化するとなればなおさら強いんですよ。芝崎さん  
よくツーシーム投げてますよね」

「そうだな、結構よく投げる」

「つまりはそういう事ですよ。あーあ、僕もめっちゃくちゃ強化入らな  
いかなー！ ……あ、そろそろCM入るそうです。それでは皆さん、  
チャンネルはそのままです！」



## #2 part 3

「今日も今日とてお水がおいしい！ ってなわけ続き、やっていきましよう！ えいえい？」

「……」

「えいえい？」

「……」

「言うまでこの下り続けますからね？」

「……やー」

いや違うでしょ。ちーがーうーでーしよー？ 恥ずかしかつてい  
るのか、芝崎は微妙に言葉をずらしてきた。もう一回やってやろうか  
と黒鵜座は思ったが、流石にそれでは視聴者も飽きてしまう。よって  
話を続けることにした。

「はい、では元気にやっていきましょうかね。引き続きはがきを読ん  
で行きましょう。えーでは……ペンネーム『100股男』さんから。  
ペンネーム大丈夫？ どこかで天誅とか食らいそうな名前じゃない  
？ ……まあ大丈夫か、どうだろうと僕には関係ない事だし。とりあ  
えず内容の方読んで行きましょう。『黒鵜座さん、芝崎さんこんにち  
は』、はいどうもこんにちはー」

「……やー」

「芝崎さん？ そのくだりはもう終わったんですけど？ 大丈夫です  
かね本当に。えー、なにになに？ 『僕はサラリーマンとして働くかた

わら、家に帰るとビールを飲みながらブルーバードの応援をしています』ってことはヘビィユーザーですね。こういう人は球場でもよくビール飲んでお金を落とすんで貴重ですよ大事にしてきましょうね  
芝崎さん」

「俺はビールよりも焼酎派だ」

——話が全くかみ合わない二人。ひよつとすると芝崎さんは天然というかただの馬鹿なのかもしれない。というか球場に焼酎なんて売ってないよ。よくてビールかサワーくらいだよ。

「よーしこういうのはスルーするのが一番ですわねそうですね！はい、脱線したのは僕です。すいませんでした！『そこでお二人に質問です。ぶっちゃけてお二人の苦手な打者を教えてください！』……なるほど、シンプルで答えづらいものが来ましたね。こういうので具体的な名前出しちゃうと打たれそうなんであんま言いたくないんですよ。というわけでちよつと申し訳なくはあるんですけど、具体的な名前は出さずに『こんなタイプの打者は苦手だ』という方向で答えていきましょうか、はいではまず芝崎さんから！」

「俺か。俺は……そうだな。やはり長打力のあるバッターが苦手だな。例を出すとすれば東京ヤンキースの鳩ヶ浜選手とか、別リーグだと大阪オリオールズのマッケンジー選手とかか。ああいういかにもスラッガー、という選手に一発が出ると相手チームに活気がつく。それに俺たちリリーフにとって一点というのはあまりに重いものだ。どれだけ投手有利のカウントに持ち込んでも本塁打一本で勝負が決まってしまうと、何かこう、がつくりと来るものがある」

「なるほど、確かに一理ありますね。まあ僕もホームランバッターは嫌いですよ。迷いなくバットをぶん回してるところとか正に蛮族ですよ。もつと品のあるバッティングをしてもらいたいもんです

よ。じゃあ品のあるバッティングなら打たれてもいいかって言われるとそうじゃないんですけどねー」

「で、お前はどなんだ」

「あーそうですね。芝崎さんが名前出しちゃったんでこっちも名前出さざるを得なくなったんですよ。本当、どうしてくれる」

さつき名前出すと打たれそうだからやめようって言いましたよねー、と黒鷲座が視線を向けるも芝崎はどこ吹く風だ。気にすることちが馬鹿なのか？ そんな事はないとは思うけども。

「じゃあこういうタイプ苦手だなーっていうのから発表していきましようか。僕が苦手なのはやっぱり選球眼のあるバッターですね。いや別に僕のコントロールが悪いわけじゃないんですよ？ ただよく打者に対して釣り玉を投げる事が多いんですよ。この球は振ってくれー、って感じの。分かります？ 多分中継で見ている人なら分かると思うんですけど。そういうボール球を振ってくれないと配球が成り立たなくなると言いますか、まあ自分の思い通りに行かなくなるんで嫌いですね」

「あ、そのスタッフ。水とってくれるか」

「……って大丈夫ですか」

芝崎はコップに入った水をグイッと飲み干し、サムズアップして見せる。違うんだよ喉が潤ったか聞いてるんじゃないやなくてね？ そこは別に誰も心配しないからね？ 昭和脳っぽい事を言うけど人が話しているときに水を飲もうってというのが問題なんだよ。むしろ芝崎さんの方がそういうの分かるんじゃないの？

「それで苦手な打者は誰なんだ」

「もう気の赴くままに暴れまくりじゃないですか。何かこれで言うど芝崎さんの指示に従ったみたいで嫌なんですけど！……まあいいですよ苦手な打者ですね。これ毎回意外って言われるんですけど、広島レッズのカッチャー・小西選手こにしですね」

「小西って確か通算打率2割前半じゃなかったか？ 球界屈指のクローザー様の苦手な打者がそんな相手とは意外だな」

「え、何て？ 球界屈指の？ ん？ そこ良く聞こえなかったんでもう一回言ってもらえます？ まあ冗談はその辺にしておいて、実はこれ事実なんですよ。通算対戦打率何割だと思えます？」

「相性が悪いと言うのなら……3割位じゃないのか」

「だと思えますよね？ ところがどっこい、何と打率は丁度5割！5割ですよ奥さんー！」

「ほう、それは中々に重症だな」

「いや本当何て言うでしょう。僕が手を抜いているわけでもないし、かといって小西選手の読みがすごいとかそんなんじゃないんですよ。ただ……あの人良くボールの上を掠めての空振りが多い選手みたいです。僕の浮き上がるストレートと多分相性がものすごく悪いんですよね。こう言うのは失礼なんですけど、あのこんにやくみたいなのスイング（※誉め言葉です）がボールに合うんですよ。それはそれともう嫌になりますよ！」

「随分恨みがこもってるな」

「だってあの入ただでさえ打つのに得点圏になるとバカみたいに打つんだもん！ メジャーリーガーよりよっぽど怖いよ！ と、お互い弱点をさらし合ったところでぼちぼちCMの時間でえす。……これで今度の対戦打たれたら本当に芝崎さんのせいにしてようと思いまーす！」

「俺は知らんぞ」

## #2 part 4

「試合は五回の裏まで来ていますね。ここまで両先発共に2失点、そこそこの好投を見せています。ただうちとしては昨日勝利の方程式を使っちゃってるんでどーですかね、先発の宮内選手が6回まで投げしてくれるとして、そのどっかで芝崎さんが投げるかもですよ。はい、そんな真面目な解説からやってまいりましたブルペンラジオ。メイパーソナリティーは僕、黒鷲座一とゲストはそこに座っている芝崎伶司選手で引き続き送っております。それではお便りを読んでまいりますよ、じゃあ芝崎さんが引いて僕が読む形でいきましょう。では早速ヒュイゴッ！」

はい、じゃあこの中からお願いします！ といつものように黒鷲座が取り出したるは白い箱。この中にリスナーたちの夢と希望（質問）が詰まっている。芝崎はそれに手をつっこんで、2枚ほど取り出した。

「すまん、二枚出てきた」

「おおっとこれは珍しいですね。……一応聞きますけど、わざとではないですよね？」

「当たり前だ」

まあこの人がそんな器用なことするわけも、わざわざ二枚取る理由もないか。変に構えるだけ損なんだろうな、多分警戒する僕が悪い、うん。首をかしげる芝崎を見て黒鷲座は肩を落とした。

「いいでしょう。片方だけ読まないというのも可哀想なので両方読んで行きましようか。まず一通目エ！ えー、ペンネーム『弁当の中に入っている緑色でギザギザのアレ』さん。はーなるほどね、中々ユ

ニークな名前が来ましたね。いやー僕はその名前分かりますよ。緑色のアレですよ。心配しなくてもちやーんと分かっていますよ。まあでも最初に言っちゃったらもつたいたいですよね、だからここはあえて？ 芝崎さんに聞いてみましょう。芝崎さん、何て名前だと思います？」

「……食用緩衝材？」

※バランスです。

「考えてた時間返してもらえます？ あと何ですかその無駄にカツコいい名前。食べられないですよ？ まさか芝崎さん食べたわけじゃないですよ？ マジで子供が真似しかねないのでやめてくださいよ。えー正解はですね。グリーンベレーです」

※重ねて言いますが、バランスです。

「はい、いつも通り話が脱線したところで本題に入っていきますよ。えー『黒鷲座選手、芝崎選手こんにちは』、どうもこんにちは。『いつも楽しく家族で試合を見ています！』、ありがたい事ですね。こういうファミリ層に人気があるのは大変喜ばしいことです。『そこで質問です。お二人の仲のいい選手を教えてください』……とのこと。なるほど、仲の良い選手ですか。僕の場合は投手でいうとよくつるむのは緑郎、あつこれじゃだれか分からない人もいるかもですね。えー石清水選手ですね。彼はなんだかんだ言いながら結構人付き合いがいいというか、僕が多少無茶を言っても合わせてくれるんで必然的によく一緒にいる感じです。第一回の放送のゲストもまあ彼が受けてくれなかったら誰も受けてくれなかったでしょうね」

石清水緑郎。アンダースローから繰り出す変幻自在の投球で打者を惑わす火消し役。もつと彼のことを知りたければ第一回の放送を

プレイバックしよう！

「それで野手で挙げるとするならやっぱり扇谷選手ですね。よくバッテリーを組む立場な以上、会話する機会も勝手に増えていくといいですか。それで自然と噛み合うようになっていつて。やっぱりバッテリー間でのコミュニケーションは必要だとひしひしと感じますね。まあちよつと顔が強面なんで勘違いされる方も多いかもしれないですけど、普通にいい人ですよ。あ、顔怖いは余計か。でも時々ご飯おごつてくれるし、キャッチャーとしての実力は折り紙付きだし。で、芝崎さんはどうなんですか？」

芝崎はあごひげに手を当て、しばらく考え込む姿勢を見せる。そういえばあんまり芝崎が特定の人と話しているのは見た事がないな、と黒鷲座は記憶していた。一人でいるのが好きそうではあるけれど。

「そうだな……強いていうなら外野手の李選手か」

「え、え——……」

「何だその反応は」

「いやだって二人ともそんな話すタイプじゃないですよ。何話するんですか、つていうかどこ行くんですか」

「話してみると意外とウマが合つてな。最近は激辛料理が有名な店によく行くんだ。韓国出身という事もあつて結構そういうものに対しては厳しくてな。『これくらい、韓国ではジョウシキね』とか前言ったぞ」

「その時は何食べたんですか」



「俺は回鍋肉で、李は確か……麻婆豆腐を食べていたな」

出てきたのはまさかの中華料理——。これには黒鵝座も苦笑い。

「アレですか、ツツコミ待ちなんですか？」

「？ 何が？」

「今日の放送ではつきりしましたね。芝崎さんが結構なアホだつて事が。これ放送して大丈夫ですか、今お茶の間であなたのアホさがさらされているんですけど。あーもういいや僕しーらね。次行きましよう。ペンネーム『恋のキューピッド』さん。一文だけ書かれてますね。えーなにになに？ 『彼女いるんですか？』、……随分下世話な自称天使が出てきましたね。いいの？ 恐らくこれ今日最後の質問だよ？ というか芝崎さん既婚者ですよ。あ、でも週刊誌とかに暴露されるくらいならいつそこでも言つといた方がいいですよ。芝崎さん、何か一言！」

「心配せずともそんな事はない」

「良かったです変な事言わなくて。あ、僕は未婚というか相手いないというか募集中というか。何故かそういう人は寄つてこないんですよね、こんなにイケメンなのに。おかしいと思いませんか？ 思わない？ あつそう。言っておくと好きなタイプは週刊誌にリークとかしない人ですね。スキャンダルとか選手のイメージめっちゃ下がりますからね。でもそれはそれとして彼女は欲しいです。えー丁度いい所ですね、そろそろCMに入るそうです。もしかしたら僕もこのままブルペンに上がっちゃうかもです」

「試合は六回の表、相手チームの攻撃を迎えております。……え、芝崎選手はどうしたのかつて？ 行ってしまったよ、戦場フルベンにな。というわけで一人になってしまいましたので、新しくメンバーを呼ぼうかとも考えたのですが。恐らく僕もじきにお呼ばれされる可能性が高いので残念ながら独り言にお付き合ってください。……あ、企画がある？ 良かったですね皆さん。えー題して？ 『黒鷲座一のココがすごい！』。え、これ自分が自分に言うんですか？ 絶対他の人と進めるタイプの企画ですよねこれ」

撮影陣はとにかく進めろとの方針だ。自画自賛する様子を放送するなんて羞恥プレイ以外の何物でもないし、これを企画した奴を一発ぶん殴ってやりたい。

「えー俺自身の事を褒めるの？ まあ自分が球界でも指折りレベルのクローザーである事は自負していますけど、それでも難しいですよこれは。だって良いところがありすぎて、放送時間オーバーしちやいますよ。まずストレートでしょ？ あれだけの回転数で投げられるようになったのはプロに入ってからなんですけど、まあ高校生時代でもそこそこスピンのある球は投げれてはいたんですよ。それで他の球種を覚えるよりも、やっぱり自分の一番良い球を磨いていくのが一番だとコーチに言われました。今はそのコーチはもういないんですけどね。当時はあのスパルタ教育を恨んではいましたが、今になって思えばあれがプロ野球選手として僕の分岐点だったと思います。多分そうじゃなかったらとつくの昔にクビになっていたと思います。本人の前じゃなかなか言えないですけど、間違いなくあの人は恩師ですよ」

黒鷲座がちらりとカメラの方向を向く。もういいでしょ？ という視線を向けるも反応はない。むしろもつとやれという事なのか？

かと思えば、何やら紙を渡してきた。

「あー、なるほど。SNSでそういう話を募集していたわけなんですね。いや本当どうしようかと思いましたがよ。このままずっと一人で話し続けるの限界ですもん。えーつと『バンバン三振を取るところがすごい』ですか、これが一番多いみたいですね。ありがとうございます。まあでも実は僕、あんまり三振を取ることはこだわってないと思いますか、意識していませんよ。結構球数がかさむし、できるなら一球で打ち取る方が楽だとは思ってますよ。三振つて最低でも三球は投げないといけないし。まあそれでも三振を取れた時は爽快ですけどね」

これ次の紙は？ と聞くとスタッフたちは紙をめくるように指示してきた。あーはいはい、めくれればいいのね。

「次に多かったのは……えー『四球をほとんど出さないところ』、『コントロールの良さ』、なるほどよく見えますね。そうですね、僕結構コントロールには気を遣ってるんですよ。やっぱりどれだけいい球を投げられたとしてもボールが荒れまくりじやどうしようもないですからね。だから多少球速が遅くならうとも丁寧に投げることを心がけています。とはいえ、本気で投げてても150km/hも出ないんですけどね。はい次。ほとんどはさっきの二つのどちらかに大きく分かれているみたいですね。えーだからここからは少数派の意見になります。『打者を惑わせるチェンジアップ』に『何気にフィールディングが上手い』。何気には余計ですよ何気には」

パラパラと紙をめくりながら読み進めていく。目的というか、一番指摘して欲しいものはないか。……ないよな、というか流石にそこまで見えないか。と諦めかけたその時、「それ」は顔を出した。

「えー次は……『何年もずっと投げているのに一度も大きなケガをし

ていない事』、そうこれ！　これは僕も契約更改の度にアピールしているんですよマジで！　いやーここに気づいてくれる人がいてくれて良かったー！　あ、今視聴者の皆さん地味だなんて思いました!?　思ってたでしょ！　いやこれがね、意外と大変なんですよ。まあそりやあ試合に出続けるのは野手としては当たり前だったりするんですけど、投手だと中々難しい事なんです。勤続疲労って言葉を皆さん知っていますでしょうか？　『投手の肩は消耗品』と言われるくらい投手は疲労の残りやすいポジションでして、起用され続けると肩や肘にダメージが残り続けるわけです。だから中継ぎは入れ違いが激しいわけなんです。その戦場で残り続けていい成績をキープするというのは凄いことなんです。だから僕はそれを一番誇りに思っていますね」

　と言い終わったところで紙は最後を迎えていた。黒鷲座はあまりエゴサーチ（エゴサ）をしない人間である。というかそもそも野球選手という存在自体成績によつてはファンに叩かれやすいので見ない方が得とも言える。そのためこのようにファンからの意見を見れるのも貴重な体験であった。

「さて、意見は以上ですかね……皆さんたくさん声援ありがとうございます！　ありがとうございます！　こういう声を励みにして頑張りたいですね。あつ……とそろそろお別れの時間みたいです。最後に？　次のゲストの紹介だけして終わりますよかね。えー次のゲストは、げ」

　次のゲストが知らされると、黒鷲座は文字通り固まった。その人物は彼が苦手とする人物だからである。露骨に低い声色へと変貌していく。

「えー……はい、次のゲストは名実ともに燃える熱き投手・熱田炎也あつたえんや選手です。いやまだ第三回なんですけど。第三回なのにこいつかあ……。あつはい、そろそろ行かないといけならしいんで、このフラ

ストレッチョンは登板した時にぶつけようと思います。それでは、待て次回！」

試合は8回表。この回登板した芝崎が先頭打者にヒットを浴びながらも後続をぴしやりと抑え0行進。すると打線が奮起し、二死一三塁から美濃のタイムリーで勝ち越しに成功した。そして9回表のブルバーズの守備、マウンドに送られたのはやはりこの男――。

『選手交代のお知らせをします。芝崎に代わって、黒鷲座。黒鷲座一が上がります。そして角井に代わって扇谷。扇谷守がキャッチャーに入ります』

――さて、大きな声援に見送られながらマウンドに上がった黒鷲座が大きく息を吐く。頭は冷静に、されど心は熱く。

(だいたいよお……)

一人目。5球目のストレッチを詰まらせセンターフライ。

(何でッ、僕がッ！)

二人目。4球目のチェンジアップで見逃し三振。

(あいつの相手をせにやならんのだッ!!)

三人目。5球目のストレッチを空振り三振。絶対零度のクロウザー、面目躍如の活躍であった。キャッチャーの扇谷に肩を叩かれながら、黒鷲座は素知らぬ顔を浮かべる。今から明日の放送を考えると憂鬱であった。

### #3 part 1

「ああん？ やるかコラ!？」

「お、手え出しちゃうわけ？ いいの、野球選手がそんなことしちゃつて。そんならこっちも反撃してもいいわけだよなあ!？」

放送開始直後。いきなりブルペンには険悪なムードに包まれていた。ガンを飛ばす二人の間には火花が散り、スタツフもハラハラさせられる。ともあれ黒鷲座は本題を忘れてはいなかった。

「……まあ一旦この馬鹿は置いときましょう」

「誰が馬鹿だコラア！」

「そうやっていちいち乗っかってくる所がだよ。はい、えーブルペン放送局第三回の始まりでございます。司会はいつも通り僕、黒鷲座一です。そして今回のゲストですが……めんどい。自分で自己紹介しろ」

「はあ!? それがゲストに対する態度かテメエ！」

「いいだろ同期なんだし。ほら早いと言っちゃえよ」

「……チツ、仕方ねーな。熱き闘志を胸に戦う投手、熱田炎也あつたえんやです。この番組を視聴している方々、覚えて帰ってください！ 熱田炎也です」

「何で二回言ったんだよ、選挙の演説じゃねーんだから。っていうかいつツツコもうか考えてたけど何その恰好。あ、ラジオをお聞きの皆さんにも分かりやすいと言わなきゃですね。何かめちやくちや変

なハチマキつけてます」

黒鷲座の言う通り、熱田の頭には「金子監督♡先発志望です」と書かれたハチマキが巻かれている。やはり自分の思った通り、こいつ馬鹿だと黒鷲座は確信した。

「あ？　これ？　監督へのアピールだよ。見て分かんねーのか？」

「見たら余計意味分かんねーから言っただよアホ」

「アホって言うんじゃねえ！　つーかこれ作るのに三時間かけた俺の努力を笑う事自体許せねえ！」

「もう喋んなお前。話せば話すほど墓穴が増えていくだけだぞ」

「ああ!?　んな事言ったら喋りたくなるだろうが！　あーもういい、登板するまで喋り倒して今回の放送で俺の名前を全国に轟かせてやるよー！」

それは前回のゲストの芝崎以上。本物の馬鹿だコイツ。黒鷲座は呆れて声すら出ない、と本来ならそうなる所だが今は番組中だ。喋らなければ意味がない。というかコイツに話させるのは危険だ。何かの拍子にうつかり秘匿事項を話してしまいそうな……、いやコイツにそもそもそんな情報が行くわけないか。だって馬鹿だし。

「盛り上がっているとこ悪いけどこれローカルでの放送だから。よほどの物好きじゃない限りこの番組を見る人はほとんどが地元の人だぞ」

「何イ——ッ!?　そういう事は早く言えこの野郎！」

「いや先に言ったはずなんだけど。……もういいや、こんな奴放っておいてはがきを読んでいきましよう。ペンネーム『ヘヴィメタヘッド』さんからですね。『黒鷲座選手と熱田選手の仲はものすごく悪いとどこかの噂で聞いたのですが本当でしょうか』、はい熱田何かコメントしろ」

「仲が良いわけねえだろ、こんな理詰めの奴と。大体よお、俺は本能で投げるタイプの投手だ。そもそもの相性が既に悪いんだよ」

「珍しく同感だな。さっきのやりとりを見てもらえば分かる通り、僕がお前の事を好きになわけがない。お前みたいな球速以外は前時代的な投手なんて首脳陣としても計算しづらいだろうよ」

「テメエのピッチングもそう変わんねえじゃねえか！」

「は〜？ 一緒にしないでもらえますかね〜？ こちとら生き残るためにデータを駆使して戦ってるんですー！ 球が速ければいいだけの時代はもうとつくに終わりを告げてんだよ」

これを見ている視聴者の方々、安心してほしい。彼らにとつてはこれが通常運転なのである。むしろ無言ですれ違うほうが異常と思われるレベルなのだ！

「んだとコラア……もっぺん言ってみろアホ、バーカ！」

「語彙力小学生じゃねえか……。というか僕とコイツを突き合わせる時点でもうヤバイですよ。そうなった日にはもう天は裂け、地は割れ、海が荒れて、終いには火山が噴火するように投手が炎上してブルペンが総動員されますからね。何故かって？ 知らんがな」

黒鷲座が両手を広げ、まるでお手上げのようなポーズを見せる。オ



カルトっぽいかもしれないが、これが実は本当の話なのだ。互いの喧嘩が長ければ長い程何故か投手が炎上する。救いなのは二人がブルペンで顔を合わせる機会がそう無い事だろうか。ともあれ、知らないものは本当に知らないんだから仕方がない。

「あ、続きありますね。『もしそうであれば、どうしてお互いが嫌いなのか教えてください』、ですって。ファンに心配されるようじゃいいよマズいですよ僕ら。じゃあ仲良くするかと言われればまあしなんでしょうけど。僕が彼を嫌う理由はですね、子供っぽいんですよ。言う事も本当に中学生のまま精神年齢止まってんのかってくらいアホだし。マジでコイツの方が上位指名なのが腹が立ちますね。まあその分？ 僕は泥をすする思いでここまで成長したわけですけども」

「子供っぽいという所が納得いかねえ……」

「事実じゃん。で、お前から聞いてないんだけど。何で僕の事が嫌いなのか教えてください？」

「まあ何が嫌いかと言われれば全部と答えるが、特にそういう所だよ。妙に大人ぶって理屈っぽい事ばかり言いやがる。確かにお前の方がプロとしていい成績残してんのは百歩譲って認めてやるがな、同級生なのに妙に上から目線なのがムカつくんだよ！ 今に見てるよ。こっからだ！ こっからお前をぶち抜いて活躍してやる！ もちろん先発としてな！」

「はぁーん？ んな事言ったって僕らもういい大人なんだから理屈っぽくなるのは当たり前でしょうが。逆に未だに子供なのはお前くらいのもんだよ。あーあ、どうせ同期とやるなら野手だけど美濃さんと組みたかったなあ、あの人性格いいし、お前と違って。お前と、違って」

「ああ？」

黒鷲座と熱田の睨み合いはおでこがぶつかり合いそうなほどに近づいている。これがバラエティ番組じゃなくて良かったな二人とも。もしそうなら仲直りのキスをさせられる所だったぞ。少しして、黒鷲座がため息を吐く。

「……………どうやら僕らは性格まで相成れないようだな」

「ハッ！　今に始まった問題じゃねえだろうがよお。俺とお前は言わば真逆の存在だ。感覚派と理論派、この際どっちのが正解なのかはつきりさせようじゃねーか！」

「はつきりさせるって、どうやってだよ」

「どうやって？　そりゃあ……………理論派の出番だろうが！　お前が考えろ！」

「お前そこ丸投げすんの!?　うーわ馬鹿だ。馬鹿が出たわ。ちよつとこつち寄らないでもらえます？　馬鹿が移りかねないので。まあそこは後で考えるとして、一旦CMに入ります。それでは皆さん、チャンネルはそのままー！」

### #3 part 2

「……燃えたな」

「よく燃えたねえ」

試合は一回の裏。ブルーバーズはいきなり4点を追いかける展開となっていた。というのも先発の八家はっけが今日は荒れていた。元々調子の良し悪しが分かりやすい投手ではあるのだが、その中でも今日は特に悪い方だ。四球とヒットであれよあれよという間にランナーを埋め、一死満塁から六番打者にグラウンドスラムを被弾。くしくも黒鷲座が言っていた通り、投手が炎上することとなった。

「最初に言い出したのお前だからな。お前のせいだぞ」

「いやいや、こればかりは実力でしようよ。まあ確かに僕が不穏な事を言い出したのは事実だけど、結局は弱肉強食の世界だから。実力が無いなら打たれるのは当然の話だし」

「何か心なしか嬉しそうだな」

「あ、バレた？ いやだって僕昨日も一昨日も投げてるから。開幕からいきなり三連投はちよつと嫌だなんて思ってたし」

「ケツ、そーいう自分の事優先でチームの事が二の次な所が気に食わねえ」

「まさかお前からフォアザチームみたいな言葉が出るとは思わなかったよ。何か変なものでも食ったか？」

「うるっせえバーカ！」

「……あ、もうCM明けてる？ えー、立ち上がりからいきなり不穏なのは今回の僕らの放送と同じですね。ってなわけでやっていきましようブルペン放送局。不本意ですが、本当に不本意ですがゲストの方にもお便りを選んでもらうのが決まりなので。おら選べ熱田」

「ああ？ お前に言われるまでもなく取ってやるわ！」

スタッフが毎度のごとく白い箱を持ってくる。それを熱田が受け取って乱雑に中身を取り出す。お前そういう風に物を大事にしないから大成しないんじゃないかねーの、なんて言う黒鷲座の声を無視しながら。

「オラア！ これでいいな黒鷲座！」

「いや読めよ」

「注文の多い野郎だな！」

「まだ前菜すら注文してねーレベルだわ」

「はいはい、読みますよ。読めばいいんだろ」

「すねた子供かよ」

「ペンネーム『薩摩な指名打者』から。……薩摩ってどこだっ、たっけ？」

「お前流石にそれはないだろ。鹿児島だよ鹿児島。中学生時代に社会の授業でやっただろ、何なら高校でも日本史で勉強しただろ」

「残念だったな黒鵜座！ 俺は高校では世界史を取ってた！」

ま、眩しい！ 馬鹿すぎて直視できないほど眩しい。聞いているのはそこじゃないんだよ、と黒鵜座はツッコむ。

「知らねーよ……。というか自分の知識不足を鼻高々に話してんじやねーよ」

「まあいい。要するに鹿児島からのハガキという事だな！ 結構字が綺麗じゃねーの。なになに、『桜の咲きつつある今日この頃、前回は』……えー」

熱田が言葉に詰まったのを見計らって黒鵜座が後ろに回り込む。なるほど、漢字が読めないのか。仕方がないので補助をしてやる。

「斯く」

『斯くの如き素晴らしき放送悉く申し上げ……』

「候そつろう」

『候。小生これを聴きて一念……』

「発起ほつき」

『『一念発起ほつきし』……ン？ ほつき？』

「んふふ……お前下ネタに敏感すぎでしょ。発起ほつきだバーカ」

「何だどこの野郎！」

いよいよ下ネタに走り出した。会話の内容だけ聞けば中学生のそれと思うかもしれないが、二人とも割ともういい大人である。

「いーから次読め次」

「先に仕掛けたのお前だろうが！　　というか言われなくても分かつてるわ！　『一念発起しリリーフを始める事を決心致し候。ついては現役リリーフの方々に質問致したき事』……えー、読めないので飛ばします」

「大事なところかもしれないねーだろすつ飛ばすな！」

「いいんだよ大事なはその次だから。三つあるな、まず一つ。『リリーフの心構え』。……リリーフの心構えだと？　そんなもの知るか！　投げる時は常に全力投球を心がけていれば大抵の打者などねじ伏せられる！　　というかりリーフだと？　先発をやれ先発を！」

「先発もリリーフもどっちつかずのお前が言うな」

「俺のハートは常に先発を求めている！　　つまりこういうものはプロ入りしてからずっとリリーフしている黒鷲座！　お前の出番というわけだ！」

「人に押しつけやがったよ、もう。でもまあコイツの言う事にも一理あるには一理あるんですよ。プロ入りしてからならともかく、今の内から自分の選択肢を潰してしまふのは勿体ないと思いますよ。やっぱリアマチュア野球で比重が大きいのはやはり先発です。その負担は確かに大きなもので、高校野球であれば150球近く投げさせられる事もありますけどそれはやはり投手が信用されている証なんでしょうね。僕も高校時代は先発やっていましたし。というわけで勧めるなら先発ですね」

「ふんっ、俺の言う事も的を得ていただろ？」

「まあ前置きはそこら辺にしておきましょう。それでもリリーフをやりたい人とかもいるという事でしようし、まあそういう人のためにも教えてあげるのは悪い事でもないですからね。で、本題なんです。け……そうそうリリーフの心構えですね。あー、これは先発にも同じことが言えるんですけどとにかく攻撃的であることですかね、コイツみたい」

「いい事言ってくれるじゃねえか。そうだ、攻めの気持ちだ！」

「大事なのはとにかく自分を押し付ける事。『誰にもピッチングに文句など言わせない、これが自分だ！』という気持ちが必要です。弱気になってしまふとどうしても受け身になってしまいがちなので、そうなるとうと球を置きに行ってしまうって結果打者の方が優勢になつてしまふわけですね。そうならないようにピッチングはどんな相手でも自分がコイツを倒すんだ！　つてくらいの気持ちで向かっていった方がいいですね」

「そうそう、投手つてのは強気で行くもんだ！」

「後大事なのは打たれてしまった時の切り替えでしようか。反省するところがあるなら反省すればいいし、相手を褒めるしかないようなバッティングをされたら素直に相手を認める。これで問題ないと思います。それでも必要なのが本塁打以外では点が入らないわけですね。つまりはどれだけランナーを背負ったとしても点さえ入らなければいいので、気楽に行きましょう。それでリリーフとして必要なもの、当たり前ですけどいつでも投げられるように準備しておくこと、ですね」

「こんな企画考えたお前が言う事なのか？」

「うるせーわ。……準備は何より大事です。事前に構えておくことで余裕が生まれます。僕もちゃんと準備してますけどやっぱり安心感が違いますね。答えになっていないかもしれないかもしれませんがこれで大丈夫でしょうか？ ちゃんと伝わっていればいいんですけど……ここでCMです。そんじや続きはまたこの後に読むということだ」



### #3 part 3

「何だかんだ八家さんも修正してきたな。てっきりこのままズルズル行くもんだと思ってたけど」

「まああの人の場合ちよつと特殊だからってのもあるだろ。俺たちとは全く違うタイプの人だし」

画面の先では八家が3回の表を三者凡退で締めてベンチへと帰る姿が映っていた。その姿を見て二人とも各々の感想をこぼす。自分がいつ登板するかに備えられるために、こうして試合の状況を見ておくのも大事な要素だ。

「それでもこのままビハインドで行くとあつという間にお前の出番が来そうだけだな。はいっ、そろそろ質問の続きに進みましょうか。熱田、続き」

「俺に指図すんな。えーと次は、『回転数並びに？ 回転方向の調整』だど。俺の場合はそうだな、ストレートはしっかり握ってリリースポイントで力が100%、いや120%伝わるように投げる！ ころ、シユツという感じでな！ まあとにかく力強くを意識していればおのずと回転数などついてくるものだ！」

「2100回転の方は黙っておいてもらえますか？」  
「んだとコリアー！」

熱田の威圧に怯むことなく、黒鷲座はひらひらと手を振る。寄ってきた野良犬をしっしと払いのけるかのよう。

「そういう脳筋な考え方はもう古いんだって、それにこういう質問はどう考えても僕向きでしょうが。だからお前はそこで茶でもすすつてろ」

「お茶なんてここにあるわけないだろ！」

「比喻表現すら分かんねえのかよこの馬鹿！ だったら水でも飲んでけ！ えー、まあ実はこれあんまり言いたくないんですよ。何故かって？ そりゃあ真似して僕みたいな選手が量産されると困りますからね。それに当時の投手コーチと二人三脚で身につけたこれは、感覚に等しい物なので最終的には自分で掴み取るしかないですよ

ね。ですから理論で説明できる部分はそこまであるわけじゃなくて」「なんだ、やっぱ感覚で覚えるのが正しいんじゃないか」

「外野は黙ってて下さいねー。回転数を調整する上で大事なのはやっぱり指なんですよ。ボールに触れるのも指、最後に力を伝えてなおかつ回転を加えるのも指なわけです。つまり何が言いたいかというと、回転数を伸ばしたいなら指でその感覚をつかめって事です。『指で弾く』だとかそういう表現がありますけど、人によってその感覚は千差万別です。僕の場合なんかは指を食器のフォークに見立ててそれを突き刺すっていうのがしっくり来ますね。バックスピンの回転が多ければ多いほどボールの軌道も変化してくるので、皆さん頑張っ自分なりの回転を身につけましょう！」

ストレートの握りを見せたのち、説明を終わらせた黒鷲座が満足そうにドヤ顔を浮かべる。そのよそで、熱田は納得のいかないような表情で黒鷲座を見つめていた。

「……フォークで突き刺すってあんまり食事のマナー的にどうなんだよ」

「だから例えだつたつてんでしようがああん!? 終いにや普段温厚な僕でも流石にキレルぞコラァー!」

「お、やるか? リアルファイトで決着つけるか?」

再び二人の額と額がぶつかり合った。互いの睨み合いはいよいよ危険な状態へと……行かない。黒鷲座も熱田もそこは流石に自重する。二人ともプロ野球選手という立場が無ければもしかすると殴り合いに発展していたかもしれない。

「……はあ、馬鹿。本当に馬鹿。リアルファイトなんてプロ野球選手がやるわけじゃないでしょうが。そんな事したら週刊誌にすっぱ抜かれて即干されてお払い箱まっしぐらだろうが。あー視聴者の皆さん安心して下さいね。僕らの仲はもう修正が効かないほど壊滅的ですが、ブルペンは今日も平和です。だから110番を押そうとするその手を今すぐ止めて下さい、お願いします」

「……かお前が言ってた話も結局感覚の話じゃねーか!」

「……あのなあ熱田。究極の理論派ってのは何だと思う?」

「究極つて響きなんか良いな……つてそうじゃねえ！ あれだろ、こ  
う……とにかく、理詰めで行く奴！」

「はい馬鹿。お馬鹿一級の資格を貴様に進呈しよう」

「何言ってるかはよく分かんねーけど馬鹿にされている事だけは分か  
るぜ……だつたら何だつてんだよ！」

「仕方ない、お前にも教えてやろう。究極の理論派とはな、自分の動き  
にしつかりと原因を付けられる者の事だ。自分がどういう動きをし  
て、結果ボールがどのような軌道を描いたか。それに名前や理由を付  
けられるから、説明が出来る。そして説明が出来るから、再現が出来  
る。再現が出来るという事はつまり、それを自分の手中に収めたと同  
じことだ。分かるか？」

「ちよつと何言ってるか分かんねえ」

「お前マジ……かなり懇切丁寧に伝えたつもりだぞ今のは。だから  
な、自分の動きを体ではなく頭で理解できるのが理論派の究極型であ  
り、理想だ」

「あー、それならまだ分からなくもない。うだうだ話を長引かせてな  
いで、最初から一言で済ませりやいいんだよ」

「今のはイラつと来ましたが、僕は大人なので続けます……。確かに  
僕の握りの表現は人によつては当てはまらないだろうし、違う解釈を  
する人だっている。でも最悪理解できるのは自分だけでいい。自分  
さえそのメカニズムを理解できていなら、動きを忘れないでいる事  
が出来る。大事なのはその原因だ。最も納得する原因を見つけるた  
めに、今の野球、いやスポーツ選手は自分の動きを繰り返し映像や画  
像を見て理解しようとする。正確には言葉で説明を付けようとする  
わけだ。これが今いる理論派の求める形、だと勝手に僕は思ってい  
る」

「ほーん、なるほどねえ……通りで最近理論を付けようとする野郎が  
多いわけだ。てつきり今流行りの草食系が増えたのかと」

熱田はというと、納得はしているみたいだ。先ほどまで黒鷲座が苦  
労していた分、今の説明で理解してくれたことで感涙にむせびそうな  
気分だ。

「感覚が全く重要じゃないかと言えばそんな事はない。お前みたいに感覚でつかむような選手が一定数いるのも事実だしな。だけど理論ってのを考えるのも中々に悪くないとは思うぞ?」

「ま、俺にとっちゃあ感覚第一だけだな。理論まで身につけちゃったら、いよいよ俺が最優秀投手としての才能が開花しかねないぜ」

「はいはいそーかよ、勝手に言っちゃがれ。勝つのは僕だ。後でピーピー言っても聞いてやらねーからな」

「ふんっ!」

「へっ! えーそろそろCMのお時間となります。放送はまだまだ続きますのでどうぞお楽しみに!」

### #3 part 4

「はい、続けて参りましょうブルペンラジオ！ え？ 熱田はどうしたのかつて？ あいつは今頃戦場に……」

「おい黒鷲座、そろそろ……ってオイ続き始まってんじやねーか！ お前しばらくCMだからゆっくりトイレに行けばいいって言ったよなあ！」

「トイレという名の戦場に行っていました」

「いやーデカかった」

「聞いてねーよ……チツ、そのままブルペン<sup>戦場</sup>に向かえば良かったのに。そうでーす、まだコイツの出番は来ないらしいでーす。っーかお前、頭に付けてたハチマキは？」

トイレに行く前と後で熱田には明確な見た目の違いがあった。頭に付けていたハチマキの有無である。確かに放送前には「金子監督の先発志望です」と書かれたハチマキを付けていたはずだ。流石にそれを付けたまま登板するほど馬鹿ではないと思うが、準備が始まるまでつきり付けたままなのかと思っていた。

「ああ、あれか？ 愛国心が足りないって」

「軍の回し者か！」

「日の丸を掲げろって」

「だから軍の回し者かっつーの！」

「まあ冗談なんだけど」

「じゃあ何でだよ、俺の忠告に対しては振り返りもしなかつたくせに」「いや、さつき丁度仲次コーチとすれ違つてよ。そんな時にこれを説明したら何て言つたと思う?」

『馬鹿じゃねーのお前』とか?」

「すげえ、一文字違わず合つてる!」

そりゃあ誰だつて同じような感想を抱くだろう。心底呆れた顔で発言する仲次コーチの姿が容易に想像できる。あーあ、だから最初に言つておいたのに。また黒歴史のページが増えたな。

「まあいいや、人の黒歴史が増える事に関してはどうでもいいし。なんならお前の馬鹿っぷりに毎回追われる人の苦勞を知つてほしいぐらいだし。黒鵜座だけに」

ここは室内だというのに、冷たい風が吹いた。絶対零度のクロージャー様はトーク力でさえ聞いているものを凍り付かせる。……うん、今のは忘れよう。

「お前も黒歴史が増えたな」

「……そ、そんなことねーし。ばーかばーか」

「俺が言うのはどうかと思うけど、お前も追いつめられると語彙力なくなるよな」

「放つとけ! でそうだ、続きだよ! もう一個最後にあつただろ質

問！」

「しゃーねーな。俺に言つてた事をそこで反省してろ。えー最後の質問は、『失投しないための心得』だそうだ」

黒鷲座も熱田も、黙つたまま顔を見合わせる。口について出た言葉は二人とも同じものだった。

「そんなものない（だろ）」（ですよ）」

「ここは同じなんだな」

「そりゃあそうでしょ。投手なら思う所は同じだろう、それが別にお前じゃなくても。だからこれに関しては僕達二人の気が合うとかじゃなくて、プロの投手としての総意？ まではいかなくとも大体の投手はそう考えますよ」

「まあ投手なら誰しも夢を見るだろうな。ゲームの中みたいにな、一度も失投をせずに勝負する事が出来れば投手が負ける事なんてほとんどない」

「僕らは失投を減らす方法は知っていても無くす方法は知らないんだよ。世界がまだそこまで追いついていないっていうか……そうです、ね、100年経てばそういう技術が生まれるかもしれないですけど」

「その頃には野球があるかどうかも疑わしいな」

「いや、100年前も野球はあったんだし残るだろ……根拠は無いけど」

「それぐらいになると日本があるかも怪しいかも」

「お前急に怖い事言うなよ！ え、どうしたマジで。トイレから戻ってくる前に誰かと入れ替わったの？」

「失敬な！ 俺はちゃんと俺だわ！ ……何か変な事言ったみたいな目をやめてくれるか!？」

だって突然変な事言い出すんだもん、仕方ねーだろ、という目で黒鷲座は熱田を見つめる。熱田がそんな危険な思想の持ち主だったとは。これからはちよつと距離を置こう。人知れず黒鷲座が熱田の評価を（悪い意味で）見直した瞬間であった。

「まあそれは一旦置いて、じゃあいかに失投を打たれないかについてを話しますか。何も無いじゃ送ってくれた人も聞いた人もいたたまれないでしょ。ほいじゃあ熱田、言ってみ。返答によってはお前を偽物と判断するぞ」

「何でそんなに疑うんだよツ！ まあ俺の場合、失投する瞬間に力入れて無理矢理にでもワンバウンドさせる。ランナーがいる時だろうとホームランを打たれることに比べりゃ安いもんだからな」

「良かった本物だ」

「判断する基準がおかしいだろお前！」

「どおりでお前の暴投数がチーム内じゃぶつちぎりで多いわけだよ。そりゃあただでさえコントロールが悪い上に無理矢理違う所に投げようとするもんだから、クソみたいなところにボール投げる事もあつて事だな。キャッチャーの角井さんこの前泣いてたぞ。あいつだけはコントロールできないって。でもお前デッドボールをぶつけ



た相手に向かって喧嘩するのはどうかと思うぞ」

「あれは……仕方ねーだろ。こっちはもう頭を下げたしスポーツマンとしての礼儀というかマナーは果たしてるわけじゃん。まあ当たたのは完全にこっちの非ではあるけど、それで向かってくるならそりゃあこっちだって自分の身を守るために必死になるよ」

「だけどお前乱闘になった時いつもより目が輝いてるじゃん」

「元からだそれは！　で、俺としちやお前の意見が気になるんだけど」

「僕？　僕の場合はそりゃアレですね。打たれるような失投するからダメなんですよ。一流つてのはボールの質がいいからそうそう打たれないわけで、多少コースが甘くなろうが回転がすっぽ抜けようが打たれなきやこっちの勝ちです。だから自信持って投げ込めばいいんです。まあ強いて何かを加えて言うとなれば……そうですね、さつき言った『再現』を心がけて下さい。上手くいくのもその逆も必ず理由があるんです。それをすぐに見つけるのは難しいかもしれませんが、そのためにかけた時間は決して無駄にはなりませんから」

「流石理論派。ガツチガチに固めてるじゃねーか」

「いやいや、それほどでも」

「おい、熱田」

黒鷲座と熱田が振り返った先には、笑顔の仲次がいた。笑顔といっても、目が全く笑っていない。

「俺、何回も呼んだんだけど」

「つす——みませんでした！」

仲次は表情を変えずに黒鷲座の方を見やる。黒鷲座までもが縮こまってそれが終わるのを待っていた。仲次なかつぎとしはる敏治。中継ぎ投手の整理や徹底した『投げさせ過ぎない』の精神で今の投手陣を裏から支えた名コーチ。そんな彼の欠点は一つだけ、皆が口をそろえてこう言うのだ。『怒らせるとめちやくちや怖い』と。

「おらさつさと行くぞ熱田。黒鷲座も、あんまり付き合わせんなよ」

「あっはい」

(すまん熱田、犠牲になってくれ……！)

がつくりとうなだれながら半ば引きずられていく熱田を気の毒そうに見送りながら、黒鷲座はひたすらそう願った。少しして、一人だけになった場所に黒鷲座だけが取り残された。

「えー、はい。お見苦しい所をお見せしました。放送は続くので楽しみにしてください。仲次コーチマジ怖え……」

### #3 part 5

「無抵抗だ……実に無抵抗」

六回の裏の攻撃を終えてスコアは1―4。5回に1点を返すことができたものの、それ以降はさっぱりだ。今日は打線の調子もあまりよろしくない。打線は水物とはよく言ったものだ。こりやあ今日は負けだな、と誰にも聞こえない声で黒鷲座はひとり呟いた。

「何とか八家さんが6回まで初回の4失点でまとめてくれたわけですが、やっぱりウチの課題は打撃陣ですね。まあ球場が広いからそりやあ長打が減るのは仕方ないとも言えますけど。でも相手は今日日本塁打を打ってるわけだしなあ。えーここですすね、一人では寂しいという事で助っ人に登場してもらいましょう。頼れる我らがリリーフ、石清水緑郎君です！ はい拍手！」

黒鷲座とスタッフの拍手に包まれながら、緑郎がカメラの範囲に入ってくる。その表情はげんなりとしていて、とにかく嫌そうな顔が伝わってくる。

「……あの、困った時に僕を呼ぶのやめてもらえませんかね。だって僕この前出たばかりじゃないですか」

「はいはい、そういう固い事は言わない！ 何たってこの放送は自由がウリなんだから。今決めたけど」

「聞こえていますよ。今決めたなら意味ないじゃないですか」

「それでさあ、どうだったの？ この前の放送の反響は」

「話を聞いてくれませんかね。……どうって言われると一概に答える

のは難しいですけど、一つ変化を挙げるとするならファンレターが少し増えました。まあ気のせいかもしれないんですけど」

「お、いい事じゃないの！ それはこの放送の効果があったってことで受け取っていいのかな？」

「それがですね……結構同情だとかの手紙が多いんですよ。『周りの人がうるさいだろうけど、頑張ってください！』とか『プロの投手と言えども大変なんですね』、だったり」

「まあやかましい奴もいるからな。熱田とか熱田とか熱田とか」

「多分その中に先輩も入ってると思いますけどね。あとは意外だなんて声もあって。『石清水選手もやっぱり緊張するんですね！』なんて手紙もありましたよ。多分僕ほど登板前に緊張している投手の方が珍しいと思いますけど」

「ファンはほとんどマウンド上の緑郎しか見る事が出来ないからな。意外だって声も分からなくないよ。投げてる時のお前は凛々しくて頼りになるし」

「え、凛々しいですか？ えへへ、リップサービスかもしれないですけど嬉しいですよ」

「登板する前からそうならいいんだけどな」

「ああそういう……先輩つて上げて落とすの本当に好きですよ。つて僕の事はいいんですよ。試合の解説しましょう、ほら今から熱田さんが投げるみたいです！」

緑郎が指さすモニターの中では、熱田が丁度投球練習を終えてバッ

ターと対面する姿を映していた。だがしかし、黒鷲座は分かりやすく面倒な顔をしている。何で僕があいつの解説すんの？ という顔だ。

「ええ、面倒くさいよ、そこまで競った内容でもないし解説しなくてもよくない？ というか現役の解説って役に立つわけ？」

そんな様子の黒鷲座をよそに、左足を大きく上げてダイナミックなフォームから第一球を投じた。右腕からのオーバースロー、それが熱田のフォームだ。熱田は得意とするストレートを、球場内にも響く声と共に投じた。ストライクが審判からコールされる。

「少なくとも素人が解説するよりは意味があるんじゃないですかね、あつほら、いきなり156km/h出しましたよ！」

「どうだか、あいつの場合球速が出ないと話にならねーでしょ。気合は入ってるけどコースも若干荒れてるしあんまりいい球じゃないね」

「辛口ですね」

「だってこんなビハインドの試合であんなに気合入る方がおかしいでしょ。まああいつにとっちゃ絶好のアピール機会ではあるんだろうけど」

「なるほど、じゃあ先輩は熱田さんの一番良い状態を知っているというわけですね」

いたずらっぽく碌郎が笑う。この前の放送のお返しと言わんばかりのその表情は、とてもカメラ受けがいいものだろう。これを写真に撮れば多分「イケメンプロ野球選手」の写真集に確実に載る、と黒鷲座は確信した。

「ちよつとカメラマンさん！ 今のちやんと映してましたよね！ あれを放送すれば視聴率アップ、ひいては僕のお給料アップに繋がりますよ！ は、撮れてない？ バッキャローそれでもプロか貴様あ！ ちよい禄郎、もう一回今の頼む！」

「先輩って意外と分かりやすい性格ではありますよね。露骨に口数が増えた時は滅茶苦茶機嫌がいいか、何かを照れ隠しでごまかそうとするかの二択ですもん」

「はく？ そんな事無いがく？」

「僕相手でもそういう下手なごまかしは通用しないですよ」

禄郎の真っ直ぐな視線が黒鷲座を貫く。少しの沈黙の後、耐えきれずに黒鷲座が降参と言わんばかりに両手を上げた。

「……はあ、そーですよ。認めます。あいつは最速159km/hのストレートもあるし、ノリがいい日はスライダーにもキレがある。調子が良ければガンガン三振を取れるタイプの選手だ。だから今の立ち位置がおかしいくらいの實力を持つてるんだよ」

「素直じゃないですね。というか何でそこまで熱田さんの事を嫌うんですか？」

「さつきも放送じゃ言ったけど僕とあいつじゃタイプがな……」

「そういうタイプとかで好き嫌い選ぶような性格じゃないでしょ先輩は。大体熱田さんと同じタイプの北君に対しては普通に接しているじゃないですか」

「分かったよ、言うよ。言うけどこれはあいつが後でこれを見返さな

い事前提だからな。くれぐれも本人には伝えるなよ」

「はいはい、ちゃんと秘密にしときますよ」

「……あいつがドラフト一位で僕が四位指名だから」

「え、そんな理由？ 器小さくないですか？」

「いや気持ちは分かるよ?! けどこれにはちゃんとした理由があるんだ！」

「まあ聞こうじゃないですか」

緑郎が水の入った紙コップに手を付ける。これはあれか？ 喫茶店で友人に相談する主婦の構図か？ その二人を向けたモニターの先にはガッツポーズをしながらベンチへと帰っていく熱田の姿が映っていた。

「あいつには才能がある。だから一位指名なのは当然だと思ってた。だけど最近の体たらくを見ると、何かむしゃくしゃするんだよ」

「ははあ、つまりは『僕は頑張ってるのに、お前はなんて有様だ！』ってわけですか」

「……外れてはないな。あいつは努力すればローテーションの一角を務めるポテンシャルを持っている。だけどいつまでもポテンシャルを期待するわけにもいかないから、そろそろ尻に火が着かねーとまずいんだ」

「なるほど、かなり面倒くさい感情を抱えてるみたいですね」

「うるさいわ！ おっと、そろそろお別れの時間が来たみたいですね。喧嘩から始まり、最後は尻すぼみしたような気がする第三回ですが、皆さまいかがでしたでしょうか。次の放送は再来週の火曜日です。えー次回のゲストですが……恐らくは黒船セツトアッパー、KK<sup>ケイケイ</sup>ことカービー・カイル選手に来ていただく予定です。ゲストが変わる可能性も否定できませんが。それでは次回もお楽しみに！ さようなら〜！」



アウエーでも投げますよ

開幕三連戦を終えた後、一日の移動日を挟んでブルーバースはアウエーでの六連戦が控えている。その期間放送もないので、ダイジェストで試合をお送りしよう。まずは開幕初のアウエー、大学野球の聖地である神之宮球場での東京ヤンキース戦から。

東京ヤンキースは投手力で守り勝つブルーバースとは正反対のチームだ。四番打者にして昨シーズン36本塁打を放ったはとがまゆきひろ鳩ヶ浜幸宏を中心として、去年打撃が開眼して3割25本を達成した大型ショート・嵐山信あらしやましん、メジャーリーグ通算50発の助っ人大砲候補・ウイルソン等打撃陣のタレントが勢ぞろいである。

その上で投手陣はどうかというと、その成績は12球団ワーストである。最も球場が地方のものを除いて一番狭いから仕方ないだろう！という声もあるが、それは相手も同じ条件であるので却下である。長年にわたる絶対的エースの不在が尾を引いているのか、ここ数年は優勝から遠ざかっている。球団側もその弱点を重々理解しており、市場に上がった投手の獲得には積極的に動いている。しかしフラれたり、はたまた獲得に成功してもその選手が活躍しなかったりとその結果は凄惨なものだ。

話がそれた。ともかく神之宮球場で行われた三試合の内容をお送りしよう。第一試合、この試合ではいきなりヤンキース打線が大爆発。鳩ヶ浜のシーズン3号となる2ランホームランでブルーバース先発の出鼻をくじくと、その後も7番・朝野あさのがソロホームランを浴びせるなど4回の裏が終了した時点で6得点。先発投手をノックアウトした。ヤンキースの先発も7回1失点ときっちり試合を作り、試合は終始ペースを握る展開に。結局8―2でヤンキースが試合を制した。

そして第二試合。今度はブルーバースが反撃する番を迎えた。初回、先頭打者の李が初球を引っ張り先頭打者ホームランを放つと、その後も地味ながらもブルーバース打線が繋がりを見せて結局7得点。一方ヤンキースの打線は今日は不発に終わり、完封リレーでブルーバースが試合に勝利した。

両チーム一勝ずつで迎えた第三試合。この日は神之宮球場名物・少し早い花火大会が開催された。嵐山・鳩ヶ浜の二者連続ホームランでヤンキースが先制したかと思うと、ブルーバースの四番打者にしてチーム随一の飛ばし屋・ドウリトルの2ランホームランで一転、同点に。試合はヒットを積み重ねたブルーバースがリードしたまま終盤を迎えるも、この試合でのヤンキースの得点は全て本塁打という驚異的な追い上げを見せる。ブルーバースのセットアップ・KKもその餌食となり、本塁打を浴びる。そして5―6で迎えた9回の裏、この緊張した空気の中登板したのが我らがストッパー・黒鷲座である。

(いきなり相手は四番の鳩ヶ浜さんかよ……)

そう、黒鷲座にとっては最初にして最大の関門である鳩ヶ浜が右打席に入る。ここのとこ鳩ヶ浜は非常に調子がいい。アレを使おうとも思ったが、生憎あの球の制球は荒れるしここで使うのは得策ではない。そして何よりまだシーズン序盤だと言うのに手の内を見せるのが勿体ない。よって黒鷲座が慎重に入るのも頷ける話であった。ストライク、ボール、ボール。カウントはバッター有利。捕手の扇谷がサインの交換をする。

(ここは自信のあるストレートにしよう)

(OKです)

鳩ヶ浜が大きく上体を反らす。鳩ヶ浜のフォームはオーピンスタ

ンス。足を少し大きめに開き、バットをホームベース側に軽くバットを下げている。その構えには外角にも対応でき、隙が無いように思える。

(大丈夫、大丈夫……)

グラブの中に入ったボールを見つめながら、黒鷲座は大きく息を吐く。最初から自分が出ることなど決まっている。キャッチャーを信じて投げ込むだけだ。そして4球目、真つすぐを鳩ヶ浜が捉えた。打球はセンターまで飛んでいくも失速。ほとんど定位置でセンターの李がボールをつかんだ。

(やはり……打ちづらいな、あいつのストレートは)

(ヒヤッとしたわ、ちよつとバットの上だった分伸びなかったな)

その勝負でリズムに乗った黒鷲座は続く打者を連続三振に打ち取り、ゲームセット。乱打戦を制したのはブルーバーズだった。これで勝ち越しが決まった。とはいえ、あんまりここでは投げたくない。やっぱホームの広い球場が一番すわ。そう投手コーチにぼやきながら黒鷲座は神之宮球場をあとにした。

次に向かうは横浜球場。ここもフェンスこそ高いもの、ここも結構本塁打の多いチームだ。ここを本拠地とするダイヤモンドバックスは、毎年歯車が噛み合えば一位争いに食い込めるチームと言われている。個々の実力も高く、5年連続で三割を記録した綿引京志郎わたひききょうしろうやエース格の財前大我ざいぜんたいがなどの主力選手がそろっている。が、何故か上手くいかない。主力の怪我だとか不調などで中々浮上しないのだ。まあ毎年計算通りに動くことなどないのは当たり前なのだが。

その第一戦、試合は両エースの好投からはじまった。ブルーバーズ

の先発・那須も財前もお互い開幕投手を務めていただけあって試合を作る能力には長けている。均衡を破ったのはブルーバースだった。6回、二死二三塁から美濃の走者一掃タイムリーでついに2点を先制。那須が前回のパツとしない内容を打ち破るかのように8回無失点の快投。9回には黒鷲座が登板し、安定の三者凡退。きっちり試合を締めくくった。

第二戦は宮内が力投。2回の犠牲フライで1点を先制したが、中押し点が遠い。しかしこの日のブルーバースの先発、宮内にとつてはそれだけで十分だった。初回到ピンチを招くもこれを凌ぐ。そこから先は回を追うごとにギアを上げていき4回からは2塁をも踏ませない圧巻のピッチング。そのまま9回まで続投を志願し120球の快投で完封を記録した。

第三戦。ブルーバースの先発は八家。毎回のようにピンチを招きながらのらりくらりとかわすピッチングで、5回3失点に抑える。そしてブルーバース打線は8回に活性化。ダイヤモンドバックスの誇るセツトアッパーを打ち崩し、この回5得点のビッグイニングを作った。リードを奪ったとなればブルーバースも勝利の方程式の出番だ。その回の裏、北が五者凡退で抑えていよいよ試合は最終盤へ。9回のマウンドを任されたのはやはりこの男・黒鷲座だ。先頭打者に今シーズン初ヒットを許し、進塁打でランナーを二塁に進められたがここから黒鷲座が粘る。次の打者を高めの釣り玉で三振に仕留め、最後は二球目を打たせてサードへのポップフライ。相も変わらぬ安定感で試合を終わらせた。

まだ春とはいえ、汗はかくものだ。汗をタオルで拭き一息つく黒鷲座の元へカメラマンが駆け寄ってくる。最初はヒーローインタビューかと思っただが、すぐに違うと分かった。

「ああ、ブルペン放送局の方ですか」

「黒鵜座選手、来週の放送に向けて一言お願いします！」

「突然ですね。じゃあえーっと、勘違いされるかもしれないですけど僕もちゃんとアウエーでも投げてますからね？ そこんところお願いします」

先週のあらすじは以上である。そして今から、第4回の放送が始まろうとしていた。

## #4 part1

「お久しぶりです視聴者の皆さん！ お元気にしていましたでしょうか！ 少々大きさに聞こえるかもしれませんが、『男子三日会わざわざ刮目して見よ』という言葉もある事ですし、一週間という期間は何か変化が起こるには十分すぎます。僕は僕で頑張りましたよこの一週間。一つ聞いてもらいたいですよ本当に。ここまで9試合を消化したわけですが、僕が登板したのは5試合です。えーこのままのペースで登板が続きますとなんと80試合に登板することになるわけです。ハハツ、アンタッチャブルレコードは超えてないとはいえ60試合登板が結構な負担である事を考えると普通に過労死ラインです。というか流石に80登板はきついですって、頑張ってくださいよ打撃陣。これで僕が怪我なんてしてこの番組打ち切りになったらどうしてくれるんですかって話ですよ。まあ流石に最終的には60試合程度までには留まるでしょうけど……それでも先行きは不安ですね。今日は今シーズン初めての広島レッズ戦です。それはそうと、そろそろ本題に戻って今回のゲストを紹介しましょうか。今回はです、まあ予告はしていたんですけどブルペン放送局としては初！ 外国人ゲストでございます！ それでは登場していただきましょう！ アメリカからやってきた黒船セットアップ、KKことカービー・カイル投手とその通訳にして代理人・ホークさんです！」

スタッフと黒鷲座の拍手に包まれながら、手を振りながらKK達が入場してくる。KKは体格に恵まれているプロスポーツ選手の中でも群を抜いて背が高く、かなり筋肉質だ。加えて右耳にはピアスをして肩までの長さの金髪を一本にまとめていることから初対面の人からすれば威圧感を覚える見た目である。顔は外国人っぽく面長で、青くて細長い瞳、そして口元にも顎にもひげは生やしていない。以前黒鷲座が何故ひげを生やしていないのかを聞いてみたところ、妻に「清潔感がない」と言われ剃られたらしい。ユニフォームの上からだと見えないが、肩にタトゥーもしている。これが文化の違いという奴か。

「二ホンのミナサンこんにちは！ ドウモ、黒鵜座というバカがお世話になってマス！」

「おいちよつと待てKK、最後のは誰かからの差し金だコラ」

「ダレって、エンヤが最初にこれをお話せと言ってたケド？」

「やっぱり熱田か。あの野郎めエ……KKが純粹だからって変な事吹き込みやがって。後でとつちめてやる」

頭に青筋を立てる黒鵜座の横でKKは首をかしげる。どうやら自分の言ったことの意味もよく分かっていないらしい。まあだから通訳がいるわけなんだけど。

「まあいいでしょう、とりあえずKK。今ブルペン放送局に出てるわけだけどどんな気分？ ってホークさん伝えてもらえる？」

「OKネ！ ～～～」

「～～～」

二人が英語で会話している。黒鵜座は高卒であるために、その英語力もたかが知れたものである。よって彼は会話についていくことが出来ない。と、話が終わったらしい。

「日本のテレビ、クレイジーね！ 自由の国アメリカでも普通こんな事しないヨ！ でもトテモ興奮してるヨ！ やっぱり新しいコトをするのは楽しみネ！」

「クレイジーの所だけ聞こえました。ありがとうございますホークさ

ん。まあそうですね、いつかやりたいと自分では思っていましたけど  
そうそう許可してくれる所もないですから。それでもKKが割と乗  
り気で良かったですね。じゃあハガキを取ってください」

「~~~~」

「OK、OK」

ホークの通訳に首を縦に振ったKKがいつもの箱の中に手を入れ  
る。よく分からない鼻歌を唄いながら中身を混ぜていく。そしてよ  
うやく一枚、ハガキを取り出した。

「Here you are」

「サンキュー。えーペンネーム『青鳥すこすこ侍』さんから。『黒鷯座  
さん、KKさん、こんにちは』、はいどうもこんにちはー！ 『KKさ  
んに質問です。日本に来てから好きになった日本食を教えてください  
い』だそうです、じゃあホークさんお願いします」

「~~~~」

「Yes, yeah. ~~~」

「~~~~」

「~~~~」

「色々あるけど、やっぱり一番はラーメンだね！ あの味は一回食べ  
ちゃったらクセになっちゃうヨー！」

「あー、熱く語ってくれている所申し訳ないけど、ラーメンって日本食



じゃなくて中華料理じゃ……」

「黒鵜座さん黒鵜座さん。実はラーメンって発祥は日本らしいですよ」

「えっマジっ?」

その場にいたスタッフの一人の声によって訂正がされる。話によるとラーメンは確かに中華麵を使つてはいるものの、最初に作られたのは日本であるとか。何でも中国の料理人を雇つて日本で一般向けに作られた中華料理の一つがラーメンであるらしい。何だかややこしいな。

「何か一つどうでもいい豆知識を学んだ気がしますね。あ、でもラーメンって色んな種類? とうかスープがありますよね。醤油とか塩とか。そこんところどうなんですか?」

「~~~~」

「~~~~」

「やっぱりワタシのテイバンはトンコツだね!」

「あく豚骨ラーメンか。臭いはちよつとキツイけど確かに美味しいよね」

「ソレにたつぷりのモヤシと肉厚のチャーシュー! ホークをよく連れていくけど、ヤミツキになるネ! ……実はワタシも結構食ベマス」

「……んん?」

「アノ山盛りのラーメンにドロドロに溶けたスープ！ あれを最後まで飲み干すのが礼儀って聞いたことあるヨ！」

「あー、もしかして三郎系ラーメンの事なのかな？」

三郎系ラーメン。よく知らない人のために説明すると、一般的に麺が見えないほど具を盛りに盛ったラーメンの事である。ラーメンの一大有名チェーン店の名前からとってそのように呼ばれるようになった。黒鷄座も一度だけ食べた事はあるが、あまりの具の多さとその量から非常に苦戦した覚えがある。いや食べるのに苦戦ってなんだよ。人によつて違いはあるだろうが黒鷄座としてはもう二度と行きたくないと思えるレベルだった。

「Yes, yes, yes！」

「その領きようから見るにそうらしいですね。というかプロ野球選手があんないかにも不健康の塊です！ って感じのものを食べるのはどうなの……？」

「~~~~」

「~~~~」

「Ah~, 大丈夫だよ！ アメリカにいる時もしょっちゅうハンバーガー食べてたし！ 運動してカロリーを消費すれば問題ナシ！」

「まあ間違つてはないし、体を大きくする方法として間違つてはないのかもしれないけど。何か腑に落ちない……。えー話がとりあえず一区切りついたところでCMの時間です、この続きも皆さんお楽しみに！」

## #4 part 2

「いきなり先制しましたね、我らがブルーバース。このままリードを広げて勝利の方程式が起用される事無く試合を終えてほしい所ですね」

「~~~~」

「~~~~」

「ワタシは登板しても構わないヨ！　だそうですよ黒鷲座サン！」

「うっわー流石タフネス右腕、言う事と信頼感が違う。これ聞くと多分仲次コーチも金子監督も喜びますよ」

「何たってワタシのお給料に関わるからネ！」

「あ、そういう……結構そこら辺ドライなんですネ」

放送が再開した頃には、ブルーバースが4番・ドウリトルのタイムリーで先制に成功していた。とはいえまだ一点差、こういう緊張感のある試合で登板するのが一番プレッシャーになる。だから黒鷲座としてはあまり登板したくはないのだが……、KKはビジネスとして割り切っている分投げたがりだ。成果主義の傾向が特に強いプロスポーツ選手にとっては当たり前の事だが、チャンスは多ければ多い程よい。その結果悪い方向に転がる事もあるが、それはある程度仕方ないことだとも言える。

「えーそこはまあ置いとしまして。では引き続きハガキの紹介に戻っていきますかね。ペンネーム『そよ風の使者』さんから。『黒鷲座選手、カイル選手、どうもこんばんは』、あそつか今もう夕方だね考えて

みれば。『お二人の活躍をいつもテレビから見えております、二人ともとてもカッコよくて子供たちも憧れています』、うんうん、ありがたいことですね。『お二人にお聞きします。カイル選手は日本に来て驚いたこと、黒鷲座選手はこれまでのプロ野球人生でびっくりしたことを二つずつ教えてください』との事です。というわけでホークさん、通訳」

「~~~~」

「Yeah, yes, yes. ~~~」

「~~~~?」

「~~~~」

「OK, OK」

中々にこの状況はシニールだな、と黒鷲座は思う。とはいえ、間に挟まるようなことは出来ないけれども。改めて通訳とは大変なんだなど痛感させられる、これで代理人の仕事もやっているんだからすごいものだ。何でこの人通訳やってるんだろう……?」

「アー、まず二つ目はタトゥーをしていると温泉に入れないことですネ。モチロンそうではない所もありますが、一番入りたかったところがダメだったのでショックでした」

「文化の違いですね。外国から来た方で驚く人は多いんじゃないでしょうか。確かにNGな所も結構ありますからね。タトゥーをしている皆さんは温泉に行く前に先に調べておきましょう」

「次に二つ目。ジャパニーズベースボールとメジャーリーグの違い

ね。メジャーの野手はセーフティバントくらいしかしないけど、二ホンはバント多い。それに足でかき乱してくることも多いから、最初はとても困惑したネ。クイツク覚えたのも二ホンに来てからだし」

「小技をからめて得点を取るの日本流ですよ。メジャーリーグはとにかく振ってヒットやホームランを打つビッグベースボールが主流ですから。海外から来る選手は新鮮でしょう」

「だけど、二ホンの人優しい。ワタシがここに来るときもいっぱいサポートくれた。おかげで家族みんな二ホンに来れたヨ」

「あー、そういえばウチの球団は外国人に対して色々尽くしてくれますからね。家の手配から始まり家族の生活のサポートまで。だから結構ウチの球団は助っ人選手に感謝されるんですよ。前いた選手なんて別れるときに泣きながら『ここでの思い出は僕にとっての宝だ』とまで言ったららしいですから。異国に慣れるためのサポートはやはり必須ですね」

「ウンウン」

あ、そこで領くのはホークさんなんだ。まあ日本語分かるのはホークさんだし仕方ないか。

「それで僕の場合ですよ。一つ目は……分かってはいたつもりなんですけど、皆さんやっぱ球が速いんですよ。メジャーでも驚いたんじゃないですか？」

「~~~~」

「~~~~」

「そうですね、向こうでは150km/hは普通だから。160km/hを投げるピッチャーを見た時は驚いたね。球が速い投手と言えばブルーバースにもエンヤや北がいるけれど、最初は生き残れないかとも思わされたヨ」

「メジャーリーグの基準で考えるともつと顕著ですね。球速つてぱつと見て一番分かりやすい数字ですから、やっぱりすぐ目立つんですよ。一応コントロールの良さとかを表す指標もあるにはあるんですけど、そういうのは数試合消化してからじゃないと分からないという欠点があるから球速のシンプルさには勝てないですね。話を戻しましょう、やっぱり球が速いというのは強いですよ。僕はプロになって球がそこそこ速くなった感じなんで初キャンプの時はすごい驚かされました。僕なんかすぐにクビになるんじゃないかと思いましたもん」

「~~~~」

「~~~~」

「それで、次の話は？　つて言ってますネ」

「そんなに気になる？　いや〜どうしよつかなく」

「ハジメ、イジワル！」

「分かった、分かったよ。ていうかそこは伝わるんだ。えーあれは二年前、つまりKKが加入した年だね。その6月……いや7月だったかも。そのどのどっかの試合で代打に出されたことですかね」

思い起こすのは、あの日の記憶。愛知ドームでの試合、延長戦で迎えた11回の裏、それも満塁のチャンスで黒鷲座は確かに打者として

試合に出場した。

「~~~~」

「~~~~」

「そんな事もあたネ！　びつくりしたのを覚えてるよ！」

「いやあの瞬間一番驚いたの僕ですからね。代打としてコールされる前に金子監督に『お前、バッティングに自信はあるか』とか言われたんですから。まさか野手を全員使い果たしたとは思わないじゃないですか。しかもその前最後の野手を代走に出してるし。投手のところに回るまで勝負を着けるつもりだったんでしようけど、その目論見ももの見事に粉碎されてるし。マジでこの球団ブラックだなんて思いました。あ、ジョークですよ？　軽いジョークですけど」

「~~~~」

「~~~~」

「ハジメ、そのジョーク中々にキレッキレね！　とはいえあの打席の裏でそんな事があったとは思わなかったよ！　それでも打つのがすごいよハジメ！」

「へへっ、よせやい。まあ』とにかくバットに当てさえしてくれればいい』って監督に言われて。その通りに従ってそれだけ意識して見たら案外芯に当たりましてね。外野が前進守備だったのもあって打球はセンターの頭の上ですよ上。いやー当たった時の感触は気持ちよかったですね。あの時の相手ピッチャーの顔！　ふふっ、多分あれは一生忘れないですね。ヒーローインタビューも投手の時より目立ってたし、なんやかんや打って良かったと思います。それでは一旦コ

「マーシャルです」



## #4 part 3

「試合は現在3―1でブルーバーズが優勢。4回の表を迎えております。いやー僅差ですねえ、中々に競っていたいい試合じゃないでしょうか。あとは先発の海原うなばらがどう踏ん張るかですね。裏とはいえローテーションの頭を任されている投手なんですっかりリードを守り切ってほしいですね。前回みたいに爆発炎上しないといいですけど。幸いウチはリリーフが盤石ですから、6回まで繋げられれば勝てますよ。そこはもう任せてください。というわけで続き、やっていきましょう。それではKK、次のハガキを頼む」

黒鷲座が箱をポンポンと叩いてハンドシグナルでハガキを取るようにKKに促す。流石に二回目なものだから、その意図はすぐにKKに伝わったらしい。ウンウンと首を何度も縦に振って箱を持ったかと思えば、両手で強く叩いた。バシン、という音がブルペンに響く。突然の事に黒鷲座も一瞬固まってしまっても、すぐに意識を取り戻した。

「って違う違うKK！ え、何で!? 何で箱叩いたわけ!? さっきは伝わったじゃん！」

「アハン？」

「いやまあ叩きはしたけどさ……あくまでも軽くだよ!! っていうか違うし、この中から引けって事だから！」

「P a r d o n n ? .」

「あつ、ダメだ伝わってないなこれは。お願いしますホークさん」

「~~~~」

「OK」

ホークの通訳を通してようやく意味が伝わったらしい。大人しくホークさんに頼っておけばよかったと黒鷲座は後悔した。一枚の紙を取り出すと、ホークに渡した。ホークがそれを読み始める。

「Pen name」言語を覚えたカエル」サンから。『黒鷲座サン、カイルサン、コンバンハ。僕は来日以来カイルさんのファンで、ユニフォームを持っています。』

「~~~~」

「それはとてもハッピーだね！　と言っていますね。『お二人に質問したいのですが、初めて会った時の第一印象を教えてください！』ということデスネ！」

「ありがとうございますホークさん、ハガキの内容まで読んでもらっちゃって。そうですね……僕から見たKKの第一印象というか、抱いた感想なんですけど『いよいよギャング連れてきちゃったよこの球団』と思いましたね。ただでさえでかい上にピアスとか入れ墨してるし、もう見た目がマフィアとかギャングとかのそれだったんですね」

「~~~~」

「~~~~」

「それは心外だと言っててるよ！」

「そこ訳さなくてもいいのに……大丈夫、今はそんな事思っていないか

ら。で、話を戻しましょうか。ウチの外国スカウトの方がいるんですけど、その人もその人で顔がいかついというか怖いんですよ。以前監督をやっていた人なのでもしかしたらフアンの皆さんも見覚え自体はあるかもしれないですね。本当にジャパニーズヤクザの組長と言われても信じるレベルの見た目なんです。まああの人見た目に反して結構気さくだし自分の見た目がある程度自覚している人なんで、こういういじり方しても怒られないから言わせてもらっているわけですけども。……え？ 相手の様子見ていじるかどうか決めるなんてダサいつて？ 仕方ないでしょ、あの人の場合下手に怒らせたら何も言わずにドスを渡してきそうだし。うん、あれに関しては無理ですよ。それでもビビりというならお前やってみろやオオン!? ゴホン、大変お見苦しい所をお見せしてすみませんでした。まあ長々と話してしまったわけですが、第一印象としては『日本と海外のマフィア同士が条約を締結したのかと思った』っていう感じですね」

割と酷い言い様だけど、これを本当に思ったのだから仕方がない。スカウトの人がボスで、KKがその側近。結構これが絵になる、まあ任侠映画だったらの話だけど。

「でも話してみるとKKは本当に良い人ですよ。皆さんこれを機にKKの良さを知ってください。彼は真面目だし家族思いでもある。そして何より勉強熱心なんですね。まあ熱心すぎてたまに変な事を覚えたりもしますが、そこも長所と言えば長所ですね。助っ人外国人の鑑だと思えます、つてホークさん伝えてもらえますか？」

「I see! ~~~」

「~~~~」

何かホークとKKが会話したかと思うと、唐突にKKは笑顔で黒鵜座の頭を撫で始めた。元々黒鵜座は平均男性の中ではそこそこ高い

身長ではあるが、プロ野球選手としてはそこまで高くはない。それとひきかえKKはかなりでかく、黒鵜座の頭がKKの肩にあるくらいだ。わしやわしやと頭を撫でる黒鵜座は当惑するほかない。

「ちよつ、えっ!?　なんで頭撫でんのKK!?　ホークさんマジで何て言ったんすか!　というかそれよりも今何言ってるか通訳してもらえます!?!」

「素直じゃないけど、たまにそう言う所がまた小動物みたいでいいよねって言ってるよ!」

「いや僕そんなにチビじゃないですから!　そもそも年そんなに変わらないでしょ!　っていうか分かった、分かったから撫でるのをやめろお!」

黒鵜座がKKの手を掴んで、引きはがす。頭を撫でられるなんて小学生以来だよ本当に。

「~~~~~?」

「気に入らなかったか?　って」

「……別に、そういうわけじゃあ無いですけど。ただ髪の毛のセットはちよつとこだわってるんで。あーあ、自慢の黒髪ショートがちよつと乱れちゃいました。あの角度と長さを気に入ってたのに。それよりもKKからの第一印象ってどうなのよ?」

「~~~~~」

「~~~~~」

KKが身振り手振りを交えながら何かを説明している。あ、今ちよつと背が低いつてジェスチャーしたな。だからKKがちよつと背が高いだけで僕は普通だったの、と黒鵜座はこぼした。

「最初はこんな線の細い人が本当に野球選手なのか疑った！ 背も低いし体格には恵まれてなかったからね！」

「肉付きが良くなって悪かったですね。そういう体質なんですよ昔っから。頑張つて食べてはみるけど中々体重は増えないし、そのせいか以前は被弾する事も多かったのが悩みでしたもん」

「でも年が経つ程ハジメの凄さが分かるようになっていったよ！ あんな独特な直球、メジャーでも見た事無いね！ それに結構ハジメはチームメイトを大事にする人間だし、黙って結果を残す仕事人みたいな存在！」

「Like a……like a……dried squid」

「ウーン、それはまるで、例えるなら……スルメみたいな人間デスネ！」

「スルメか……スルメかあ。え、褒め言葉だよな？ しつこいとかそういう意味じゃなくて、噛めば噛むほど味が出る的な。肯定的に受け取つていいんだよね？ ……ハッ、もしかしてこれは暗示!? このままだとお前、干されるぞというメッセージなのか!? でも人をいじるのはやめませーん、何たって楽しいですからね！」

「では、CMのお時間デス！」

「そこホークさんが言うんだ!？」

#4 part 4

「1点取ったよブルーバーズ！ これで3点差ですね！ これは先発の海原もある程度楽に投げられるんじゃないでしょうか、というわけでブルペンラジオの続き、やってまいりますよう！ えー今度は僕が引く番ですね。じゃあ……これですね。ペンネーム『まつもと』さんから。これは字からして……ひよつとすると小学生かな？ 『黒うぎ選手、カイル選手こんばんは』、はいどうもこんばんは！ 『僕はお父さんやお母さんによく夢を持つように、と言われます。だけど、夢ってどんなものなのか正直よく分かりません。なので二人の夢を教えてください』、だそうです。はー、なるほど最近の子供ってのも案外大変なものですねえ。僕の場合なんかは親が良い意味で好きに生きろって感じだったんでそこまできつくは無かったです。教育に悪い事言うなって親御さんは思うかもしれないですけど、子供って意外と多感なんですよ。だからそうやってリードを繋がなくても生きていけると思いますよ。はい、とそんな無責任な事を言ったところで本題に入りましょうか。そんな屁理屈をこねるのも悪い大人ですからね。じゃあホークさん、KKに聞いてみてください」

「~~~~」

「~~~~」

「~~~~」

「~~~~」

お、今度はホークさんが領いている。何か羨ましく思えてきたな。こういう間に入れないのは何だかもどかしい。例えるならそう、二人が共通の話題で盛り上がっているのに自分だけ知らないから入れない、的。あ、会話が終わったらしい。

「ワタシはですね、二つ目標を立てます。小さなターゲットと、大きなターゲットですね。あえてこれを二つ作っておくことでモチベーションをキープしているわけなんです」

「あ、そうなんですね。KKの強さの秘訣はそんなところに……丁度いいや、大した目標とかないしパクろ、じゃなくて参考にさせてもらおう」

「まず小さなターゲットですが、日本でリリースとして活躍して『最優秀中継ぎ賞』を取ることでスネ」

「え、大きくない？ 大きいよねその目標は。つていうかKKは最初先発として日本に来たから、てつきり目標に挙げるとしても最多勝とか最優秀防衛率とかだと思ってたけど。そこのところどうなの？」

「~~~~」

「~~~~」

今度はKKが首を横に振る。という事はもしかして今はあんまり気持ちが先発に向いていないという事なのだろうか？

「ターゲットはこれくらい大きくないと意味がありません。むしろ二ホンの皆さんは謙虚すぎです。夢を持っていないといい結果もついて来ませんから。それに、二ホンに来てからワタシ気が付きました。ワタシはどちらかというリリース向きみたいです。1イニングを投げる事に全力を尽くした方が性に合ってるんだと思います」

「あー、じゃあやっぱり先発よりもリリースでタイトル獲得を目指す」と

「けれど、メジャーリーグでのリリーフの評価低い。クローザーにならないとあんまりマネーもらえない」

日本でもそうだが、メジャーリーグでのリリーフに対する評価の低さは特に顕著だ。抑えられるならそもそも先発やクローザーをやらされることが多いし、入れ替わりが日本よりも激しい分登板数もかさむことは無い。だからあまり中継ぎは他のポジションに比べて給料を多くもらえないのだ。けれど日本には最優秀中継ぎという分かりやすい賞がある。取るのは難しいかもしれないが、その分箱がつくというものだ。

「なるほど、だからKKは投げたがりなんです。いつも投げようとする理由がちよつとだけ分かった気がします。あ、それでそれで、大きな目標は？」

「~~~~」

「~~~~」

「それはやっぱり、メジャーのマウンドに立つことですね。もうワタシの年齢は30を超えましたが、それでも夢を捨てきれないというか。子供の頃からずっと夢だったんです。多くのサポーターに見守られながら打者を見下ろす景色はどんなものなんだろうって思いながら生きてきました。だからワタシは、あのマウンドに立てるまで野球を続けると思います」

「いや、立派ですね。万雷の拍手で称えたいほど立派な志だと思います。子供の頃に憧れたものというのは大人になっても頭の中から引っ付いて離れないと言いますが本当なんです。『まつもと』さん、こういうのですよ。今は分からなくてもいいです、だけど色々経



験してみてください。もしかしたらその中で雷に打たれるほどシヨックを受けるものに出会えるかもしれません。それがきつと自分の夢になるんじゃないかと思えます。まあ僕もピッチャーというポジションに憧れた一人ですから」

「~~~~」

「~~~~」

「なんかいい感じで締めようとしてるけど、ハジメの夢をまだ聞いてないネー！」

「え、KKの夢に比べればちっぽけと言うか、多分視聴者も拍子抜けしますよ?」

そういつて黒鷲座はちらりとKKの方を見て確認するが、彼は依然目を輝かせたままだ。なるほど、言えという事か。こうなつてしまつたら言うしかないよなあ。ため息をついて、黒鷲座は話し始める。

「……言つても笑わないですよね?」

「ヒトの夢は笑わないヨ!。そういうことはしないのがポリシーだからね!」

「はあ、仕方ないですねえ。まあKKの言う小さなターゲット、大きなターゲットに分けて話していきましようか。まずは小さなターゲットからです。これはシンプルに行きましょう。胴上げ投手になりたいです。いや本当は去年そうなりたかつたんだけど、去年はマジック1の状態で2位が負けての優勝だったんで胴上げされなかつたんですよ。だから今年こそは、という思いです。まあ僕一人が出る事なんてたかが知れているので皆さんにも頑張つていただきた

いところですけども」

「~~~~」

「~~~~」

「ハジメならなれるよ！　だそうデス」

「まあウチはただでさえ接戦が多いチームなんで登板機会とかは心配してないよ。逆に投げすぎになるんじゃないかって話だけど。えーつとそれで大きなターゲットですね。これは平凡な願いなんですけど、出来るだけ長く投げ続けたいです。怪我や実力不足でチームを離れる人も多い中、怪我せずについているのは無理だとは思いますがどやっぱり一番長くマウンドに立てる人間でありたいですね。だからメジャーリーグでプレーして短い間で大金を稼ぐよりも息の長く、言い方は悪いですけどセコセコと地道に貯金を積み重ねていきたいと思ってます」

「~~~~」

「~~~~」

「それもそれでいい人生だと思うよ！　でももつとでつかく野望を持つってもバチは当たらないね！　との事です」

「うっせーわ、これが僕の人生なんですー」

「おい、KK。そろそろ準備すんぞー」

後ろから仲次コーチの声がする。確かにそろそろ状況としてはセットアップが登板する機会が近づいている。じきに黒鷲座が呼

ばれるのであろう事も容易に想定できた。

「OK、boss！　じゃあハジメ、先行ってるヨ！」

「俺はボスじゃねーっての……」

そう呟きながら仲次コーチがKKと共に歩いて行く。静寂の中に一人、ぽつんと黒鷲座が残された。

「えー、KKが行ってしまいました但番組はもう少し続きます！　なのでお楽しみに！」

## #4 part 5

「はい、そろそろ試合もこの放送も終わりの時間が近づいてまいりましたが、元気にやっつけていきましょう！ えーゲストのKKが今から登板しようという所で、自分もそろそろ行かなきゃいけないので代わりに新しく助っ人を読んできました。第二回のゲスト、芝崎怜司選手です！」

「おい待て。突然引つ張り出してきたかと思えばこれか」

「いいじゃないですか、どうせ今日は暇でしょ？」

全くもって最近の若者はどうかしている、という芝崎のぼやきも無いかのような笑顔で黒鷲座は拍手を送る。それから黒鷲座が何か紙を取り出すと何やらカメラが拾わないレベルの声で芝崎にささやいた。

（大丈夫ですよ。ほら、ここに念のための台本がありますから。何かあった時はこれを使えば万事解決です）

（……なるほど、そういう手があったか。それにしても台本を用意しておくなんてお前も悪い奴だな）

（へっへっへ、褒め言葉として受け取っておきましょう。じゃあOKですね？）

傍から見ると賄賂にしか見えないその構図だが、プロ野球選手は多分そんな事をしないので安心してほしい。多分。

「えーじゃあ僕が投球練習を始める前に次回のゲストだけでも紹介しておきましょうか。次回のゲストは……変幻自在の切れ者、八家亘選はつけあたる

手です！ つて八家さんですか？ あの人の確かに時々リリーフやるけど基本は先発じゃ……いや別に先発投手を差別しているわけじゃないですよ、そういうわけじゃないですけどこの放送って本来リリーフに焦点を当てるためのものであって……まあ放送が明日なので今更変えるわけにもいかないのは分かってますけど」

「おい、黒鵜座。次はお前の出番だぞ」

後ろから仲次コーチの声が飛んでくる。こうなってしまうのは黒鵜座も反論している暇はない。

「はい、分かりました。今行きまーす！ というわけで不本意ですが、後は芝崎さんにお任せしようと思います。それじゃ芝崎さん、後は手筈通りをお願いします」

「仕方ないな、任せておけ」

「それでは皆さんさようなら！ もしくはこの後で！」

手を振りながら投球練習場へと小走りで行かう黒鵜座を見送りながら、芝崎はふと考えていた。確かに一応台本をもらったとはいえ、一人というものは心細い。それにトークショーならまだしも、一人で喋り続けないといけないわけだ。ただ、出来るだけ黒鵜座の力を借りたくないというのも本音だった。

「えー……皆さん、晩御飯は食べましたでしょうか。もう食べたという人も多いと思います。俺はというと、まだです。試合開始が18時からなので、プロ野球選手の夕食は案外遅いんですね。ちなみに今日は妻が鮭のムニエルを作ってくると言っていたので、今から楽しみにしています」

沈黙が続くことしばし。ようやく芝崎は黒鷲座が台本と言って渡した紙を開こうとした。すまん、黒鷲座。見栄を張って済まなかった。俺には荷が重すぎる。そうして開いた希望の中には――。

『困ったら試合の状況でも解説してください。応援しています☆』

反射的に芝崎はその紙を破り捨てた。いや、違うだろこれは。こんなものは台本とは呼ばない、ただのメモだ。嵌めやがったなああの野郎。黒鷲座のしたり顔が目につかぶ。よし決めた、あいつが今日戻ってきたら一発ビンタを決めてやろう。

「……すみません、何でもないです。さて、試合の解説をすまじましょう。今カイルが投球練習を終えて投げるところです。知っているとは思いますが、まずは彼の経歴から。アメリカの大学を卒業後、メジャーリーグのチームから指名を受けて入団。しかしメジャーリーグの壁に阻まれAAAでくすぶる日が続きました。その姿がブルーバーススカウトの目に留まり、2年前に先発候補として入団。そうして紆余曲折を経て、現在は勝利の方程式として活躍というわけですね」

KKがセットポジションから左足を踏みなおし、全体を大きく動かすフォームから1球目を投じる。148km/hのストレートが打者の内角、ストライクゾーンへと突き刺さった。審判の甲高いコールが球場によく響く。

「はい、今のボールに注目しましょうか。カイルの武器は大きく分けて二つ。その内の一つが今の直球です。最速何キロだっけ、確か……150km/h中盤だったと思います。それで、それがどう厄介なのかという小さく動くんですよ。テレビや球場の遠くからだと分かりづらいと思いますが、打席に立ってみればわかります。微妙に変化します。これが外国人特有のボールと言いますか、まあ打ちづらくて

ですね。打者が苦戦するというわけです」

淡々と話しているうちに決着がついた。先頭打者は3球目の直球を詰まらせセカンドへの平凡なゴロ。これを冷静にさばいて1アウト目を取った。

「投手というものはどうしても繊細な生き物でして、リズムに乗れないと炎上することもしばしばあります。だからもし投手になりたい、もしくは投手をやっている人はここをよく聞いておいてください。一番大事なのは1アウト目です。そこを取るまでが難しいというが大変です。だから力を入れるべきなのは最初の打者ですね。これさえ取ればあとはその流れに任せて行けると思います。これはリリースの話ですけど」

そんな事を言っているうちに二人目の打者も初球を打ち上げてファーストへのファウルフライに倒れる。これで2アウト、これがリズムに乗るといふことだ。続く三番打者のところで投手に代わって右の代打が出される。一球目、右打者の肩に当たるかというボールが変化して糸で操られたかのようにストライクゾーンに吸い込まれた。

「これがカイルのもう一つの武器、縦に大きく割れるカーブです。とにかく変化量が大きくて、今みたいに打者に当たるかと思われのような軌道からゾーンに入ってくるのが厄介です。本人はこの球の制球の悪さを気にしていましたが、直球とのコンビネーションは抜群。だからあんまり気にしなくてもいいと思いますけどね」

結局フルカウントまで持ち込んだものの、最後は直球で見逃し三振にとつてこの回の頭を終えた。ベンチへと笑顔を浮かべながら引き上げていくカイルの姿を横目に、芝崎は解説を続ける。

「終盤で3点差とは想像以上に大きなものです。それにうちのホーム

球場は広いので、ホームランも中々狙えません。後は勝利の方程式に任せれば完璧です。……なんて言っている間にまた点が入りましたね」

その回の裏、ブルバードの攻撃。美濃の今シーズン第1号となる2ランホームランでレッズを突き放した。リードが出来たことで、リリーフは必要ないと判断されたいらしい。黒鷲座が何かをつぶやきながら帰ってきた。

「投球練習したつてのに今日はこれで終わりかく、何か投げ損って感じだなく」

「よう黒鷲座。突然だが、俺は今からお前をビンタしようと思う」

「え!? 何すか突然!」

「じゃああの紙は何だ」

「あ、あ……。だってそうじゃないと断りそうじゃないですか」

「とにかく一発ビンタさせろ」

「嫌ですよ! こういう時は逃げるが勝ち! じゃあ視聴者の皆さん今度こそサヨウナラ! 次回をお楽しみにね!」

「待てやおい」



「平日の夕方、くたびれたサラリーマンの皆さまご機嫌いかがでしょうか！ 元気なわけないだろうって？ はっはっは、まあ今だけはこの放送を聞いて少しでもリラククスしていつてください。ブルペン放送局、司会の黒鵜座一です。今回の放送からですね、新機能が追加されることになりまして。テレビ放送だけなんですけど皆さんのコメントが画面下に流れるようになりました！ これは今僕らでも見る事ができます、さながら動画サイトの配信みたいな感じですね！ 盛り上げていくためにどんどんコメントいただけると嬉しいです。いやー、この番組にもいよいよ近代化の風が吹いてきたという所ですが今回のゲストを紹介しましょう。……と言いたるところなのですがゲストの方が登場の仕方をやけにこだわっているそうなので、今回は特殊な方法で登場してもらいましょう。それではミュージック、スタート！」

黒鵜座がパチン、と指を鳴らすとブルペンの中にラップの音楽のようなものが響き渡る。ブルペンにもし人が多くいたなら絶対に「うるさい」というクレームが入るだろうが、今は関係ない。せいぜい仲次コーチの鋭い視線が黒鵜座に突き刺さるぐらいだ。なお黒鵜座はそれに気づいていない。気づけ黒鵜座、気づけ——！

「Yo！Yo！俺の名を言ってみな♪ 当たるも？」

そして目が見えないほど帽子を深く被り、紫色の短髪をした人物が何やら歌いながら登場してくる。ついには合いの手まで要求してくる厚かましきだが、黒鵜座はノリノリである。ストッパーがいらないというのはこんな空気なのである。おいストッパーだろ黒鵜座、何とかしろ。

「八卦！」

「当たらぬも?」

「八卦!」

「Crap your hands! そうさ俺は八家♪ はっけあたる 八家亘、ここに参上! 沸かせてやるぜこの壇上♪ 胸からこみ上げるこの感情♪ そしてここがお前の刑場♪ Yeah~!」

「ハイハイヘーイ!」

「チエケラー!」

二人の間で謎のハイタッチが交わされる。この地獄のようなラブを止める者は誰もいない。いないのである! 第5回もまた波乱の幕開けを迎えていた。

「えー、というわけで今回のゲストはですね。変幻自在の切れ者、八家亘さんでございます! まあファンの皆さんも分かかっていらっしやるとは思いますが何が変幻自在かと言うとですね……」

「待つんだ、一君。ここは俺から言おう。俺は自分の身さえ委ねる唯一無二の旅人、そして誰にも囚われないそよ風さ」

「それで分かる人どれだけいるんでしょうね。『ここは俺から言おう』って何だったんですか。アレですか、自分が未だに中二病だというアピールをですか。仕方ない、これじゃ分からないんで僕が言いましょう。彼はですね、一言で表すと簡単なんですよ。野球史始まって以来の魔球ってなんだと思います? フォーク? それともカーブ? いえいえ、違うんですよ。無回転から生み出される不規則な変化、ナックルボールこそが真の魔球と言えるでしょう! その数少な

い使い手こそが彼、八家亘さんというわけですね。初回の放送でほとんどの投手の基本はストリートと言いましたが、ウチには二人例外が居ます。その一人が彼なんですね」

「ふっ、中々いい響きじゃないか。悪くないだろう」

まんざらでもない顔で八家が微笑む。少しキザという風に印象を受けるかもしれないが、これが八家にとっての自然体である。そっとしておいてあげて欲しい。

「ナツクルの投球割合8割くらいでしたっけ？」

「いや……こういうのはあまり言うべきではないのかもしれないが、7割くらいかな？」

「まあそれだけ投げられるなら大したもんですよ。あ、質問が来ているみたいですね。せっかく導入したんでコメントを読んでみましようか。えーっと『八家さんにピッチングの極意を教えてください』ですってよ」

「簡単な事さ。握りはいつも通りに、後はそのまま流れに身を任せてしまえばいい。それで良き結果が付いてくるならそれでよし、悪い結果が出たとしてもその日は風向きが向こうにいった。そう考えて心の赴くままに臨めばいいんだよ」

「あー……これは、質問する相手が悪かったかもですね。この人本当にナツクルと心中するくらいの覚悟を持ってプレーしているんですよ。まあ碌郎のように開き直ってピッチングするのも大事だとは思いますが、八家さんの場合は起こった事をありのままに受け入れますから。それって相当肝が据わってないと出来ないですよね」

「故障？・重症？・No, no! キープしろ不干涉!」

類は友を呼ぶという。それと同じように、変人は変人を呼ぶのだ。ちよつとばかりチクチクと突き刺すような言葉が好きなの黒鷲座と、回りくどい言い方を好む八家。彼らはどこか通じ合う所があるみたいである。何故か八家の言いたいことを理解できる黒鷲座は、とても良い理解者となっていたのだ。

「はいはい、別にとやかく言うつもりはありませんよ。でも突然ラップを始めるのはやめてくださいね、視聴者も僕もついていけないかもしれない。あ、違うコメントも来ているみたいなんです。『八家さんが時折ナツクルに交えてスローボールを投げるのは何でなんですか、ふざけてるんですか?』、フフツ、ふざけてるって……クツソウケる……! 答えちゃってください八家さん」

笑いをこらえてバイブレーションのごとく震えながら話す黒鷲座を横目に、八家は至って冷静に答えた。

「俺は真剣だよ。それに、これにも意味がある。いくら高級レストランのディナーと言えども毎日食べるようでは飽きてしまうだろう? それと同じ。世の中には刺激が必要なんだよ」

「分かりますかね、いや分かんないでしょうね今のじゃ。えーつと今のがどういう意味かというと、『いくら魔球ナツクルとはいえ、その軌道に慣れられると打たれる可能性も高くなる。だからそれを防ぐために時折違う球を投じている』という事らしいですね。でもそれが何でスローボールを投げる理由になるんです?」

「アヒルの中に白鳥を混ぜてもすぐにばれてしまうのは明白だ。だから代わりにガチョウを仕込むのさ。そうすれば相手が理解する事も少ないからね」

「あー、なるほど。違う球種だとすぐに見抜かれて打たれちゃうから、軌道が少し似てるスローボールをあえて混ぜるって事なんですね。……これ本当に僕相手じゃなければ辞書が必要なレベルですね、八家さんちゃんと日常生活送ってます？ 何か心配になってきたんですけど」

「ふっ、問題ないさ。こんな俺を必要としてくれるそれは困った姫君がいるものだからね」

「しばくぞ。しまった惚気話を引いてしまったチクシヨウ！ なんでこの人が既婚者で僕が独身なんだよ！ マジで納得いかないんですけど！」

黒鶉座が頭を抱え込んで呪詛を唱えながらうずくまる。自分にそういう話が無いのが相当効いたらしい。

「じゃあそろそろ休息の時間みたいだね」

「そうですね……。一旦、CM入ります」

## #5 part 2

「ちよつと落ち着きました、はい。取り乱して申し訳ありませんでした。それでは気を取り直してハガキの方読んでいこうと思います。じゃあ八家さん引いてください」

「ふむ、そう来たか。中々面白い事を考えるね」

「うるせーよ。というかそれ言いたかっただけでしょ。とつとと引いてください」

「分かったよ、これでいいのかい？」

「あー、じゃあついでに読んでください」

「ふむ、中々面白い事を……」

「言わせねーよ？ 諦めて普通に話せばいいんですよ」

流石に二度目はない、黒鷲座がそれをとがめた。黒鷲座も分かっている事ではあるのだが、これが八家の自然体である。見て分かる通り、レパートリーが少ないのが課題だ。

「では小鳥のさえずりが如き魅惑のウイスパーボイスで読み上げるとしよう。ペンネーム『伊賀者T』さんから。『制球力を上げるためにいつもやっている事が知りたいです。特別ではない事のほうがむしろやりがいがあつて目的を設定できるので、その意図についても教えてください』だそうだ。これは……制球力がある意味捨てている俺には風向きが悪いらしい。君に任せるよ」

「丸投げですか……いや確かに八家さんにコントロールのコツを聞く

のは間違いだと思いますけど。かといって自分が何か他の人と変わった事をしているかというのと、そうでもないんですよね。んー、例えば誰かに自分の投球を撮影してもらってそれを後で確認してもらうとか。何故こうなったかを自分の中で理解する事でコントロールも良くなるんじゃないでしょうか」

「いいんじゃないかい？ この質問者が求めているのはツチノコやネツシーのような答えではないよ。むしろ野良猫のようにありふれた答えでいいのさ。きつとこれを見ている視聴者もそれで納得するんじゃないかな」

「微妙に分かりづらいですけど、それでいいって事みたいですね。後は先にコースと球種を予告して投げてみるとか、ボールの握りを色々試してみるとかそんな所でしようか。効果というか、意図は言わずもがなですね。先に目標を決めて後から自分で採点したり、後はちよつとアプローチの仕方を変えてみたりすることですけどもとは違う視点で見られると思います。ってこれでいいんでしょうか」

「うん、それは良い答えだね。答えの数はあるに越したことはないから。そう、それはこの世の女性の数のように。宇宙にきらめく星のように、数多にある方がいいのさ」

その言葉に、黒鷲座は眉をひそめる。言い方からしてそれは大丈夫なのか？

「そんな事言ったら奥さん拗ねちゃうんじゃないですか？」

「う……それはまずいな。しばらく栄養価が高いからと言って苦手な食べ物ばかり食卓に並べられてしまう」

へえ、これは意外な弱点なんだなと黒鷲座は思った。どうやら八家

にとって奥さんの話題をするのはいじりがあるのかもしれない。

「奥さんを怒らせたことがあるみたいですね」

「そういう事もあったさ。この前なんてデート中にうら若き女性が落とし物をしていたみたいだね。手伝ってついでにサインを書いてあげたら、姫君はどうやら立腹したらしい。その日の夕食は俺の苦手なレバニラ炒めだったよ」

「あー、レバニラ炒めって結構人によって好き嫌い分かりますよね。っていうか奥さん独占欲強いですね。なんかそういうの聞いたら自分はまだ独身でいいかなとも思っちゃいます。一人なら好きなもの食べられますしね」

すかさず黒鶉座は独身マウントを取る。こんなものが無謀だなんてことは分かっている。だがしかし、黒鶉座にもプライドというものがある。もつとも、今は確実に必要ないが。

「それでも俺は彼女が好きだ。彼女の髪や、ちよつとした仕草、時折見せる無邪気な笑みとかがね。いくら長く、そして高く飛べる鳥であろうととまる木が必要だろうか？俺にとっての彼女がそれなのさ。それに、少しだけわがままな姫君だけども俺の事を必要としてくれている。さすれば、俺も王子様にならないとね」

「ぐっふあー」

圧倒的なパワーの惚気話を前にして、哀れ黒鶉座の心は爆発四散した。勇猛と蛮勇は似て非なるものである。当然のように後者であった黒鶉座はまるで強烈なカウンターを喰らったボクサーのごとく打ちのめされた。よろよろと震えながら、何とか黒鶉座は言葉を紡ぐ。



「それは……よかったですね……夫婦仲が良いようで何よりです。かなりの愛妻家なんです。僕もそう思える人に出会えればなあ……」

「おや、まだハガキに続きがあるみたいだ。えーつと『イラつきを和らげるコツやおすすめのルーティーンを教えてください』だそうだよ」

「これはまた難しい質問が飛んできましたね。まず一番に大事なものはスタートです。野球においても日常生活においても最初の一步が大切なんです。つまり何が言いたいのかというと、しっかりと早寝早起きをしろという事ですね。当たり前すぎてお前は何を言っているんだとなるのは分かります。けれど落ち着いてください。健康でないと出来ることも出来なくなってしまうからね」

「必ず起きろ morning ♪ そうすれば君は growing ♪  
鳴らすよ決戦の gong ♪ Yeah!」

「Foooo! 僕の言おうとしてくれたことを端的に示してくれてありがとうございます。いや後半関係ないなアホが! あっぶね、もう少しで騙されるところだったわ!」

「戦士と言えども息抜きが必要さ。君はもう少しゆとりを持った方がいい」

「いや誰のせいだ……まあいいです。あとは実戦でのルーティンですよね。特に変わったことはしてないと思いますが、こう、ボールを上投げてみる感じですかね。野球選手だからと言いますか、ボールを投げていけば自然と落ち着けるんです。自分はそれで冷静さを取り戻せますけど、おすすめかと言われるとあんまりですね。八家さんはどうなんです?」

「そうだね、俺は……マウンドに文字を刻むかな。今自分が求めてい

るものを改めて形にして表すことで整理が出来るんだ。言霊というもの  
の効果は不思議だね、そうすることで力が湧いてくるんだ。後は  
風景の写真を見るのかな。肉眼ではないけれど大きな自然を  
前にすれば、自分の苛立ちなんて大したことないと思えるからね」

「……何か八家さんがもってもらいたい事を言うとはそれはそれで腹立ち  
ますね」

「そう思うかい？　ならそれはそれで仕方のないことだね。いくら血  
を分け合った兄弟だとしても道を分かつことだってある。他人なら  
なおさらね。でも俺たちの目的地は同じだ。であれば、俺たちはどこ  
かでまた巡り合う」

「やめろマジで！　聞いているこっちが恥ずかしさでどうにかなりそう  
なんですよ！　少年漫画かこれは！　もういいや、コマーシャルの時  
間でーす！」

## #5 part 3

「試合は4回の裏、1―1でブルーバーズの攻撃を迎えています。ま―た接戦だよもう。この球場だとあんまり点が入らないんですよ。もう勘弁してほしいっていうかなんて言うか」

「それは俺たちの努力の結果と言えるだろう。どれだけ形が不格好でも、必死に作り上げた結晶は光り輝くだろう？ だから、それだけで美しいんだ」

「言い訳になっているようになっていませんよ。っていうか八家さんはもうちよつとイニング食ってから言ってもらえますかねえ？」

にっこりと笑みを浮かべながら黒鵜座が毒を吐く。先発の穴埋めの存在として試合を作ってくれているとはいえ、八家はあまりイニングを食わない。元々ナツクルボールというのは、肩や肘に対する負担が少ないという利点があるが、その反面自分でのコントロールが出来ない。そのため、テンポが悪く余計なところで球数を使うケースが多いのだ。よつて球数もかさみ、結果短いイニングしか投げられない。それが意味することはつまりリリーフの酷使である。

「努力はするよ。だけど俺のピッチングはいつだって風任せだからね。どんな方向にいくかなんて、予測できてしまう方がつまらないだろう？」

「無敵かよこいつ！ そんな放っておいて次のハガキ行きましょう。ペンネーム『アルティメットギタリスト』さんから。『私はバイトの傍らでいつか東京の日本館でのライブを夢見るギタリストです』、いやこの愛知ドームじゃないんですね、まあいいですけど。だったらその前にそのネーミングセンスを改善した方がいいかもしれないですね。あ、はい続きですね。『いつか野球選手の登場曲に選ばれるほどの曲

を作りたいと思っっているのですが、皆さんはどんな基準で登場曲を選ぶのでしょうか。教えていただけると幸いです』との事です」

「人によって好みは分かれるだろうね。俺は魂を揺さぶるようなライムが好きだし、音楽をよく聞くから気分によって変えるんだ。定番はやはり——」

「ちよつとストップ。こういうのって版權とかあつて面倒だから具体的な名前を出すのは……」

「アメリカでラップの神と崇められる『Jack Carl』、頭文字を取った通称、JCが好きなんだ」

「今僕やめろつて言おうとしたよなあ!? 喧嘩売つてんのかコラア!!」

平然と話す八家に対して黒鷓座が肩を揺さぶりながら叫ぶ。番組を潰す気か貴様ア! 何か球団の首脳陣から言われたのか!?

「ああもう、こうなつたら著作権とかで面倒なことになりますよ! 頑張ってください番組の制作の方々! はあ、全く急に何を言い出したのかと思えば……」

「彼の魅力はその悲しくも盛り上がるあのサウンドとこちらに訴えかけるような歌詞にあるんだよ。まあ歌詞は日本語訳を動画で探すんだけど」

「最後の一言で台無しだよ。え、じゃあ分かってないじゃん本来の意味。誰かの訳を通してしまったらそれはもう別物だからね?」

※あくまでも個人の見解です。苦情は黒鷓座選手にお願いします。

「ともかく、JCは最高だよ。一度ハマってしまえば中々抜け出せないくらいに魅力的なんだ。一回生でみてみたいものだね。君にも分かってもらえればこれ以上の喜びはないよ」

「ねえこれ切り抜かれて偏向報道されそうじゃないですか？ その、Jack carlさんがどれだけ凄い人かは一旦置いて。下手したら女子中学生を表すJCが八家さんは好きだって受け取られても仕方ないですよ。犯罪者みたいな目で見られたくないですよね！？」

「ふっ、それもまた一興……」

「全然一興じゃねーわ。この番組が変態と変人の温床みたいに扱われるじゃないですか！ こちとらまだ5回目なんですから変なイメーヅつけたくないんですよ」

「いいじゃないか、音楽というものはそういうものだ。バラバラな個性が集まって、一つの形となるものなだ。だから少し個性が尖っているくらいが丁度いいんだよ」

「他人事だと思いやがって……いやこれそういう問題じゃなくてですね。っていうかバラバラにも程がありますよ。これだと空中分解しちゃいますって」

「そうなるならそれも定めさ」

「……奥さんに言いつけますよ」

「すみませんでした」

奥さんの話を出すと途端に八家は大人しくなった。ようやく訪れた静寂に黒鷲座は安堵する。どうやら家では相当尻に敷かれているらしい。家での彼の姿が見てみたいものだ。

「分かればいいんですよ分かれば」

「それで、まだ君から聞いていないね。君は何であんなシンプルなサウンドを選んだんだい？」

八家が軽快なラップをよく選ぶ一方で、黒鷲座の登場曲はというと3度鐘の音が鳴るといっただけのものだ。シンプルというにもほどがある。

「あー、そりゃ僕にも振ってきますよね。当たり前っちゃあたり前か。いや僕もですね、人並みに音楽は聴くと思いますし何なら普通の人よりも流行に敏感だとは思っています」

「確かに君はトレンドに詳しいよね。ハチドリのように色んな花をとっかえひっかえ選んでいる姿をよく見るよ」

「っすー、その言い方辞めて下さい？ 二人っきりの時は別にいいですけど、こういう公共の放送だと変に捉えられかねないですよ。何ですか、死なばもろともってやつですか。勝手に僕を心中させようとしなくてください？ その言い方だと女の子を惑わせるチャラ男みたいじゃないですか」

「でも君の選んだものも味があつていいと思うよ。何と言うか、ゲームでいうラスボスが序盤に現れるような絶望感があるからね」

「まあ目指していたというか、そうなりたかったんですよね。こう、うーん一言で表すのは難しいですけど。この曲が流れれば相手が諦

めムードになってしまおうようなものにしたくて。メジャーリーグの登場曲を色々参考に見てみたんですけど、シンプルな方が自分に合ってるんじゃないかと思ひまして」

「それで鐘の音を選んだというわけか。うん、終わりっという感じがしていいんじゃないかな」

八家の一言に、黒鷲座が指をぱちんと鳴らして反応する。何だ、たまにはいい表現をするじゃないか。本当にたまになのがキズだけでも。

「そうそう、その感じですよ！ 色んな地域だとか国だとかの鐘の音を聞いてみてその中から決めたんです！ 出来るだけ絶望感を出せるように低く、それでいて鈍い音が良かったんですね。でもこれ、抑えられるからいいものの、打たれるようなら相手じゃなくて味方に絶望を与えるところでしたよ。風評被害を招きそうですね」

「あ、そうだ。これを送ってくれた彼にも何か一言添えてあげてはどうかな？ それを求められているような気もするし」

「何かって、えーっと……まあいつか、色んな人の登場曲に選ばれるような曲を作ってあげてください。音楽の力っていうのは思っているよりも素晴らしいですからね。ではそろそろコマーシャル、カモ——ン！」

#5 part 4

「えー、ここですね。何と新コーナーを始めようと思います！題して、その名も『黒鷲座一先生のお悩み相談室』！これはスタッフの皆さんが考案してくださいました企画なわけですけども。正直なところもっと早く出せやっ感じてですね。おっと失礼。えーこれはですね、普段皆さんのお便りを読んでお悩みに対する打開策を出させていただけます。今回の企画ではそれを解決していこうというわけですね。それで記念すべき第一回ですが――」

「ん？俺をじつと見てどうしたんだい？ふふつ、ひよつとして顔に蝶でも付いているのかな？」

「付いてるわけねえだろ……やっべえ、いきなり悩みとか無さそうな人が来ちゃったよ」

黒鷲座が肩を落とす。新企画、即座に頓挫の予感――。

「おいおい失礼だな。俺だって人間だからね、そりゃあ悩むことだってあるさ」

「うっそだあ。打ちこまれても平然としてるくせに。あ、女性関連の話とか無理ですよ、僕全く経験がないので」

「嘘じゃない。本当のことだよ。挙げるとすればそうだな……夫婦喧嘩をした時かな」

「やっぱ惚気話じゃねえか！ぶちころがすぞこの野郎!!」

「随分物騒だね」



「うぜえ……、何か余裕ありそうなところとか特にうぜえ……」

変わらず微笑みを浮かべる八家とは対照的に、黒鷲座はものすごくイライラしていた。なぜなら黒鷲座に相手がいないからである。この人ポジティブお化けだから何言っても通用しないんだよな……。仕方ない、番組の為に協力してやるか。

「まあ良く分からないですけど？ 協力ぐらいしてあげようじゃないですか。でないと話も進まないし。じゃあ僕奥さんの役やりますんで、喧嘩した事前提で行きましょうか」

「何だかコントのようになってきたね」

「……ちよつと僕も同じこと考えてましたけど、そういうのは言わないのがお約束ですよ」

その指摘通りではある。いや確かにコントっぽくはあるけれど、こういうのは仮定して実践するのが一番経験になるだろうから。知らんけど。

「えー、じゃあ行きますよ。んっん。『巨君の事なんか……』」

「待つんだ、ストップ」

「止めるのが早すぎませんか!?!」

「彼女は俺の事を『あつくん』、そう囁くように呼ぶんだ。リアリティを追求するならそこら辺しっかりしてくれよ」

「何だろう、キレていいですか？ あーもー、わがままですな。今度こ

そ行きますよ？ 『あつくん(ウイスパーボイス)の事なんてもう知らないんだから(裏声)！』

「Yo! 許してくれよ my honey! やりたい事は二人の自由! 深めていこう交友! 今君に伝えたい I love you!」

「では採点に入ろうと思います」

「早くないかい」

「先に聞いておきましょう。逆に何点だと思えます?」

「うーん、低く見積もって80点くらいかな」

「では発表します。ドウルルル……チーン! 0点に決まってるんだろ馬鹿野郎」

「ふふっ、そう来たか」

黒鷲座にはツツコミたいところが山ほどある。まずそのへったくそなラップをどうにかしろだとか、そもそも仲直りしようとするときにラップを使うとか、そのウザいキメ顔をやめろとか本当に色々あるけれど。一言でシンプルに言い表すとこうだ。どうかしてるよ、アッタ。

「おかしいな……この前はこれで許してもらったんだけど」

「それはよっぽど奥さんが優しいかやけにぶっ飛んだバカップルかのどっちかですよ」

「おい今うちの姫君の事馬鹿って言ったか」

「愛に目覚めたサイコパスか！　そこ引つかかるところじゃねえから！」

「まあ採点の理由を聞こう。俺からするとこれで誠意を伝えたつもりなんだが……」

「ど・こ・があ!?!　今のじゃ相手の神経逆撫でするだけなんですけど！　あー、もうしょうがないですね。僕がちゃんとした謝罪の仕方を教えてあげますよ」

「ほう、参考にさせてもらおうじゃないか」

はい、じゃあまずそこに正座しろと黒鷲座が指示を出す。大人しく従う八家に対して、黒鷲座は顎に手をつけて考えを巡らせる。

「まずは首を深々と垂れます」

「うん」

「Repeat after me!　『この度は申し訳ありませんでした』！」

『この度は申し訳ありませんでした』！」

「へへっ、年上の先輩を土下座させるのは良い気分だぜ。まああくまでもこれはシミュレーションだけだ」

「……おい、何やってんだこりゃ」

タイミング悪く現れたのは、ブルーバーズの投手コーチを務める仲次敏治である。彼から見れば後輩の黒鷲座が先輩の八家に土下座をさせている構図である。そりゃあ首の一つや二つも傾げるといふものだ。

「あつ、仲次コーチ！ いや、その、この状況は違うんです！ いや傍から見ればそう見えるかもしれないですけど！」

「うるせーよ」

「あぶっ」

わたわたと弁解しようとする黒鷲座の額を仲次が軽くチョップする。黒鷲座から短い悲鳴が漏れた。

「それよりもお前ら北を見なかったか？ あいつにそろそろ準備をしてもらわないといけないんだが……」

「ああ、北君ですか。それでしたらさつきまるで子供のようにお手洗いに向かっていったのを見ましたよ」

「だったらしゃーねーか。あ、お前ら。何やるかは自由だけど、あくまでも常識の範囲内でやれよ。問題行動が拡散されても遅いからな」

「(JCは最高だよ——)」

黒鷲座の頭に先ほどの八家の発言がフラッシュバックする。仲次コーチ、実はもうそれ遅いかもしれないっす。なんて口が裂けても言えるわけがない。そのまま去っていく仲次の後ろ姿を見送りながら、黒鷲座は一息ついた。

「はあ……ヒヤツとした。まあそんなわけです。奥さんを怒らせた場合はこのようにして謝罪してください」

「こんなものでいいのかい？ もっと花束を差し出すかのようにな方が……」

「まあそれもありかもしれませんが……いいですか八家さん！ 世の中誠意が大事なんです。そして誠意とはつまり、感情ではなく行動なんですよ！ 頭の中ではどれだけ『クソ野郎』と思っても、しっかり態度で示ささえすれば問題ないんです。これから奥さんを怒らせた時は、しっかり頭を下げて誠意を見せるようにしましょう！ はい、これでお悩み相談終わり！ 終わりでもいいですよねスタッフの皆さん！」

そんな事を話している内に、八家のスマホから通知音が鳴る。本来投げる可能性のある投手はブルペンにスマホの持ち込みを禁止されているが、八家は投げる予定が無いので例外である。そのスマホの画面には――。

『今日の放送について、帰ったらお話があります』

「……ははっ、早速使う機会が出来ましたね」

「えーっと、もう一度謝罪の仕方を一から教えてくれないかい？」

「仕方ないですねえ。ここで一旦コマーシャル入りまーす」

#5 part 5

「試合は現在7回の表、ブルーバーズが2点リードで迎えております！　これがどういう事かというところつまり、僕が登板するまでの時間が近づいてきているという事ですね。あー、嫌だねえ」

「黒鷲座、準備」

「あ、分かりました。えーでは次回のゲストを紹介して僕は消えるようにしましょう。次回のゲストは、中継ぎ投手でございます！　不死鳥の左腕、スペランカー兄貴こと滑川削選手です！　というわけで八家さん、後はお願いします」

「任せておぐがいいさ、君は何の心配もせずじつくり準備を重ねておけばいい」

「そういう自信満々なところが余計心配なんですけど。分かっているでしょうけど、とにもかくにも、くれぐれも変なことは言わないように！　いいですね！」

何度も釘を指すように繰り返す黒鷲座に対して、いかにも余裕そうに八家は笑みを浮かべる。いやほんと、そういうところが却って心配なんですけど、と黒鷲座はつぶやいた。しかしそろそろ行かなくては仲次コーチから何を言われるか分かったものじゃない。仕方なく、すぐごと黒鷲座は投球練習に上がっていった。

「さて……一人になったところでコメントでも読んでいくとしようか。『八家選手はいつも帽子を深めに被っています、ちゃんとサインとかは見えているのでしょうか』、ふむ、これは愚問だね。当然見えているに決まっているじゃないか。第三の目でね。……うん、これは本当に信じそうな人がいるから撤回しておこう。時折帽子の下から

様子を見てたりするんだ。これは本当の話だよ？　じゃあ次、『どうしていつも目元を見せようとしなのですか？』なるほど、いい質問が来たね。俺は昔っから目つきが悪いとずっと言われてきてね。この目がコンプレックスだったのさ。だからあまり目元を見せないように工夫していたんだ。けどどううちの姫君はそれを肯定してくれた。その時の嬉しさといったら、全くなんと表現すればいいのやら。行く当たらない砂漠の中にオアシスを見つけたような、そんな感覚さ」

八家がそんなことを話している間に、試合は動きを見せていた。この回登板したKKがヒット二本で無死一三類の窮地を迎えていたのだ。コメントでそれを指摘され、八家はその内容を拾うことにした。

「おや、ピンチを招いてしまっているようだね。見たところ今日のKKは変化球の精度が定まっていらないらしい。明らかなボール球が多いし、ストライクを取ろうとした直球を狙い撃ちされているような感じだね。まあだけどここからが腕の見せ所といったところだろう。この状況だと……そうだね、2点差あるから1点を犠牲にしてダブルプレーを狙うか、それとも1点も取らせない姿勢か。キャッチャーや投手の判断力が試されるね」

サードとファーストが若干前進して守備についている。セカンドとショートはベースの近く。良く言えばどんな打球に対しても柔軟な姿勢、悪く言えばどつちつかずなポジションである。三塁ランナーを一度目で牽制して、KKが第一球を投じた。縦に割れるカーブ。出来は悪いが、それでも今日投げた球の中では一番いい。バッターが見逃しストライクがコールされた。

「ふむ、最初はカーブか。いやあ、俺はナックルとスローボールとちよつとした変化球しか投げないからこういう風に配球について語るの新鮮だね。うん、悪くない。きつと今の打者は直球狙いだつたんじゃないかな。パスボールの危険もあるこの状況だと中々勇気の

いる決断だね。相手もきつと面食らったんじゃないかな」

続く2球目、バッテリーはストレートを選択した。打者がバットを振るも、ほぼ根本に近い。ふらふらと上がった打球は、ショートが少し下がったところでした。しっかりグラブに収めた。

「今のはバッテリーの勝ちだね。『森の中でイルカを探す』ようなものさ。さっきのカーブが頭にちらついたんだろうね。どちらに絞るかを打者が決めきれなかったがゆえに打ち損じた。そういう意味ではバッテリーの勝ちではなく打者の敗北と言った方が近いのかな？」

これで1アウト。併殺に打ち取れば無失点で窮地を脱する事も見えてきた。ここでキャッチャーの扇谷がマウンドまで上がってくる。恐らくは作戦の確認だろう。

「うん、1アウト取った事でKKにも落ち着きが出てきたんじゃないかな？ これがもつと僅差だと満塁策という手もありえなくはないのだろうけど、ランナーを二塁に進めるとそれはそれで傷口が開きそうだからね。俺だったらそうだね……風の赴くままに身を委ねる、つまりこの場での勝負かな」

八家の宣言通り(?)バッターを歩かせないまま、バッテリーは勝負を選択した。初球、153km/hのストレートでファウルを奪うと二球目はアウトコースへのストレートが外れて1ボール1ストライクとなる。

「ギアを上げてきたというよりは、ようやくKKの本調子が出てきたという感じかな？ まさに重量機関車、エンジンがかかってくるのは遅いけれどその分馬力も他に比べて違うものがあるね。まあ今日は調子が悪かっただけなんだろうけど。それにしても外野フライは避けたいところだね、当たり前だけれどこのまま無失点で切り抜ける方



「がいいから」

その思いはKKとしても同じだろう。三球目、微妙に動く球が内角高めに外れて2ボール。バッターが上体を反らしてボールをかわす。よるめきながらバッターボックスを外れた。そして四球目、高めに浮いたカーブを捉えると、打球はライトの正面へ。もちろんランナーはタッチアップの姿勢を示している。

「おっと、これは面白い事になったね。まさに野球の華というやつじゃないか」

打球をライトの武留たけるが前進しながら掴む。それと同時にランナーがスタートを切った。ここから先は瞬き厳禁、僅か数秒の出来事である。前進した体勢のまま右肩から繰り出されたボールはまさにレーザービーム。中継に入ろうとするセカンド美濃も思わず姿勢を下げてボールを避けた。バシン、という気持ちのいい音が響いたのと同じ時にランナーがヘッドスライディングで滑り込んできた。しかしキャッチャーの扇谷は流石ベテランというべきか、この状況においても冷静であった。バックホームの勢いそのままに身を任せて体を反転、そのままタッチにかかった。息もつかせぬスピード勝負。早かったのはランナーか、それともキャッチャーか。

「ア……アウト——！」

「良かった良かった。番組が終わる前にいいものが見られたね。これぞプロフェツショナルって感じのプレーだったよ、お互いに。さてと、それじゃあそろそろ番組を締めくくらせてもらおうか。いつか大空へ羽ばたく君たちへ、俺からエールを送らせてもらおう。Have

a nice trip!

## お披露目

「ごおん、ごおん、ごおん。死神の足音のように響くその音は、相手に恐怖を味合わせるのに十分なものである。」

『投手交代のお知らせをします。ピッチャー、北に代わって黒鷲座、黒鷲座一。背番号99』

観客の声援を背に受けて一歩、また一歩とマウンドへと黒鷲座が歩いていく。ゆっくり地面を踏みしめるその様は、相手にゲームオーバーだという事を示すような、そんな不気味なものだった。投球練習に入る前に、キャッチャーの扇谷がブルペンまで上がってくる。グラブ越しに、二人は話し始めた。

「今日のどっかで、あの球使うぞ」

「えー、まじっすか」

「当たり前だ。どこかで使っておかないと鈍るだろう。何より実戦で使うために編み出した球だろ。だったら試合で投げないでどうすんだ」

「まあそうっすけど……ちゃんと扇谷さん捕れます？　そこが一番不安なんですけど」

「嘗めんなよお前」

「痛って！　別に叩くことないじゃないですか！」

「まあそれだけ威勢があれば十分だな、じゃあやるぞ」

「分かっていますっつてえ……」

扇谷に叩かれた背中がヒリヒリと痛む。そんなに強く叩かなくてもちやんとやるときはやりまっつて、と心の中でぼやきながら黒鷲座はサインを見る。いきなりあの球かよ、まあぶっつけ本番で投げるよりは100倍マシか。指先の握りに細心の注意を払う。こうだっただけ、まあいいやとりあえず投げてみよ。力まず、いつも通り80〜90%くらいの力で。

「フンっ」

投げたボールは打者の少し手前でワンバウンドした。ありや、ちよつと意識しすぎたか。その後はストレートを2球、チェンジアツプを1球投げこんだ。そしていよいよバッターが打席に立つ。アウエーであるがゆえに少ないが、レッズの応援歌が耳へと入り込んできた。レッズのファンは、非常に熱心である。昔は飲んだくれのおっさんが多かったせいかな野次もよく聞こえたが、今は結構変わったらしい。なんでも女性ファンが増えたらしく、そういう野次は品がないからという理由で段々フェードアウトしたようである。

「フンフンフーン♪」

黒鷲座は周りの声援などないかのように呑気に応援歌を口ずさむ。どっちかというと、応援歌で言えばレッズの方が格好いいと思う。これは完全に個人の見解だけれども。こんなことを言おうものならファンから袋叩きにされること間違いなしだな。そんなことを思いながら、体を伸ばして着々と準備を進める。

「プレイー！」

高らかに告げる審判の声で、ようやくスイッチが入った。扇谷が出

したサインを確認する。ストレートだ。ボールを握る右手を体で隠し初球を投じる。右打者の外角高めにストレートが突き刺さった。

「ストライーク！」

球速は146km/h。現代のプロ野球界では珍しくとも何ともない球だが、黒鷲座にとっては上々の出来である。そもそも最速が148km/hという中でそれに近いの速さを安定して投げられるのは結構すごいことである。

(じゃあ、次はここだ)

(ういっす)

基本的に扇谷のサインに首を横に振ることは滅多にない。それほど球種がないというのも事実だが、それ以上に扇谷のリードを信じているからだ。コース、球種、投げ方などを決めるのは投手の独断ではない。キャッチャーのリードと共に積み重ねていくものだ。黒鷲座は理解している。その決定権はーフアンドーフといったところか。

2球目、今度は低めから浮き上がるようなストレートで空振りを奪い2ストライク。3球目もストレートだったがこれは打者がファウルで逃れカウント変わらず。4球目、タイミングを外すチェンジアツプを詰まらせてサードへの平凡なゴロ。これをしっかりとさばいて一つ目のアウトを取った。

1球投げるごとに歓声上がる。これがもしプレッシャーに弱い投手ならばおどおどしていてもおかしくないだろうが、黒鷲座は別ベクトルの人間である。むしろ燃えていた。といっても野球でいう炎上ではなく、心がである。

(やっぱ楽しいな)

マウンドとは打席に立つ打者からして少し高い場所にある。つまり本来は上から目線で投げるピッチングとなるわけだ。上から打者を見下すような支配的なピッチングは本人も、見ているファンにとっても爽快だ。この肌にはひりつくような感じがたまらない。顔には出さないけれど黒鷲座は胸を躍らせていた。次の打者が左のバッターボックスに入る。

(よし、じゃあ次はここな)

(あの球のサイン、中々来ないな……)

そんな事をぼんやり思いながら、黒鷲座は要求通りのボールを投げる。打者は分かりやすいぐらいにストリート狙い、それもバットを少し短めに持っている事から単打、最悪の場合内野安打で繋ぐこと目当てであることは、扇谷にとってはお見通しだ。

(なっ、思ったタイミングで来ねえ!?)

ストレートを意識させた上でのチェンジアップは非常に効果的である。速い球にタイミングを合わせる事にピントを合わせるために体が前のめりになるのだ。ただでさえ当てに行くことを重視しているのにそんな体勢ではまともに飛ぶはずもない。だが、バッターは祈るようにバットを頭に当てて目を閉じた。大丈夫だ、次こそストレートの来る。

(……なんて思ってたんだろうな。そもそも勝負の世界で祈る事自体がナンセンスだったの)

捕手のポジションからは打者の様子が良く見える。高揚も、困惑も、躊躇も、諦めも、慣れてくれば簡単に見えてくるものだ。だからバッテリーは今度もチェンジアップを選択した。予想通りバットの所で叩いたそのボールは、黒鷲座のグラブへ収まる。そのままファーストへと下から投げて2アウト。拍手とあと一人コールが球場に響き始める。

(つつつても、問題はここからなんだよなあ……)

『8番、キャッチャー小西。背番号29』

何を隠そう、黒鷲座はこのバッターが一番苦手なのだ(第二回放送参照)。打率は高くないが、とにかく相性が悪い。あのこんにやくのようなスイングを思い出しただけでうなされるレベルだ。とにもかくにも、この打者を攻略しなくては自分の先は無い。キャッチャーの扇谷も一度落ち着くようにジェスチャーをしている。

膝を軽く曲げ、少し姿勢を下げて小西が打席に入る。初球、148km/hのストレートがファウルチップとなり1ストライク。続く2球目は大きく高めに外れて1ボールとなった。

(かーっ、やっぱやりづれ——！)

扇屋からボールを受け取りながら黒鷲座は今にも叫びたい気分であった。3球目はチェンジアップがワンバウンドして2ボール。そして4球目、直球を捉えた打球は惜しくも三塁線を切れるファールとなった。

(ひー、おっかねーわ。やっぱこの人どっかで入れ替わってるでしょ!?)

ファールとはいえ、痛烈な当たりであることに変わりはない。冷や汗をぬぐう様に帽子を脱いだ。扇谷からのサインを待つ。……来た、あのサインだ。

(待ってました！ いやマジで！)

少し長い間をとる。実戦で使うのは初めてだから、ちよつとだけ緊張するな。ゆっくりと構えて右腕を振りかぶる。感覚を指先に集中させて、一投を投げ込んだ。

(ストレート……!!)

当然打者の小西もバットを振りに行く。しかしボールはそこそこの速さを保ったまま、文字通り沈んだ。

(——は?)

「ストライーク！ バッターアウト!!」

打者も、相手ベンチも、守る野手も、そして応援するファンも狐につままれたように口を開ける。それに知らぬ顔してバッテリーは口角を上げた。

## #6 part 1

「こんばんは皆さん！ 司会の黒鷲座です。いやー昨日は好プレーも見られる熱戦でしたね！ 特に武留のバックホームはすごかったですね。今年のスーパープレー集に載るんじゃないでしょうか。まあそれよりも僕と小西選手の勝負の方がすごかったですけどね！ あっちの方が名勝負です、僕にとっては。いや対戦打率5割の人相手に三振を取れたのは良い自信になると思いますね、自画自賛ですけど。え？ 5割なんだから次は打たれるでしょって？ ははっ、そういう事言う奴は決まってモテないんですよ。まあ144試合の中の一勝負で一喜一憂している方がおかしいのかもしれないですけど、それでも褒められる時に自分を褒めておいた方がいいに決まっています。それが自信になるし、いい結果にも繋がると思えますから。社会に、学校に、家事に疲れた皆さん。時々でいいんで自分のことを褒めてあげてくださいね。さあ、辛気臭い事を言ったところで第六回のゲストの紹介に移りましょう。不死鳥の左腕、スペランカー兄貴こと滑川削なめかわさく選手です！ はい皆さん拍手お願いします！」

やってきたのは茶色い短髪をした、もみあげが特徴的なすらつとした細身の男だ。少ししわの入ったその表情には哀愁が感じられる。しかしいつも以上にしわが深いのは機嫌の悪い証拠なのだろう。

「おい、待ちやがれ。前半はまだ良いとしよう、だが後半の部分には納得いかねえ。俺のどこがスペランカーだってんだ」

「これ毎回誰が考えてると思います？ スタッフの方ですよ。つまりは一般的な評価がそうだって事です。というか僕からしても妥当ですよ。サク先輩そもそもシーズン通して完走した事ありましたっけ？」

「あるに決まってるんだろ。……ルーキーイヤーだけ」



「え、何て？ 声が小さくてよく聞こえないんですけど？」

「分かってて言うてんだろお前！ ほんつとに昔っから性格悪いな！」

「何言ってるんですかねえ、これも視聴者ひいてはファンのために決まってるじゃないですか。それに、最初の二つ名とか恰好よくありません？ いいじゃないですか不死鳥（笑）」

「その微妙な笑みをやめやがれ！ というか確実に馬鹿にしてんだろうが！」

「いやあだってもう、サク先輩野球人生の中で何回骨折しました？」

滑川が髪を掻きながら考える。滑川削、36歳、大卒からドラフト1位で入団した男。その能力の高さからシーズンのキーマンとしてよく挙げられるこの人物は、なにぶん怪我が非常に多い。それも結構しょうもない原因で。そういう

「やべえ、覚えてないかも……」

「どんだけですか。記憶力の問題なのか、それとも悪い意味でサク先輩がやばすぎるのか。多分後者なんでしょうね。ちゃんと牛乳飲んでます？？」

「子供じゃねーんだから。……いや、その手があったか」

「他にどの手が残ってたっていうんですかね。まあでも、何度怪我をしても必ず復帰してくるサク先輩の事、僕はちゃんと尊敬してますよ」

何の気なしに黒鷲座は褒め言葉を投げかけてみる。この言葉は、割と本当だ。嘘じゃない。選手として、先輩として尊敬しているのは確かに事実だ。

「本当かあ……？」

「そんな！ この綺麗な眼差しを信じられないって言うんですか!？」

「何も変わってないどころかちよつと淀んでるからな。っていうかお前毎回そう言うよな。大体そう言い出す時はふざけてる可能性が7割だから」

「3割、バッターとしちゃ上等じゃないですか。えーさて、オープンングトークもここまでにしておいて、そろそろハガキを呼んで行きましょう。ペンネーム『青鳥軍団』さんから。……あつこいつ初回からいきなり暴言飛ばしてきた奴じゃん！ スルーしたろ！」

「んな事してるから嫌われんだよお前」

「うるさいですね……読みますよちゃんと。『去年のブルーバースの首位となった原因はやはり何でしょうか、選手視点から教えてください』……思ったより普通の質問が来ましたね、僕ちよつと身構えてたのに。どう思いますかサク先輩」

「また無理矢理回してきたな。んー、まあそりや色々ところが噛み合ってこそっていうのが建前。本音はやっぱりホーム球場に合った戦いが出来たからじゃないか、っていう所だな」

中々興味をそそられる内容である。サク先輩はこういうところが上手だ。相手が続きを聞きたくなるような話し方をする。こういう

所を聞くと解説者とか指導者向きに思えてくるんだよな。

「続き、聞いても良いですか」

「おう。プロ野球つてのは試合の半分、要するに72試合はホームグラウンドで戦うだろ？ 流石に全部取りこぼさずにつてのは無理だろうけど、ホームではなるべく勝っておきたい。だからその球場にあった戦い方が必要になってくるわけだ」

「はい」

「ウチの球場は広いだろ？ だから投手有利なんだ。投手力に力を注いだこのチームはこの球場では強い意味がある。それに加えてブルバースの守備は固い。2年連続ゴールデングラブ賞の美濃や、強肩好守がウリの武留、センターには俊足の李がいる。球場の強みを最大限活かせたからこそ得点が多く取れなくとも勝つことができる。まあその分俺らリリーフ陣にも負担がかかってくるけどな。で、お前は どう思ってたんだよ」

「僕ですか。それはもはや愚問ですね。ずばり、このチームの強さの秘訣は……」

「秘訣は？」

「僕の存在ですね」

「溜めてた時間返せや。はった押すぞお前」

わざわざ時間をとって出た結論がそれかよ、とため息を吐く滑川。それに対して黒鷲座はチツチツチ、と舌を鳴らしながらとジェスチャーで示した。

「まあ話は最後まで聞いておくものですよ。このチームの一番の武器が投手力だっというのはサク先輩の言う通りだと思いますよ。でもウチが一番強いのは先発じゃないですよね」

「……ああ、そういう事か」

「そう、サク先輩はもう分かったみたいですけどブルーパーズは救援投手の防御率が12球団イチなんですよ。その要因として勝ちパターンが機能していたのが強いと思うんですよ。僕は序盤に8回を任されてましたけど、シーズン途中でクローザーに配置転換されまして。それで安定したのが昨シーズンの良い結果に結びついたんだと思っっています。先発が5回くらいまで投げてくれれば、後はリリースに任せればいいわけですからね。仲次コーチの手腕もあってそこまで負担が少なく済みましたし、そうでなくても僕はほら、鉄腕ですし」

「そんな事言ったら足元掬われんぞ。でもま、お前の言う事にも一理あるよ。確かにお前みたいな万能リリースがいてくれたおかげで、チームの歯車が上手く回り始めたからな」

「人を潤滑油みたいに呼ぶのやめてくれませんかね。あの言い回し僕嫌いなんですよ。何だよ『私は潤滑油のような存在です』って。人は人です。油なんかと間違えないでもらえますか？　ってのが僕の感想です。はい、一段落ついたところでCM入りまーす」

#6 part 2

「むぐぐぐ……バナナうま〜！ いや〜いい時代になったものですよ、こうして栄養補給が楽にできるようになりましたからね！」

CM明け。カメラが映したのは満足そうにバナナを口いっぱいに頬張ると、何故か顔を悪くしている滑川の姿だった。

「あ〜、黒鷲座選手。もうカメラ回ってます」

「うっそマジで!? いやでも後バナナもう少しだし、完食しないと農家の方に失礼でしょ！ って何でサク先輩そんなに顔色悪いんですか。もしかしてバナナが欲しかったとか？」

「いや、そんなんじゃなくて……昔、道端に捨てられてたバナナで転んで骨折した事があってな」

「思ってたよりもっと古典的であホみたいな理由だった！ あー、ありましたねそんな漫画みたいな事件。モグモグ……ゴクン。あー、美味しかった。フィリピンのバナナ農家に感謝ですね。それではコメントの方少し読み上げていきましようかね。僕少し気になっていたコメントがあつて……『滑川選手は若い頃先発をやっていました、今でも先発に対する未練があるのでしょうか』っていうものなんですけど。そこるところどうなんでしょうか」

そこところは黒鷲座も気になっていた。滑川は怪我こそ多いものの、結構優秀な投手である。元々は先発として投げていたし、そつちで投げたいという気持ちがあつても何らおかしくない。むしろ選手間では滑川の怪我の多さに呆れた首脳陣が無理矢理配置転換したのではないかという噂まで広がっていた。

「あー、その件な。この際誤解の無いようにはつきり言っておくけど、別に監督と喧嘩とかしたわけじゃないからな。自分からはつきりリーフが良いって言ったんだ」

「えっ、そりゃあ何ですか。自分がこういうのはどうかとも思いますが、すけどりリーフって年俸安いし連投もあるし給料の割に合わないし大変でしょ」

「まあ色々理由はあるけど、まず一番はチームのためだな。その時はまだりリーフも手薄だったし、そこなら自分の強みを活かせると思ったんだ。それにぶっちゃけ、体力がもう落ちてきてんだよ。一週間近く間が空くとはいつても流石に1日100球はキャンプでもない限りきついつて」

「……早熟？」

「うるせーよ普通だわ！ お前も30過ぎたら分かるようになるだろうよ！ ……それに、視点を変えて見る事で景色も変わってみられるしな。生意気だけど、いい後輩も出来た。優勝だって経験できた。割とやりがいを感じるし、いい仕事につけて俺は幸せ者だよ」

どこか満足そうに笑みを浮かべる彼の姿に、少しだけ黒鷲座は不穏な何かを感じ取った。確かに、いつか来るとは分かっていたけれど。いくら何でも早すぎる。

「えっ何ですか、サク先輩死ぬんですか!？」

「失礼にもほどがあるだろお前」

「まあでもサク先輩昔っから人に教えるのが好きですよね」

考えてみれば、サク先輩は昔っから仲間思いと言うか世話焼きというか、後輩と一緒にいる場面が多い。かくいう黒鷲座自身もよく指導してもらったタチだ。

「分からない視聴者諸君のために説明しましょう。サク先輩はかなり指導熱心な方ですね、僕もルーキーイヤーからお世話になってる存在なんです。昔は速球派の投手として投げていて、今はどっちかというと培った技術で投けているピッチャーなので色々分かるんですよ。だから大抵のピッチャーの事は理解できていますみたいで。感覚派とか理論派とかで対立する事もありますけど、いつだってサク先輩は中間にいてくれて指導してくれるんですよ。そういう指導を受けた選手たちはよく『滑川チルドレン』なんて呼ばれるんですけど、今のチームの基礎は彼らによって成り立っているわけです。選手、特に熱田や北あたりの速球派は確実に頭が上がらないレベルだし、監督たちも感謝しきれないんでしょうか」

「お前が俺の事をべた褒めするなんてな。……あれ、ひよつとしてマジで俺死ぬの？」

「死ぬまではいかなくとも、もしかしたら骨を折るかもしれないですね。文字通り。登板する時は気を付けておいて下さい」

「っていうかお前はどうかなんだよ。ずっとリリースやってばかりだったろ。先発やりたいとかそういうの無いわけ？ やりたいなら俺が教えてやるけど？」

「いや、結構です。もうそういうのは高校でございました。もしかしたら首脳陣は先発として活躍させるプランがあったのかもしれないですけど、僕は最初からリリース志望でした。連投する分にはまだいいんですけど、球数多いと辛いですよね。そういう面言えばリリースの方が楽かなと。まあ年俸は安いんですけど」

「安いっつたつたつてお前9500万だろ」

「わーわー聞こえない！　　というかサク先輩そういうのは言わないお約束でしょ！　　夢を与える立場のプロ野球選手がカネの話してどうするんですか！」

両手を大きく振って黒鷲座は滑川の発言を止めようとするも、もう遅い。ブレーキをかけるどころか、滑川はアクセルを大きく踏み込んだ。踏むペダルを思い切り間違っている。

「大事だろ収入も。最近の子供は皆現実、というか足元見てるからな。野球人口が減っている事も考えたらこうして俺たちが夢を与えるしかないでしょ。ちなみに俺は6500万な」

「聞いてねーし……何かそういう生々しい話をしていいのやら。僕が子供の時はもつとこう、ピュアでしたよ。『プロやきゆうせんしゆになりたい』なんて文集に書いていたあの頃が懐かしいです。というかお子さんそんなに冷めた感じなんですか？」

「まあ時々怪我をして家で安静にしている時があるんだけどさ。たまたまに長男がこつちを見て変な事言い出すんだよ。『おとうさんつくそにーとなの？』とか。あの時はマジで一瞬空気凍ったな。リビングがお通夜みたいになったもん。何とか妻がフオローしてくれたから良かったけどさ」

「んふっ……すいません、あんま笑っちゃいけないのは分かってるんですけどお子さん辛辣ですね」

「最近の子供に対しては刺激のあるものが多いからな。スマートフォンはまだ与えてないけど、どこからそういうワードを見つけてきたん



だか全く」

「まあでもお子さんがすくすく育っている証拠じゃないんでしょうか」

「そのためにはもつと稼がないといけないんだけどな……長女も次男もまだ幼いしうちの家計結構カツカツなんだよ」

「あはは、耳が痛いですね。キレそう。何か皆さんこの放送を家族自慢の場だと勘違いしてませんか？ 僕をはじめとした独身勢を前にしてただで帰れると思わない事ですね！ それではそろそろコマーシャル行ってみよう！」

#6 part 3

「さあそろそろお便りを消化していかないともまずいんで頑張ってくださいませ。それじゃあサク先輩、お願いしまーす！」

いつも通りのお便りボックスを取り出す。黒鷲座が滑川にハガキを取り出すように指示をした。

「分かった。えーっと、これを読めばいいのか？」

「はい、そうです。お願いします」

『ペンネーム』とある高校の主計科選手』さんから。『黒鷲座選手、滑川選手くんばんは。滑川選手にお聞きしたい事があります。失礼な事を聞くようで申し訳ないのですが、肩を怪我したときはどのような感覚だったのでしょうか』……ということですよ

「あー……まあそういうのはウチのチームじゃサク先輩が一番詳しいですよね」

「まあな、人よりそういう経験があるからそういうのには詳しい自信があるぜ！」

「さっすがサク先輩！ 頼りになりますね！」

「だろ!? もっと頼ってくれてもいいんだぜ！」

※怪我の多さの話です。皆さんはそもそも怪我を多くしないように気を付けましょう。

「冗談はここらへんにしておいて……僕はそんなに怪我した事ないの

で分からないんですよ。実際どんな感覚なんですか？」

「いや、人の体ってさ。思っている以上に脆いんだよ。感覚だからこう、上手く言うのは難しいんだけど全身がガラス……的なの？」

「それって『ガラスのエース』のサク先輩だけにしか分からないたところじゃないですか？」

「まあほら、自分の体でしか生きて事無いから分からねえけどこれはガチだから。怪我をする瞬間ってのは体にヒビが入る感じなんだよ。それから鋭い痛みと冷たい汗が流れて、だんだん『ああ、怪我したんだな』って分かってくる。慣れてくれば『あ、これ無理だわ』ってなってくるけど」

「分かるようで分からない。じゃあ怪我しないためのコツっていうのはあるんですか？」

「よりにもよって俺に聞くか？」

その場の空気が何か申し訳ないもの変わっていく。流石、積み重ねた怪我の数が違うといったところか。褒めるべきところでは確実にないんだろうけれど。

「逆に怪我が多いがゆえにあの時こうすれば良かったとかあるじゃないですか。これからの未来ある若者のために、そこを何とかお願いしますよ」

「ああ？ つつてもほとんど参考にならねーぞ？ まあそうだな、『無理をしない』っていうのが今の子供たちにとって一番分かりやすいんだろうけど何か抽象的だよな。一番具体的なのは『自分の限界を知っておく』つっ—事だな。お前も酒を飲みすぎて吐いたことくらいある

だろ?」

「いやまあありますけど……その例え大学生とかおっさんじゃないと分からないじゃないですか」

「分かりにくい事は認めるけどよ、これに尽きるんだよ。一度怪我をすることで自分の体の限界がどこにあるのかを理解しておくのは本当に大事なんだよ。ああ、今ここに負担がかかりすぎていたんだなとかを理解するのも役立つし」

「その割にサク先輩は怪我多いですけど」

「そりゃあお前、俺は色んな所にメス入れてるからな。肩や肘、しまいには指先まで手術したことがあるんだから」

「指先って言うと、あの事件ですか。『利き手はやめろヨーグルト事件』」

一見するとアホみたいな名前だが、事件は事件である。説明しよう、利き手はやめろヨーグルト事件とは! 6年前、先発として登板した滑川がノックアウトされてベンチに戻った際に起こった事件である。その日の滑川はかなり出来が悪く、本人も気が立っていた。その怒りはベンチに戻っても収まらず、グラブをベンチに叩きつけようとしたその時。思わず手先が滑ってベンチを拳で殴りつけてしまったのだ。その結果、指を骨折。その一部始終をテレビカメラにすっぱ抜かれた拳句、監督からも「利き手はやめろヨーグルト! (?)」と言われる散々な始末を残した伝説(笑)の事件である。

「おい人の黒歴史掘り起こすなそれ犯罪だからな!」

「あれ以来道具を大事にするようになったらしいですね、何かちよっ

とでも悪い事するとすぐに厄災が降りかかってくるところが本当にサク先輩らしいというか。前世で何やったんです?」

「俺が知るかよ……」

「まあそこら辺が話題になるのも愛されている証拠という事で受け取りましょう。では次のハガキですねー。ペンネーム『ブルガリア』さんより。『黒鷲座選手、滑川選手くんは。今私は高校野球で心が折れかけています。お二人は野球を辞めたいと思ったことはあるのでしょうか』、という事ですね。えーっと、無くはないですね、小学生中学生の頃の話ですけど。練習も理不尽だし、走り込みや球拾いばかりだったし、何でこんな事やってんだろうと思っていました。今プロ野球選手になれたのはそういう事を乗り越えた……ってほどじゃないですけど、その時にくそと思ったからです。サク先輩はそのところどうなんですか?」

「そりゃああるに決まってるだろ。どんだけ好きでもやめたくなることくらい誰にでもある事だ、恥じる事じゃない。俺の場合は『やめた』、というよりは『潮時か』と思っただけだな」

滑川には、一度育成選手に落ちた過去がある。決して実力不足というわけではなく、怪我の療養のためという理由だったが本人にとってはかなりの屈辱だったらしい。今でこそこう語ってはいるものの、当時は今にも舌を噛み切らんぐらいの勢いだっただのを黒鷲座は覚えている。

「あの時引退しなくて良かったですよ本当に。今にも死にそうな顔してましたもん。何が現役続行の決め手になったんですか?」

「いろいろ理由はあるけれど、やっぱり家族の為かな」

「あ、金銭的な面であつてことですか？」

「生々しいな！」

「何をいませうら」

「……まあそれもあるが、シーズンオフに長男の世話をしている時に思つたんだよ。『この子は俺がプロ野球選手だつてことを知らないんだらうな』つて。そう考えたら何か悔しくなつちやつてさ。せめてこの子が物心つくまでは、カッコいいお父さんでいたい。誰かのためなんて理由は不純だと思われるかもしれないけど、だから俺は頑張る事が出来た。リハビリも、苦しかつたけれど意味があつた。一軍でリリースとして再出発して登板した時はファンの方にも拍手を送られて涙が出そうだったよ。だからいつか戦力外になるまではあがいてみようと思つたんだ」

ま、眩しい……！ 立派な志がない黒鷲座にとってそれはあまりにも眩しすぎるものだった。

「もう立派な事で。あー、涙が出そうだなー！ あー！」

「もうちよつと目を潤ませてから言え。まあ少しでもカッコいいところを見せられるように運動会でもガチるけどな」

「せっかく感動したのに！ やめてくださいよプロ野球選手が大人げない！ もう全く……はい、それでは一旦CM入りまーす、チャンネルはそのままー！」

#6 part 4

「はい、CMも明けたところで恒例のこのコーナー！ 『黒鷲座一先生の〜？ お悩み相談室』ー!! えーこのコーナーはですね、選手達のお悩みを僕、黒鷲座一が解決してあげようという企画であります！ まあ始まったのは前回からなんですけどね。それではサク先輩、拍手をお願いしますー！」

「ええ……何で俺が……」

口ではそう言いつつも、拍手を送ってくれるあたり滑川の度量の高さがうかがえる。流石プロ野球選手の中でも群を抜くほどの人格者と言われるほどはある。

「で、早速なんですけどサク先輩のお悩みを聞かせてもらいましょうかー！」

「脅迫に使ったりしないよな？」

「僕の事なんだと思ってるんですか。安心してください、使いませんよそんな事には」

「……なんだよ」

「え、なんて？」

「たまに見てて分かるかもしれないけど、結構ビビりなんだよ俺。何か怪我の原因が増えるごとに苦手というか敏感になるというか。あー、もー、言うんじゃないー!!」

両手で顔を隠しながら絶叫する滑川を、黒鷲座が肩を叩きながらな

だめる。滑川とそこそこ一緒にいる時間が多い黒鷲座にとっては共感できるものだった。

「確かにサク先輩は音に敏感というか、でかい音したらすぐにとっかに隠れますよね。それにさっきバナナ見てただけでビビってたし……ちゃんと日常生活送れてるんですか？」

「失礼な！ それくらいはちゃんと出来るわ！」

「じゃあ、ほら……」

「ん？」

すつ、と黒鷲座が両手を差し出す。滑川はその意味も分からず、差し出された両手に目を向ける。その瞬間、黒鷲座がパン、と両手を叩いた。それはあくまでも、本当に軽く滑川を驚かせるためのドッキリ——。脳が理解するよりも先に動いたのは体の方だった。とつさに横に跳んでしゃがみこむ。そんな滑川の様子を、どこか冷めた顔で黒鷲座は見つめていた。

「何してんすか」

「いや、ほら、その……蟻が、歩いてるなーって」

「あ、そこゴキブリいますよ」

「ッ!？」

今度は飛び跳ねてイスにガタンと勢いよく音を立てて座り込んだ。そんなビビリ方をしているから怪我が多いんじゃないか、と黒鷲座が思ったのは内緒である。



「なるほど、これは重症みたいですね」

「お前ッ、マジで先輩からかうのもほどほどにしとけよッ……!」

今にも息切れしそうな滑川を半笑いで見ながら、黒鷲座は思った。この人年の割にまだまだ元気だし愉快だなと。いや驚かせた元凶は自分だけでも、いざという時にそれくらい動くことができればまだまだプロ野球選手としてもやっていけるでしょう。

「とはいえ、ビビりを直すって中々難しいんですね。僕の昔の友達にピストルの音が苦手な子がいて。その子小学校卒業するまで運動会の徒競走ではずつと耳を塞ぎっぱなしでしたもん。そういうのって性分というか、生まれもつての宿命っていうんですかね」

「はあ……そうだよなあ。そう簡単に解決するわけないよなあ……」

「まあ待つてください。物は捉えようですよ。逆にそれは警戒心が強いという事じゃないでしょうか。何事にもしつかりと真剣に受け止められるというのは、誇るべきポイントとも言えますよ。それに下手にビビらずボールに手を出して怪我をするよりは、その時怪我せず普通にヒットを許す方がいいんじゃないですかね?」

「そうか? いや、でもなあ……」

合点がいかなさそうな滑川に対して、たたみかけるように黒鷲座は仕掛ける。こういう出まかせ……じゃない、理屈で言えば黒鷲座は高いレベルにある。

「それでもダメなら、もういつそのこと慣れましょう。経験を積んだ

らきつと笑い飛ばせるぐらいになりますよ。例えばバナナがダメなら見て慣れてしまえばいいんです、よしそうとなったら急いでバナナを持ってきましょう」

「分かった、分かった！ ……頑張つて慣れるから、今はいい」

「そうですか。ならよかったです。ん？ 何？ 手紙のサプライズ？ 誰から？」

何やらスタッフが話し込んだ後、何かの紙が黒鷲座へと差し出された。何故か質問には答えないが、かなり大事に扱われているらしい。少しボロボロになっているそれを開いてみると、それは誰かに対する手紙だった。

「……え、これを読めって？ ……このスタッフから差し出される時点で何か嫌な予感しかしないんですけど」

「いいじゃねーか、手紙の一つや二つくらい。読んでやれよ」

「仕方ないですね。読んであげないと話が進みそうにもないですし。えーつとなになに？ 『おとうさんへ』……？」

瞬間、黒鷲座の脳内に電撃が走る。あ、これはひよつとしてそういう事なのか!?! このスタッフがそんなお涙頂戴的な演出をしてみようのか!?!

『ぼくのおとうさんはいつもかえってくるのがおそいです。かえつてこない日もあります。おかあさんにきくと、いつもかぞくのためにかんばってるのよ、といわれます』

「い、これは……まさか……!?!」

『おとうさんとずっといつしよにあそびたいとおもうけど、いそがしいからたいへんなんだとおもいます。おとうさんがどんなしごとをしているのかはよくわからないけど、いつかわかる日があるのかな』  
「ほうあッ!!」

黒鷲座が横を見れば、滝のように涙を流している滑川がそこにはいた。……大丈夫かこれ？

『それでもいえではげんきにはなしてくれとおとうさんのことがだいすきです。いつもくーるでかつこいいおとうさんがいてくれるから、おうちはいつもあかるいです』……んん?」

「……続けてくれ」

「あの、言っておきますけどこの先を聞いて後悔しないようにしてくださいね?」

「何を後悔するっていうんだ、こんな感動的なエピソードがあるか!

俺は……俺はもう涙で前が見えん!!」

「えーつとじやあ続けましょうか。『こんどおとうさんがかえってきたときはキャッチボールがしたいな』」

「そんなもん、何度だつてしてやるよ……!」

『きょうもおしごとがんばってください。かつこいいおとうさんはぼくのあこがれです。いつまでもくーるなぼくらのヒーローでいてください。……1年3組、くろづぎ』……」

分かってたよ。どうせそんな事だろうと思ってたよ。何か途中からやけに「くーるくーる」うるさいから嫌な予感はしてたんだよ。くーるくーるって何なんだよ当時の僕。回りすぎなんだよメリーゴーランドか。いや、むしろ……コーヒーカップ？ そんなアホな事を思っている黒鷲座の肩が大きく揺さぶられる。

「黒鷲座ア！ お前、おまつ、お前エエエ!!」

「ちよつ違つ、これ持ってきたのスタッフ！ スタッフだから！ っ  
ていうか言つたじゃないですか後悔しないでくださいって！」

「知るかあああ!!」

おいスタッフ止めるマジで！ というか何でこんな物持ってたんだよ悪魔かお前は！ いや渡したの家族だな性格悪っ！ 錯乱したサク先輩の肩を引っ張って止めてくれたのは、仲次コーチだった。

「おい、何してんだ。まあいいや、サク。準備」

「……はあっ!? あ、えーつと、うん、準備ですね。すまん黒鷲座、この埋め合わせは必ずどつかでするから！」

コーチが来てくれなかったらはたしてどうなってたのやら。危なかった。

「えー、はい。收拾のつかないこの状況ですが、一旦CMを挟んでお茶を濁すことにします。あの、サク先輩は家族思いの良い方なので！  
決してそこは勘違いしないでください。それではっ！」

## #6 part 5

「そろそろほとぼりが冷めたころでしょうか、では番組の方に戻ってまいりましょう！ 今はえーっと、7回の表、こちらが1点ビハインドですね。さてここで登板する投手は……そうですね、サク先輩ですね」

ここで登板するのが滑川だ。基本的に第二回ゲストの芝崎や滑川は接戦、もしくは若干ビハインドの場面で登板する事が多い。本来なら若手が埋めるポジションではあるのだが、二人とも実力面では申し分ない。そもそもこのように競った展開はよくあるものだ。打線が逆転するためにいかにして繋ぐか、それもリリーフに託された大事な使命である。

「ちよつとコメントを読みましようか。『黒鷲座選手から見た滑川選手の強みはなんでしょうか』という事ですね。うーん、そうですね……特にココがすごい！ みたいなどころがあるわけではないんですけど。ただそれでも逆に言えば何でもできることが強みじゃないでしょうか」

投球練習を終えた滑川がバッターの方へと向き直る。その初球、大きく振りかぶった左腕から右打者の内角にストリートが投げ込まれた。一般的にクロスファイアーと呼ばれるこのコースは、打者をひるませるのに十分なものだ。続いて2球目、今度は沈むスクリューを打者が見逃して1ボール1ストライク。並行カウントになった。

「基本、サク先輩は速球で押してアウトを取っていくタイプなんですよ。ただ状況に応じてピッチングスタイルを変化させることのできる器用なピッチャーでして。そこらへんはまあ相手にとっては厄介ですよ。と、そんなことを話しているうちに1アウト目を取りましたね」

結局、一人目の打者は6球目のストリートを打ち上げてレフトフライ。ただしかし、ここからが試練であった。続く打者にフルカウントまで粘られ四球を出すと、次の打者はセンター前にはじかれる痛烈なヒット。一気にピンチを招く結果となった。

「うーん、これはまずいですね。調子が良くないというか何というか。良い時のサク先輩はなんにでも化けられる厄介なピッチャーになれるんですけど。今日の彼は何か……どっちつかずと言えづらいんでしょうか。少し中途半端になっている気がします。本人もある程度気づいてはいるみたいですし、試合の状況を鑑みても何としてもここで食い止めておきたいですね」

マウンドでは内野陣が集まって話し合っている。1アウト、一二塁。ゲッツーで切り抜けるのが理想だろうから、守備のシフトも変更されるだろう。さて、どう切り抜けるか。そんなことを想像している黒鷲座の下に、またもスタッフから紙が手渡された。

「……え、これ読みますか？ さっきのアレを見るに全く信用できないんですけど」

「そこを何とかお願いします。騙されたと思って、読んでみてください」

「それで本当に騙されたんですよさっき」

「お願いします」

「ごり押しじゃん。あー、もう読みますよ読めばいいんでしょ読めば!! えー『お父さんへ』……またこのパターンからか。『ぼくのお父さんはプロやきゆうせんしゅです。』……ん？ これは、あれですか？

ひよつとしてそういう事なんですか？」

何かに勘づいた黒鷲座に対して、スタッフがサムズアップを返してくる。うん、違うよ？　そこでサムズアップは求めてないんだけど？

「はい、スタッフは放っておくことにして。こういうのにも慣れていかないといけないんですよ皆さん。気にせず続き読みましょう。『かえってこないことが多いし、ふまんはたくさんあります。』ああ、うん。子供としてはそうですね。僕も父があんまり帰ってこない事に対してイライラする事は何度かありましたもん。『だけどテレビの中のお父さんを見ると、全部ふつとびます。やっぱりお父さんはかっこいいです』」

マウンド上では、汗を流しながらも真剣にサインを見つめる滑川の姿の姿がある。子供を持つ人にとっては涙無しには聞けないシーンだろう。

「サク先輩、頑張ってくださいよ……こんな手紙貰っておいて、ダメでしたなんて父親として無いでしょ」

思わず黒鷲座の喉から言葉が出てくる。本人は知らないかもしれないが、その肩には子供や妻からの応援がかかっている。カウントはまたしてもフルカウント。7球目、セットポジションから投球フォームに入る。

気合の入った声と共に投じられたその一球は、かつて滑川の代名詞とも呼ばれたストレートだった。

「ストライーク！　バッターアウト！」

球速にして150km/h。コース、角度、共に完璧。打者が分かっていても手を出せないボールだった。まさに原点回帰といった

ピッチング。サク先輩が小さくガッツポーズをしているのが見える。何だろう、見ているこつちが泣きそうになる。

『これからも自まんのお父さんでいてください。1年2組 なめ川 たく』……はあ、今の子供はしつかりしてますね。うん、中々に泣ける話じゃないですか。というか何でこれを最初から出さなかったんです？ 回りくどい事してないで、サク先輩に聞かせてあげればよかったのに」

「それは……この子からの要望です」

「要望、ですか？」

「この手紙を放送する条件としてお子さんをお願いされたんです。直接言うのは恥ずかしいから、お父さんがいない時にこれを読んでほしいと」

「放送されることに関しては気にしないんだ……」

「私が言える話ではないですけど、やっぱりどこかで伝えたかったんじゃないですかね。子供って変なところ気にするじゃないですか、最近の子なんて特に。だけど気持ちは伝えたい、その矛盾するような心境が発露した結果がこれじゃないかと思います」

「なるほどねえ。たく君、お父さんは立派なピッチャーだよ。うん、球界屈指のクローザー様が言うんだから間違いない。だから誇りを持って、思い切り学校で自慢しちゃってください。おや、球場が騒がしいですね。……良かった、どうやら抑えたみたいですね」

画面の先では丁度滑川が打者をショートゴロへと抑えたところだった。一点差を守り切ったまま、そのタスキをつないだ。この流れ



ではひよつとすると黒鵜座の登板もあるかもしれない。少しだけ、黒鵜座の頬が緩んだ。

「じゃあ僕の書いた文集も無駄にはならなかった……とでも言うと思っただかあ！ あの部分は確実に無駄だったわ！ たく君の事を考えても明らかに余計だったろ僕のところは！」

「え、許す流れじゃなかったんですか？」

「誰が許すかあー！ ファアツツキュー!! このまま感動的なムードで終わらせようだったってそうはいかないですからね！」

「黒鵜座さん、次回予告次回予告」

「何で君たちそんな冷静なの!? 今こっち怒ってるんですけど！ まあ説教はこの番組が終わった後にいくらでもしましょう。えー、次の放送はアウエーでの3試合を挟んでの第7回になります。次回のゲストは『なんちゃってサイコキラー系左殺し』、左津陸真心選手さつりくまじんを予定しております。それでは次回、乞うご期待！」

「えーっと、3日ぶりと言えはいんですかね？ 金曜日の夕方、つまりは仕事終わりにグイっとビールを飲みたくなる時間帯。そんな愛知ドームからこんばんは、司会の黒鷲座一です。はい、今回はそこまで言うことないんですね、この番組と言えば最初の僕のマシンガントークが特徴らしいんですけど。うーん、あ、そうですね。皆さんそろそろ4月中旬に至るころになります、仲間や友達などは出来ましたでしょうか。春と言えは新しいシーズンですよ。学生の方は一学年上がるか進学した感じでしょうし、就職した方もいると思います。つまりは新しい出会いの季節ですよ。まあ社会人になればそんなものはないのかもしれませんが。何事もスタートが大事です。勢いつけすぎて転ばないようにだけは気を付けてくださいね。……はい、それではゲストの紹介に参りましょう。『なんちゃってサイコキラー系左殺し』、左津陸真心選手です！」

「ヒャーッハッハッハ!! 待たせたなてめーら!! 左津陸タイムの始まりだあ！」

高笑いとかテコテのセリフを吐きながら現れたのは、銀色と赤色が混じった髪をしたつり目の青年だ。銀髪は地毛だが、赤はヘアスプレーで染めているらしい。本人曰く「こうした方が返り血浴びたみたいで雰囲気出るじゃないですか？」との事である。それでこの前監督から叱られていたようだが。形から入る不良がいるように、彼もこうして形から入っているというわけである。

「……わっかかりやすい反面教師が出てきてくれましたね。皆さん間違ってもこんな感じのデビューはやめておきましょう」

「おいおい辛気臭い顔してんじゃねーっすよ黒鷲座さん！ これもファンサービスってやつでさあ！」

「うるさい、派手、変なキャラ。2アウト2ストライクってとこかな。八家さんほどじゃないですけど、うちには変人が多いですね」

「何を言いますか！ 今のプロ野球に必要なのはこういう尖った個性っつーやつだ。その点、俺様は違う！ 俺様は人を狩るキラーだ、そんじよそこらのやつとはわけが違うんすよ！」

自分のキャラを保ちながらも敬語を使うあたり、左津陸はまともな部類と言える。年齢でいえば第一回ゲストの石清水緑郎と同年代にあたる彼は、社会人出身だ。まあ彼にも色々あったのだろう、知らんけど。

「分かった分かった。とりあえず半径1メートル以内に近寄らないでもらえる？」

「えっ、ひどっ!? ……こ、殺してやるぞこの野郎！」

「迫力が足りない、もう一回」

「殺してやるー!!」

「そんなんでサイコキラーやれると思ってるの？ 見通しが甘いよ、もっとな殺意をこめて」

「ぶ、ぶっ殺してやる!!」

「及第点だな」

辛口評価をつけながら、黒鷲座は視線を落とす。実は彼がこうなったのにも理由がある。というか何もなくてこうなるのならただのヤ

バい奴だ。

「心身ともに左キラーになるためには、もつとだ。もつとやべー奴を出さなくては……！」

そう、真面目過ぎるが故なのだ。その能力は確かなのだが、少しずれているところがあるのが左津陸の欠点だ。昨シーズン、監督から「お前は左キラーになれ」と言われて以降ずっとこんな感じである。多分キラーとは何かを突き詰めて考えていった結果がこの有様なのだろう。誰か指摘してやらなかったのか。というかまだ始まって数分しか経ってないのにキヤラがもう崩れつつあるのはどうなのよ。

「お前さあ、まあ頑張ってるのは分かるけど努力の方向性を間違えてない？ キラーって暗喩というかあくまでもそんな感じになれとは誰も言っていないからね？」

「いやそんな事は無いっすよ！ いや、無いぜ！ 悪い奴っぽく振る舞うために家で鏡を見ながら高笑いの練習十五分間ッ！ 一週間に一回はスマホでサイコホラー映画の鑑賞ッ！ まあグロテスクなの自分ダメなんでもっと音声しか聞いてないけど！ とにもかくにも続けること1年間！ こうして作り上げた結晶が今の俺様というわけだ！」

「途中で妥協してんじやん」

「頑張ったんです！ Aエイソンシリーズとか、殺人人形とかの映画も目を通しました！ そして俺は、いや俺様は学んだッ！ ピッチングは受け身ではダメだ、敵を倒すためには明確な殺意が必要であると！」

「やっぱずれてんだよなあ……、えーそんな悲壮な決意を聞いたとこ

ろで軽く彼の説明をしましょうか。左津陸選手はどのチームにもよくいる対左専用の左のサイドスロー投手です。前にどこかでストリートが高い割合を占めるのが普通と言いましたが、例外の二人目が彼です。投球の6割近くがスライダーです。後は左打者の内角にえぐりこむシフト回転のストリート。この二択ですね。え、球種が少ないって？ リリーフって言うのは少なくとも大きな武器を持つてるのが大事なんですよ。ね、真心」

「そんなところっす。あ、だぜ？」

「ではお便り紹介に参りましょうか。ペンネーム『岩倉使節団』さんから。『黒鷲座選手、左津陸選手こんばんは。僕は今年の春から高校生活がスタートしました。ところが中々友人が出来ません。このままではあつという間に僕の青春が終わってしまいます。なのでお二人には友人を増やす方法を教えていただきたいです』との事です。うーん、まあ友達なんてものは心配しなくとも勝手に出来てくるものですし、あんまり深刻に考えない方がいいんじゃないですかね。無理に相手に合わせてお互いが辛い思いをする方がよっぽど損です。真心はそのところどうなのよ」

「んっんん。あー、あー。……ヒャーハッハッハ!! そんなもん簡単だろうがよおー！」

「あつ、殺人鬼サイコキラースイッチ入った」

チューニングをしたかと思えば左津陸が例の高笑いを上げる。こういう所の切り替え方というのは、もしかしたら見習うべきなのかもしれない。

「友人を作りたいだあ!? だったらやる事は一つだ、趣味を大事に持っておくがいい! 同じ趣味を持つてる野郎ってのは必ず一人や

二人以上はいるもんだ！ 例えば映画！ チェーンソーで人を真つ二つにするスプラッタ映画は好きかあ!? 血と臓物が噴き出るあの瞬間がたまらねえよなあ！ ……俺は好きじゃないけど」

「ん、何か言った？」

「な、何も言っていない、んだぜ？ とにかく！ よほど独特な趣味じゃない限り友達は出来ると思うぜ！ 趣味はコミュニケーションを取るためにこれ以上ない手段だからなあ！ ヒヤーツハツハツハ！」

左津陸はかなり頑張って声を張ったらしい。コップになみなみと注がれた水をぐいっと飲み干した。その様を黒鷲座が頬杖をつきながら見つめていた。

「……何か普通」

「……へ？」

「そういうキャラで行くならもつと捻ろうよ！ こう、もつとき。『ヒヤーツハツハツハ！ 教室で一人ナイフを舐めてれば一目置かれるぜエー！』とか言った方が良かったんじゃない？」

「何言ってるんすか黒鷲座さん。頭おかしいんですか」

「え、待ってこれ僕が悪いの？ っていうか突然マジな事言うか普通？ えー……はい、一旦CM行きましょう」

「あ、逃げた」

## #7 part 2

「うちの実家、トマト農家なんすよ」

「どうした藪から棒に。え、何怖い話？」

「まあ話は最後まで聞いてください。それで家でよくトマトを食べる習慣があつたんです。サラダとかピザとかスパゲッティのソースとか」

へタの取れたトマトを軽く上に放り投げながら左津陸は話を続ける。ちよつと待て、どこからトマト持ってきた。ブルペンの冷蔵庫にそんなものあつたっけ？

「うん、まあ農家ならではの悩みってやつですかね？ 僕はそうじゃないので知りませんが」

「母親が料理好きだったおかげで、結構バリエーションには困らなかったんですよ。他にはチキンのトマト煮なんてももありました」

「この時間帯にその話はきつい。お腹空いてくるじゃん。なんだよ殺人鬼モードの次は飯テロモードか？」

「そうやって育ってきたからトマトは好きなんですけど。一つだけ苦手なトマト料理？ がありますね。トマトジュースが飲めないんです。あのドロツとした濃厚すぎる感覚がどうにもダメで。本当にあれだけは勘弁してほしいんですよね」

「うん。……これ結局何の話？」

「あ、そうですね。そろそろ結論にいかないと。その影響で、赤い液体

を見ると少し胸やけがするようになりまして。だからなのか、血がダメなんですよね」

「え、そこに繋がるの!? というかトマトジュースの影響強すぎでしょ! 普通逆だっつもの! 何でトマトジュース嫌いが血が苦手に繋がるんだよ!」

吸血鬼は血を吸えない時にトマトジュースを飲んで気を紛らわすという。なんかこの場合は吸血鬼の逆バージョンみたいで嫌だ。サイコキラーへの道が遠すぎるというか、これももう無理では? まあ本来目指すようなものでもないんだらうけれど。

「ところで何でトマト持ってんの?」

「何でって、そりゃあ食べるためですよ」

そうやって左津陸はトマトにかぶりついた。果汁が飛び散らない分、食べ方には慣れているようだ。赤い果肉が露わになる。そもそもトマトを丸かじりするか普通。そのワイルドさをもっと違う所で活かせたらな。

「いやそれは分かるけど何でわざわざトマト? そもそもそんなもの冷蔵庫にあったっけ?」

「俺が持ってきました。うん、やっぱ冷やした生のトマトは美味しいすね」

「犯人お前かよ……はい、というわけでそろそろ本題に戻ってまいりましょうか。えーここから先は視聴者の方から寄せられたコメントを拾っていく時間です。ここからはテンポよく、なおかつハイテンションで行きましょう。じゃあほら、真心。殺人鬼モード」



「ん、んん……ヒヤーツハ、ゲホツゴホツ！」

高笑いをしようとしたところで、左津陸が思いっきりむせこんだ。あーあー、無理するからなんて言いながら黒鷲座がその背中をさすつてやる。

「ほれみたことか。トマトなんて食べるから」

「ゴツホ、トマトの事を悪く言うのは許さないっすよ！」

「……お前もうトマト仮面とか名乗ったらいいんじゃないかな、いつそのこと」

「中々いい響きっすねゴーギャンツ」

「え、大丈夫？　つてか途中からふぎけてるでしょ」

「タバコを初めて吸った時の事を思い出すっすね」

「……吸うのが悪いとは言わないけど、選手寿命縮むぞ」

「あ、そこに関しては大丈夫っす。一回しか吸った事無いっすからモツネツ！」

伏せた顔を上げてけろりとした顔でOKサインを出す左津陸。うん、何も大丈夫じゃないんだけどね。っていうかもうわざとでしょ。

「えー何か腑に落ちませんが、進めましょう。まず一つ目のコメントから。『お二人の好きな寿司ネタは？』、僕はやっぱりサバの押し寿司ですかね。あの独特な味が好きなんですよね。真心は？」

「…………ほん、ヒヤハハ。……タコっすかねえ！ あのプリプリ感は他に無いぜ！ それにタコの血は青いからな！ わざわざ赤い血を見なくて済むってもんだ！」

「あ、もう血が苦手なの隠さないのね。はい次、『オフの趣味は何をしていますか？』。僕は自分の奪三振集の動画を編集してにやにやしています。自分で言うのもなんですけど、結構インドアですね」

「俺様はさつきも言ったが映画鑑賞だ！ やっぱ一番はアクション系の映画だな！ 見ててスカツとするとか、気持ちがいいよな！ あ、もちろんスプラッター系も見るぞ！ あれに出てくる殺人鬼は中々秀逸なデザインしてるからな！」

「はい次、これ真心一人に向けた質問ですね。『サイドスローに転向したきつかけを教えてください』ですつてよ」

「ヒヤッハッハッハ！ 確かに疑問に思うだろうよ！ それはな……三振に打ち取った瞬間の絵面が芸術的だからだ。こっちに対して跪くように膝を落とすあの姿、絵画にして飾りたいくらいだ！ っていうのもまあ事実なんですけど、昔からスライダーは得意な球だったんですよね。高校時代にそれを最大限に活かすために転向を打診されてからずっとこの投げ方ですね。社会人になってからもこれが一番しつくりくるといえるか、三振も取りやすいし丁度いいんですよね」

こう投げるんですよ、と軽く左津陸が自分のフォームを再現する。ファンにとっては見慣れた光景かもしれない。腕を横から振るそのフォームは確かに左対策として有効だ。

「じゃあ最後の質問行きます。『二人の理想的な引退の仕方を教えてください』とのことです。うーん、これは難しいですね。余力を残し

たまま潔く引退するか、それとも苦しみながらもがいて最後までやりきるか。どちらもいい引き際ではあると思うんですけど、やっぱり理想は余力を残して引退することでしょうか。まあそっちの方が格好いい感じしますね僕個人としては。あと胴上げはマストです。一生に一度でいいから胴上げされる側になりたいですね。はい、次は真心な」

「ふむ……人生とはキャンバスだ。最後の一笔をどう華々しく、そして美しく散るかが一番重要になる」

「あれ、これ野球人生の話だよ。ガチの人生の話じゃないよね!？」

「とはいえ俺、あ、いや俺様?。」

「もうキャラがブレブレじゃねーか。もう好きな方でいいよ」

「じゃあ俺で行かせてもらいます。俺はそこまで自分が優れた選手ではないことは分かってるっす。恐らく最後に胴上げされるような選手ではない事はよくよく理解してます。だから……いや、だからこそ短くとも太く線を引いていたい。それで誰か一人でも多く自分の事を覚えていてくれればいい。俺はいつでもこの登板が最後になってもいいように準備してるっす」

「お、おお……思ったよりまともな返答が返ってきてびっくりした。そんな卑下しなくてもいいのに」

「この先大きな怪我をするかもしれないから。まあそのためにもルールに違反しない限り色んな手を使いますけどね」

「……あれ、もしかして実はサイコパスだったりする? えーではここでCMです」

#7 part 3

「続けていきましょう、ブルペン放送局！ 元気出していこー！」

「おー！」

「というわけでお便りを読んでいきましょう。というわけで真心、カモン」

「こほん。ヒヤーツハツハ！ ここは勢いに任せていくぜエ!!」

恒例のゲストによるお便り選別の時間である。勢いよく左腕を突っ込んで紙を取り出そうとして左手をお便りボックスにぶつけた。

「あいったー!?!」

痛みにうめく左津陸を白々しい目で黒鷲座が見つめていた。おい、商売道具なんだから大事にしろよ。

「アホめ」

「いてて……ぶつけちゃった。あ、二枚引いちゃったみたいですけどいいですか?」

「うーん、まあ前例はあるしいいか。じゃあまず一通目、読んでもらうていい?」

「はい。それでは一通目いきます。ペンネーム『大魔神』さんから。『黒鷲座選手、左津陸選手くんばんは。お二人は現在投手として活躍されていますが、野手としてプレイしてみたいと思っただ事があるのでしょうか? もしくは高校時代には打者としても活躍していたので

しょうか』という質問です。打者としてっすか……どっちかと言うと自分は投手の方が好きっすね。そっちの方が狩るイメージが湧いてくるんで」

「うわ、ドSじゃん怖」

「酷くないっすか!?!」

少し大きさにリアクションする左津陸。たまーに素でこういう所が顔を出してくるんだからちよつと怖いというか何というか。

「で、打者としてはどうだったわけ？ そこんところ聞いたこと無いんだけどそう言えば」

「打者としては……うーんあまり面白くはないっすよ。地方大会決勝でサヨナラホームランを打ったくらいで」

「待て待て待て!」

「え、何すか」

「アホか! 一番! 面白い! ところでしようが! え、何でそんな一番盛り上がる部分をさりげなく流そうとしてんだよ!?!」

がくがくと肩を揺さぶる黒鷲座に対して、左津陸は平然とした様子で話を続ける。

「えー、だってそんなに面白くないっすよ? たかだかホームラン一本くらい、プロ野球選手なら誰だって打った事くらいあるでしょうに」

「いや打った事ないような奴もいるだろうし……ってそうじゃない！  
そこじゃない！ そのシチュエーションが大事なんだよ！ ……  
まあ、詳しく聞いてあげようじゃないですか」

「本当に大した話じゃないっすけど」

「いいからー！」

じゃあ仕方ないっすね、と頭をぽりぽりと搔きながら左津陸が話し始める。僕だったら一生擦って自慢し続けるぞそのエピソード。いったいどういう神経してるんだ。

「んまあ盛り上がるような話じゃないっすよ。あれは確か高校二年の時の夏大会の話っすね。俺その時何番打者だったっけ……記憶が正しければ6番ピッチャーだったんですけど。その試合の10回の裏、1点ビハイン드의二死一二塁で打席が回ってきたんですよ」

「何だ、結構鮮明に覚えてるじゃん。やっぱ印象に残ってたんじゃないの〜？」

軽く茶化そうと黒鵜座がからかったものの、それに慌てる事も無くけろりとした顔で左津陸は話し続ける。

「まああの日暑かったんで。応援歌もうるさいしじりじりと太陽が気持ち悪かったんで結構覚えてるっすね」

「どんな理由？ っていうか僕らリリーフだから打席に立つことなんて滅多にないけど真心は左打者なんだっけ？」

「右でも打てないわけじゃないっすけど、わざわざそっちで打つ理由も無いっすからね。あの時は左の打席に入ったっす。それで、相手も

先発からずっと投げていたから疲れてたんでしようね。ほとんど球もヘロヘロでばててたんすよ。まあ相手も良く頑張っていたとは思わんすけど、なにぶん勝負つすからね。何よりここで打たないと怖い先輩から恨まれる事間違いなしでしたから」

そこで自分がどう、というわけではなく仲間がこうだから、というあたりが真心らしい気もしてくる。これといった志がない僕が言えた話ではないが、甲子園出場に特別強い思い入れがある高校球児としては珍しいと言えるだろう。

「それでサヨナラホームランを打ったと」

「ど真ん中に力の無いストレートが来たんで後は打ち返すだけでした。高校野球なので打った瞬間走りましたけどあれは多分今までの野球人生の中でも会心の一撃でしたね」

「その割にテンション低いというか、もっと印象に残るんじゃないの？　なんか『ヒヤハハハ！　弱った相手を仕留めるのはたまらねーよなあ！』とか言い出すのかと思ったけど」

「あ、その手があったか」

納得したように手を叩く左津陸。もうキャラを出す努力も諦めているようである。そこは一貫性を持てよ。まあそんなハイテンションでも司会のこっちが困るけど。

「おい。おい。それでいいのか真心よ」

「冗談つすよ。どっちかと言うととどめを刺すよりも元気な相手を屈服させる方が好きです。その点投手は良いですよ。よほど相手の集中力が切れてない限り元気で打つ気のある打者と対戦できますか

ら。その分打ち取った時のやりがいがあったいいですよね」

「もつとヤバい理由が出てきた」

「え、みんなそういう理由で投手やってたんじゃないんですか？」

わあ、ふたを開けたらびっくり箱どころか敵キャラだった時並みの衝撃。もうお前そのままでもいいよ。そのままで十分やべーやつだから。

「お前と一緒にすんな。あ、でもいや、うーん？」

どうしよう、黒鷲座は自分で自分が分からなくなってきた。いやまあ支配的なピッチングは好きだし楽しいけどそれだけのために野球をやっているかと言われたら……どうなんだろう。

「で、黒鷲座さんはどんな感じだったんですか、野手として」

「僕？ 僕と言えばまあ少し前のサヨナラタイムリーを打った試合が思い起こされますよね！ そうですよね視聴者の皆さん！ んっんん。とはいえ僕は打撃の方はそこまでなんですよね……。あつても当てるのだけは上手いって高校時代の監督からは褒められましたね」

「ホームランを打った事は？」

「……ないです」

「あ、だからさっきあんな歯切れの悪い返事をしてたんすね」

「やかましいわ！ 大体ホームランを打つことが打撃の全てじゃねえ



から！ どんだけパワーあっても当たらないと意味ないからなあ！  
あつ、そうだ。当てる事といえばバントも得意でしたね。投手やってたからどこにバットを合わせればいいのか分かるって言えればいいんでしょか。上手く勢いを殺せるので打席ではよくバントのサインを出されてました」

「俺バントされるの嫌いなんすよね……。だってあれ合わせられたらキツイじゃないですか。もっと正々堂々と来いやって思いませんか？」

「まあ一点が命取りな僕らにとっては避けられない宿命みたいなもんだしそれは仕方ないような気もするけど」

「そして正々堂々と打ち取られてほしい」

「最後本音出てんぞ。じゃあもう一個の質問は僕が大事に保管しておくとして……そろそろ「マーシャルのお時間です」

「ではこのコーナー！ 『黒鷲座一先生のく？ お悩み相談室』く！

はい、毎度恒例のこのコーナーですがこの放送を聞くのが初めてという人もいることでしょうし説明しましょう！ 簡単に言えばゲストの悩みを僕、黒鷲座が解決しよう！ というコーナーでございませう！ というわけで？ 君の悩みを聞かせてよベイビー！」

「ヒヤハ……ってここは高笑いするところじゃないか。うくん、難しい所を突きますね。悩みとは無縁とかそういうわけでは決してないんですけど、特にこれ！ って感じのものが無いので。強いて言うなら自分があんまり目立たない事ですかね」

「あく、それはまあリリース投手の宿命というか。特に真心は左のワンプointだから、シンプルに登板している時間が少ないって言うのもあるよね。だけど安心するがいい真心！」

「え？」

親指を突き立てる黒鷲座。大丈夫だ、悔やむ必要などない。むしろ世の中には目立たないからこそいいことだってある。

「目立たないってのはそこまで対策がされないってこと！ マークが厳しければ打者も色々と考えてくるだろうし、それで活躍できなくなるよりマシでしょ？ それに……投手が目立つのって基本的によほど圧倒的なピッチングをした時か炎上した時かの二択じゃん？ 特にウチなんかはファンの目も肥えちゃって抑えて当たり前みたいな風潮があるから、ダメだった時にボロクソ言われるんですよ」

「あー、確かに。いやこれ確かになって言っちゃっていいんですかね？ というかファンの目が肥えてしまったのって5割くらい黒鷲座さ

んのせいじゃないですか？」

「え〜そう？　そう見える？　いやーだとしたら申し訳ないな〜」

「食べ物の名前で謝ってください」

「ごメンチカツ☆」

黒鷲座は人差し指と中指でピースを作って笑顔を見せる。これが漫画ならキラリという効果音が入っていたのかもしれない。これは放送前にはあらかじめそういうフリでやると決めていたのだが、明らかに謝る気のないそれに視聴者の一部がイラッと来たかもしれない。

「まあ言ってる事も事実ですね。ともすれば、目立たない方が投手として一流……？　あれ、じゃあ俺の努力してきたことって、無駄……だったりします？」

恐る恐る確かめるような左津陸の視線が黒鷲座に突き刺さる。無駄と言えば無駄なんだけど、見てて面白いからそのままでもいい気がしてきた。気づかせてやるのも優しさだが、触れてやらないのもまた優しさだ。うん、これは優しさからくるものだから仕方ないね。

「いやまあそうとは言いきれないけどね。いいボールを持ってたらそれだけで存在感を發揮できますから。お前もスライダーを磨けば動画か何かで取り上げてもらえるかもよ？」

「なるほど、動画で……そういう目立ち方もありつすね」

「そもそもこの番組自体、普段スポットライトが当たらないリリーフ投手のために企画したものだから。この番組なら余程放送コードに引っかからない限りは好きにやればいいよ」

「あ、じゃあ好きなようにやらせてもらおうつす。ごほん、ヒャーハツゲ  
ホツカホツ！」

「……お前もうその笑い方諦めた方がいいんじゃないの。ほら、水」

「ありがとうございます。大丈夫つすよ、ちよつと喉に負担がかかる  
だけで」

「それが一番問題なんだけど」

「どーせヒーローインタビューとか永遠に呼ばれないだろうし、別に  
いいつすよ」

その言葉には、どこか諦めというか不貞腐れた様子を孕んでいた。  
考えてみれば真心がヒーローインタビューに立ったのを見たのは一  
度だけだ。プロ初勝利、それを記録した試合だけ。ずっとリリースと  
して投げ続けている事を考えると目立てないとは言えるけれども、そ  
んな一言で納得できるほど人間というのは出来た生き物じゃない。

「あ、時間ちよつと余りましたね。他に何か悩みとかないわけ？」

「他ですか……あ、そう言えばもう一つだけあるつすね。ピッチング  
の時なんですけど、どう振る舞ったらいいのか良く分からないんです  
よね」

「振る舞い？ そんなもの考えた事無かつたなあ……」

世の中には二種類のピッチャーがいる。闘志を前面に出していく  
タイプと、静かに淡々とスカした顔で投げていくタイプの人間だ。細  
かく分ければ色々いるだろうが、大ざっぱに言えばまあこんな所だろ

う。黒鵜座は当然後者であるし、左津陸もどちらかと言えば後者だ。だから黒鵜座にとつては左津陸は自分と似たタイプだと思つていたのだが、どうやら違うらしい。

「堂々としていようとは思うんですけど、なにぶんどんな感じでいれればいいのかが良く分からないすよね」

「どんな感じつて言われても……どう思います視聴者の皆さん？……うん、うん。『今のままでいいと思う』とか『時には熱くなつても良い気がするけどな』つていう意見が多数ですね。あ、良い事思いついた」

「良い事？　なんか黒鵜座さんがそう言う時つて大抵良くない事が起こる気がするんですけど」

「黙らっしやい。ちゃんと僕は真心の為を思つて言つているんだ」

「へ……へえ〜」

ちよつと引き気味の顔をしている左津陸。これは信用されてないな、多分。黒鵜座は静かにそれを察した。まあここからが腕の見せ所というわけだ。

「大事なのは笑顔だよ笑顔！　困つたときには笑っておけばいいじゃん！　そしたらファンからの好感度も上がるし！」

「でもそういうのつてヘラヘラしてると思われませんか？」

「あく、それは点を取られた時はそう思われても仕方ないかもな。でも抑えた時くらい笑顔でもいいんじゃないの」

「俺昔つから作り笑顔苦手なんすよ。カメラに映る時もあんまりいい顔出来てないし」

「まあまあ物は試し！ とりあえず指で口角を上げてみよう！ はい、じゃあこっち見て。いー」

「いー」

黒鷲座が左津陸の首を動かしたことで、丁度テレビカメラさえも二人の顔が映らない状態になる。その時二人がどんな表情をしていたのかは、当人にしか分からない。ただ、黒鷲座の肩が大きく動いたのが見えるだけだ。

「うつつつそでしょ……ごめん、僕が間違ってたわ。あー、これは無理だわ。放送コードに引っかかる顔してる。子供泣くわこんなもん」

「そんなにつすか」

「うん、般若みみたいな顔してたし」

「マジっすか」

「試しに仲次コーチの前でその顔してみ」

噂をすれば何とやら、とはよく言ったものだ。丁度仲次コーチがこちらまで歩いてきたのが見えた。振り向いた格好となったため、まともやカメラから左津陸の顔が映らなくなった。

「真心、準備ー。って何その顔。え、悪いものでも乗り移ったか？」

「これ作り笑顔らしいっす」

「下手くそすぎんだろ。まあいいや、行くぞ」

「分かったっす」

「……行ってしまいましたね。あの顔は今日夢に見るかも。はい、ではCM入りまーす」

「試合は現在、一対一の同点で7回の表の攻撃を迎えるところですよ。本来だったら僕も準備を始めておかしくないんですけど、同点ですからね。さて……相手は左打者が並んでいるところなんで、登板するとなればやはりKKか真心でしょうか。あー、そうみたいです。ちようど今マウンドに上がろうとしています」

黒鷲座の視線の先には左津陸がゆっくりと歩いていく姿が映されている。7回は基本KKが投げる場面ではあるものの、最近のKKは少し登板過多気味だ。そんな状況をブルーバースの投手コーチが見逃すはずもない。それを踏まえての登板なのだろう。

「じゃあここら辺でさつき真心が取ってくれたお便りを読むとしましょうか。えーペンネーム『ハレー彗星』さんから頂きましたお便りです。『黒鷲座さん、左津陸さんこんばんは』、ごめんなさいね、今真心じゃないんですよ。タイミングが悪かったですね。はい、話が逸れました。『私は日々の生活の中で、フラストレーションがたまると毎日です。それでも少しでも生きがいを見つけるために小さな幸せから見つけるをしています。今日は夕焼けがきれいだったか大体そんな感じです。お二人はどんな時に幸せだと感じますか?』」

そうですねえ、と首を傾けながら次の言葉が出てこない。幸せというものは、失ってから気がつくケースが多いものだ。黒鷲座もその例にもれず、多分失ってから初めて後悔するタイプの人間なのだろう。少し悩んだのち、黒鷲座は答えを出した。

「めちゃくちゃ幸せ! って感じるようなことはないですけど。挙げるとするなら『投げられていた時点でもう幸せ』って感じですね。志が低いとか思われるかもしれないですけど、まあ話は最後まで聞いてください。分かっているかもしれませんがプロ野球とは厳しい世



界です。何人もの選手たちが1年ごとに去つては違う選手がやってきてを繰り返すくらいにはね。それで、首を切られる選手にも偏りというか、どれだけ面倒を見てもらえるかというのがありまして。例えば育成選手として指名された選手や、ドラフト下位で指名された選手。彼らは見切られるのも結構早くてですね。逆に上位指名された選手なんかは余程素行や成績が悪くない限りはそこその期間球団も残してくれるんですよ。それで自分がどうかというと、4位指名という上位とは言えないけれど下位指名とも言い切れない、何とも言い難い立ち位置にいるわけです。だから活躍できないと早々に首を切られてもおかしくない立場にあつたんですけど。あれ、ちよつと聞いてます?」

放送向けだからほとんど一人で話すとはいえ、反応がないというのは心もとない。せめてうなずくとかさ、してくれよ。何だか泣きそうになるじゃないか。

「……まあいいです。話を戻しましょう。えーつと、どこまで話しましたっけ。そうそう、自分はいつ首を切られてもおかしくない立場だったつてところですね。だからまあ、自分がここにいるのは運が良いいと言うか。僕が今現在で球界でも指折りのクローザーになつてるのは事実ですけど、そこに至るまでの過程が結構大変だったんですよ。その点で言えば、僕は周りの環境や人間に恵まれたんだと思います。今となつてはいないコーチや、サク先輩だとか指導が好きな人が多くいたので。やっぱり僕一人じゃここに立ち続けるのは不可能だったと思うんですよ。『一期一会』というのは大事なんだなとしみじみと思わされます。はい、大分回りくどい話になりましたねごめんなさい。結局何が幸せかというと、今ここにいてという事ですね。こんな事を言うのは僕らしくもない気もしますが、登板する事自体、自分にとっては恵まれてるんだなと思います」

かなり長く語ってしまったので、一旦水を飲んで一呼吸置く。落ち

着きながら試合に目を移すと、左津陸が一人目の打者から三振をもぎ取った所だった。

「はい、じゃあそろそろ試合の方にも注目していきましようか。ちよつと様子を見ただけですが、真心はそこそこ調子が良いみたいですね。あ、今ちよつと高笑いしようとして失敗してますね。あーあ、やめとけって言うておいたのに。無理矢理自分を鼓舞しようとしてもキツイでしょ。まあそれは差し置くとして、調子が良いというのは本当ですよ。彼が一番よく使う球種はスライダーなんですけど、そのキレがかなり良いんですね。強いて不穏な事を挙げるとすれば、ストリートが甘い所に入らないかという所でしょうか。基本対左のワンポイントとして登板しているのが関係しています。彼のストリートは少しシュート回転をするので、左打者から見ると真ん中付近からインコースへと食い込むようなボールならいいんですけど。問題は外角に投げる時のストリートですよ。ボール球から入ってくる、言わば『フロントドア』のようなボールなら相手も打ちづらいいんですけども、中途半端に入ってくるとど真ん中にいつちやうので。後はそこだけ警戒していれば後は何とかかなると思います」

それは左津陸本人も分かっているようで、ほとんどスライダーしか投げていない。投球プレートから少し左に踏み込んだ立ち位置からのサイドスローというのは、左打者にとって脅威だ。1球目は外に逃げるスライダーで空振りを奪うと、今度は打者に当たるかもしれないという所からインコースに入ってくるスライダーでストライクを取り、あつという間に追い込んだ。

「投球で大事な事として言えるのは、常に投手有利なカウントを取るという事です。どうしてもボールがかさんでしまうと、必然的にストライクゾーン、それもあまり厳しくないコースに投げないといけないので打たれる危険性が上がるんですよ。多少地味にも聞こえるかもしれませんが、コントロールというのは投手にとって重要な

要素の一つなんです。勿論僕もそこら辺には気を配ってますよ。むしろ一番神経を使う所だと思います。お、今度はストリートか。うん、良い所に決まりましたね。詰まらせてセカンドゴロ。セカンドには美濃さんが入っているので安心ですね。ウチのチームは基本守備が固いので大丈夫だとは思いますが、あの人は激戦とも呼ばれるセカンドの中でも2年連続でゴールデングラブを取っていますから安心感が違いますよね。出来れば打つ方をもう少し頑張ってもらえるともっと評価も上がると思うんですけど、あの人も悪くも2割5分あたりで安定してるからなあ。あ、そろそろ自分の出番も近づいてきましたね。それでは次回のゲストを紹介して終わりますよ！次回ゲストは『ノリにノッてるサーファー系投手』、海原浪男選手うなばらうえいぶです。……海原かあ、接し方がいまいちよく分からないから苦手なんですけど、まあ多分何とかなるでしょう。では今回はここまで！ 次回をお楽しみに！」

## 偶然じゃない

試合は両者ロースコアのまま譲らず、9回を迎える。この回の表を石清水が抑えると、裏には1死満塁と絶好の機会を作る。打席に立つのは1番の李。敵ファンも、ブルーバースファンも、サヨナラを信じて疑わなかった。だがしかし、スポーツとは得てしてそう上手くいかないものである。カウント2―2から李の放った痛烈な打球はワンバウンドしてそのまま投手のグラブへ。ボールはピッチャーからキャッチャー、そしてキャッチャーからファーストへ。いくら俊足の李と言えども打球の勢いが強すぎた。あえなくダブルプレーでサヨナラは水の泡と消え、代わりに球場内にはため息があふれかえる。監督の金子に至っては呆れるを通り越して天を仰いでいた。結局9回を終えて1対1のまま。試合は延長戦に突入していた。

「頼むぞ、黒鷲座。この嫌な流れを変えてくれ」

いざ登板しようとするブルペンを出ようとしたときに仲次コーチからそんな言葉が飛んでくる。こういう時、悪い流れを食らうのはいつだって投手だ。だからといってそれが打たれていい理由にはならないが。

「まあ、仕方がないですね。こういう打線が援護してくれない状況は良くも悪くも慣れてますから」

黒鷲座はいつもの張り付いたかのような笑顔を見せてブルペンを出る。こういう相手に流れが行きかけている上に負けが付くかもしれない場面で投げるのは正直嫌ではあるが、そこは仕事だ。割り切るこどくらい簡単に出来る。さあ、今日もやってやるとしましょうか。ベンチからマウンドへ向かう途中では拍手が迎えてくれた。夜だと言うのにこんなに大きな拍手を送ってくれるファンに対して頭が下がる思いだ。

『選手交代のお知らせをします。先ほど代打いたしました関脇せきわけに代わりまして、黒鷲座。背番号99、黒鷲座一が上がります。また、代走いたしました武留たけどめがライト。ライトの鳥野とりのがレフトへ、レフトの志村しむらに代わりまして扇谷。背番号63、扇谷守がキャッチャーに入ります』

相手の東京タイタンズは5番の藤ふじからという、そこそこの好打順から入る。このチームは突出した部分こそ無いものの、バランスの良さから生まれる安定感がウリのチームだ。もう一度言おう。突出した点が無い。それはつまり、どういうチームか解説しづらいチームだということである。資金力はあるために各球団の有力選手と大型契約を結ぶことがそこそこあるため、決して弱くはない。ただ来るのが旬を過ぎたおっさんが多いためにあまり活躍するケースが無いのだ。ただそれでも先述した藤など、最近では若手育成に舵を切った事で少少づつ強くなり始めているチームではあるから油断は出来ない。

登場曲が流れる中、淡々とマウンド上で体をならす黒鷲座の肩を叩いたのはやはり彼の女房役である扇谷だった。この人も守備での安心感は凄い。当たり前のように気配りをしてくれるし、投手の投げやすいうようにリードをしてくれる。投手を魚と例えるなら、扇谷はかなり大きめの水槽だ。ある程度好きなように泳がせてくれる。

「とにかく先頭だ。藤さえ切ることが出来れば後はそこまで脅威じゃない。あの球も少少づつ混ぜて実践向きにしていこう」

「ういっす。要するにいつも通りの感じでいけばいいってわけですね」

「お前はまた……まあいい、そんな大口叩いという打たれましたなんて言い訳はナシだからな」

「あっはっは。そうですね」

「そこはせめて否定しろよ。まあいつも通りで安心したわ。よし、そんなじゃまあ、俺たちの好きなようにやろうぜ」

そう背中を叩いて定位置へと帰っていく扇谷を見ながら、黒鷲座は軽く背中を伸ばす。そうして5球ほど投げたところで投球練習を終えた。

『5番、レフト。藤』

右のバッターボックスに五番打者の藤が入る。オープンスタンスでバットを体の方へとゆらゆらと傾けるバッティングフォームが特徴的だ。一番ダメなのは真ん中高め、相手の得意コースは頭の中にしっかり入っている。ここ5試合でホームラン2本と調子がいい。とにかく甘い所にはいかないようにを心掛けないといけない。

「(自信に満ち溢れてるって感じだな)」

こういう相手は勢いに任せて打ってくるから警戒が必要だ。キャッチャーからのサインは「一度首を横に振れ」らしい。言う通りに従って首を一度横に振った。こういう些細な動きも駆け引きの一つだ。そして1球目、ボールを放り込む。真ん中低めのストレートかと思われたそのボールは打者の手元で急速に減速し、ワンバウンドした。打者のバットは空を切って打者が体勢を崩す。

「(な、今のはこの前試合で見せていたボール!? 偶然じゃなかったのか!?)」

「(なんて、思ってるんだろうな。偶然じゃないんだな、これが)」

睨みつけるように黒鷲座に視線を送る藤。それすらも見下すかのようには黒鷲座は冷たい笑みを浮かべた。次の球を投げようとするが、一旦ここで藤がタイムを取った。スイングを確かめながら一度深呼吸する。

「大丈夫だ……あれくらいの球、一度見たら打てる。少なくともそういう練習をやってきたはずだ」

審判により声高に試合再開の合図がされ、藤が黒鷲座へと向き直る。ふぎけやがって、その余裕たつぷりの面、今すぐにも崩してやると改めて意気込む。2球目、今度こそ狙い通りに先ほど投げってきた球が来た。明らかなチャンスボール。気持ちボールより低めにバットを滑らせる。

「くたばれクソ野郎が!!」

だがしかし、バットがボールに触れる事は無かった。アウトコースへ逃げるような変化。先ほどと同じような回転だったが、まだ黒鷲座のボールは変化の余地を残していた。

「クツソ、まだ落ちんのかよ!!」

これで投手が圧倒的有利のカウントとなった。次はボール球で振らせに来るか、それとも三球勝負で来るか。どちらにせよ、次のボールに対応できれば恐らく今日の打席は回ってこないだろう。とにかく、際どい球でも何とか前に飛ばさなくてはいけないと藤は覚悟した。そして3球目。

「(……落ちる!)」

「ストライーク！ バッターアウト!!」

「はあ!？」

ここにきてインローへの真っ直ぐ。落ちると思われたその球は綺麗な軌道を描いてキャッチャーミットへと突き刺さった。完璧に仕留め方。ここまで完膚なきまでに叩きのめされたのは藤にとって初めての経験である。……とりあえず、今の経験を忘れないようにしておこう。藤は心にそう誓った。先頭打者を三振に打ち取った黒鷲座はその後ペースを上げ、三者凡退でこの回を終えた。

「扇谷さん、さっきのボール読まれましたよ」

10回裏のベンチで試合を見つめながら、黒鷲座はこぼすように扇谷に話しかける。それに対して扇谷は驚くことも戸惑う事もしない。ただレガースを外しながら平然と「そうか」と返すだけだった。

「そうかって……ひよつとしてこうなる事読んでたんですか？」

「さあな。ま、結果打たれなかったからこっちの勝ちだろ。それにいい練習になったでしょ？」

「扇谷さんも人の事言えないくらいには性格悪いですね」

「キャッチャーにとつちや褒め言葉だよ。……あ、打った」

「よっしやサヨナラー！ ひいては僕に勝ちがついたー!!」

ボトルを持って走り出す黒鷲座を見ながら、扇谷はやれやれとため息をついた。



#8 part 1

放送開始直後にテレビ画面が映したのは珍妙な黒鵜座の姿であった。虹色のアフロを被り、目には星形のサングラスに付け髭。そして肩には『本日の主役』と書かれたタスキが提げられている。容姿のほとんどをカムフラージュしている変わり果てた姿からは、もうユニフォームに書かれた番号でしか彼を判別することができないだろう。

「本日もやってまいりましたブルペン放送局！ 司会の黒鵜座一です！ いやー、昨日はいい試合でしたね！ 4番ドウリトルのあの痛烈な左中間を破るサヨナラタイムリーは見事でした！ 延長戦に突中にした時はダメそうな感じがしましたが、やっぱり分からないものですねスポーツってものは！ 今日相手は東京タイタンズです、昨日の勢いそのままに早い内に勝負を決めに行きたいですね。正直僕は昨日投げて勝ち投手になったし今日の登板は遠慮したいところですから。……ああ、そうですね。まずこの見た目の説明をするべきでした。一見ふざけているように見えるかもしれませんが必要なんですよ、自分を守るために。だからこれは魔除けとか防御のための鎧とか。決して趣味ではないです、決して！ 本当ですよ？ さあ皆さん衝撃に備えてください。それでは本日のゲストを紹介しましょう！ 『ノリに乗ってるサーファー系投手』、海原浪男うなばらなみの選手です、どうぞー！」

「ちいーっす！ 皆いい波乗ってるー!? バイブスあげてこー！」

開幕からいきなり少し高めの声を上げながら登場したのは、水色の髪を肩まで伸ばした小麦色の肌が目立つ美形の男子だ。整えられたあごひげに手を当てながら、機嫌がよさそうにカメラに向かってピースサインをしている。

「ちよいちよいかメラさん、マジかつこよく映えるように撮ってちよ

うだいよ!? 上手く撮れなかった日はもうあれだよ? そんなのナ  
イアガラの滝だからね?」

「……はい、見てわかる通りこんな感じの遊び人です」

「あれ、サラッと悪口言われたくさい? とうるか黒鵜座センパイ何  
かテンション低くね? もっとアガッていきまっしょい! ほら、  
ウエ——イ!」

「胃もたれしそう……」

早速これだ。あまりの温度差に風邪をひいてしまいそうなレベル  
ではあるが、これはまだ地獄の一丁目である。何故なら番組はまだ始  
まったばかりなのだから。まったくもってこれから先が危ぶまれる。

「えーつとじゃあ、まず海原選手の経歴について軽く紹介しましょう」

「もうちよつとフランクでいいよー、ほらウエイブちんって呼んで!」

「続けまーす。海原浪男、浪に男と書いてウエイブと読むんですね。  
……どゆこと? まあうん、唯一無二な感じがいいんじゃないですか  
ね。僕だったら絶対名前負けしますけど。それで出身が確か沖縄  
だっけ?」

「そうそう! もうバリバリの沖縄生まれ沖縄育ちよ! 沖縄はいい  
よー、ハイビスカス、シーサー、そして青い海! もうウエイのウエ  
イよー!」

「後半は方言なのかちよつと何言ってるのかわからないですね。それ  
で沖縄の高校を卒業して、都内の大学に進学……それも名門! 羨ま  
しい限りだな」

「いやーオレっち天才だからさ！ 高校時代はもう飛ぶ鳥を落とす勢いだっただけよ！ 『地元じゃ負け知らず』的な？ それでも今のまじやプロで通用しないと思ったし、親にとりあえず大学に行つとけば後々困らないって言われたからプロ志望届は出さずに大学に進学したわけ」

本人に全く悪気はないだろうが、その言葉は黒鷲座にとってぐさりと来た。いくら有望な選手であろうとプロ野球選手としてやっていくるのはほんの一握り。戦力外になった選手が球団職員となる事はあるが、コーチなどとして野球に関われるチャンスはあまりない。となると、セカンドキャリアに進むにあたって色々準備をしておかないといけない。勿論ネームバリューやプロ野球選手だったという箔はつくのだが。いやほんと、今を生きる若者にとって将来の話はきつийよ。

「……ハッ！ 意識が飛んでた！ 話を戻しましょうか、大学時代は2年から徐々に頭角を現して3年生の頃にはベストナイン受賞、一気にプロ注目となったわけですね。正直なところ勉強とかどうだったわけ？」

「どうって言われても、普通って感じ？ 心理学とかはそこそこ面白かったけど、まあそんなくらいかな」

「うぐう、こいつちゃんと勉強してやがる。チャラ男の癖に、チャラ男の癖にい……！」

こいつさては出来る子だな。黒鷲座は授業中に居眠りした事は無かったが、成績は残念なことにお世辞にも良いとは言えなかった。残念なことに。

「ハイハイ、しよげないでよベイバー！　それでそれで、続きはどうなってるの？」

「続きって言っても後は一昨年に2球団競合してドラフト1位指名ってどこしかないぞ」

「ちえー、つまんねーの。もっとこうさー、あるでしょ？　あるでしょー？」

「やめろくつつくな気色悪い！　僕がそういう風に寄るのを許すのは女子相手だけだ！　あー、強いて言うなら昨シーズンいきなり先発として8勝をあげて新人王に輝いたくらいか」

「分かってんじやん黒鷲座パイセン！　そう、俺っちこそ去年の新人王にしてキング！　優勝の原動力と言っても差し支えないっしょ！」

「図に乗るなよ小僧……！」

「あっはは、口調変わってんのおもしろい！」

黒鷲座の威圧に対しても全く怯む様子などなく、むしろ海原はこの状況を面白がっている。プロの門戸を叩くものは大抵肝が据わっているというが、彼の場合は別格である。といってもここまでになる必要なんてないし先輩に対しての礼儀がなっていないとOBからは苦言を呈されていた。それでもあんまり怒られないのは彼の人となりの良さが垣間見えるというものだが。

「お前周りとの関係性とか気を付けろよ」

「オーライオーライ！　ちやーんと話し方とかは人によって分けてるんで」

「おい待てそれはつまり僕が舐められてるってことじゃないか？　そう言いたいのか貴様」

「黒鷲座パイセンにはこれくらいフランクな方が本人も喜ぶってサクっちが言ってたんで！」

サクっちとは前々回のゲストとして登場したベテラン投手、滑川削の事である。基本的に感情に身を委ねる事もないが、この呼び方は流石に怒られるのではないか？

「おまつ、サク先輩の事そうやって呼んでんの？　怒られないそれ？」

「？　サクっちはこう呼ぶと飽くれるけど？」

「おじいちゃんか何かかよサク先輩！　もつと威厳を持とうよ！　……まあいいや、変にかしこまられても困るのは事実だし」

「あざーっす！　じゃあ黒鷲座センパイ、これからも仲良くしようぜ☆」

海原から唐突に手が差し出される。一瞬躊躇したがその手を握ってやった。するとその腕をぶんぶん振り始めた。

「じゃあこれからはズツ友っていうことで！　チャオ〜」

「おい待てそこまでは言っていないぞ。……あつともうこんな時間。C M入りまーす」

#8 part 2

「では一つ目のお便り、ヒアウイゴッ！」

「何でお前が仕切ってるの、司会僕なんだけど。はい、じゃあお便りを読んでいきましょうかね。ペンネーム『サンボ師匠』から。『黒鷲座選手、海原選手こんばんは。』、はいどうもこんばんは。毎度のごとくドームでの試合なので外の景色は見れないですけど、今日は月が綺麗な日らしいですね。『お二人に質問です。野球選手と言えば高収入で有名ですが、その使い道はどうするのでしょうか。庶民の私にとっては非常に気になります！』らしいです。じゃあまずは海原から言ってください！ その内に僕も答えを考えておくので！」

海原が天を仰いだかと思えば、今度は何やら指折りで数え始めた。ひー、ふー、みーとぶつぶつ呟いた後、決心したかのように顔を黒鷲座の方へと向けた。

「え、何？ ひよつとして不満だった？」

「いやー考えてみれば色々と散財しちゃったつすねえ！」

「あー、キャバクラとかか。お前の場合」

その返答に海原は眉をひそめながらその指を黒鷲座へと向ける。どうやら思ったよりもピュアであるらしい。決めつけるような発言をしてしまったか。

「とりま人を見た目で決めつけるのはご法度っしょ！ 大体今時はキャバクラとかよりもクラブだから！」

「昔も今もパリピが行くところは変わんねえな。大体イメージ通りだ

わ

うん、反省して損した。大して行くところがイメージと変わらないようである。本当に昔、自分がまだ赤子だったころは普通の人も夜には踊り狂っていたらしいが現代人にとってはほぼほぼ無縁の話である。

「あーもう黒鷲座パイセンが変な事言ってるから話それちゃったじゃん！ 今頭の中で考えてた事が全部おじちゃんになってマジぴえん超えてはおんなんですけど！」

「何て？」

「……あ、思い出した。そうっすよ収入の使い道っつー話ですよね！ 契約金が大体1億くらいだったけど結構引かれちゃったから草生える！ えーつと、まずはお世話になった所への寄付でしょ？ まずは大学、高校、そんなもって中学の頃所属してたシニアへの寄付でかなりマイナスになっちゃってさげぼよですわ」

「もうちよつと分かるように言ってくれねーかな」

ところどころ何を言っているか分からない。決して耳が悪くなつたとかそういうわけじゃなくて。言語そのものは伝わるけれど何を言っているのが全く分からないのである。同じ日本語で話している分、動物と会話を試みて失敗するよりもずっともどかしい気分になる。

「でも契約金は結構たんまり貰ったわけだけど、年棒はそこまで多くないんだよね。えーつと言っているの？」

「いいよ？ かく言う僕もサク先輩にカミングアウトされたクチだ

し」

「じゃあ問題ないチンゲールっすね！ 言っちゃおう、俺っちの年棒が最初1000万円でー。んで新人王取ったっしょ？ その影響もあつてプラス査定だったんだよね。その額2000万！ まあもうちよつと欲しかったけどほどほどつてところかな」

「そりやまだ二年目だからな。継続して成績残せば一気に貰えるようになるよ。っていうかその面で言えばお前今シーズン初登板で大炎上してたけどそこらへん大丈夫なの？ ほら、二年目のジंकスって意外とあるもんだからさ」

去年の活躍で裏ローテの頭という大事なポジションを勝ち取った海原。しかし彼の今シーズン初登板で待っていたのはほろ苦い現実だった。東京ヤンキースの主軸・鳩ヶ浜に2ランホームランを浴びるなどでノックアウトされいきなり出鼻をくじかれた。

「いやいや、もう過ぎた事を悔やむなんて古い古い！ 俺っち達は今を生きる人間なんだから過去のデータ何かに囚われてくよくよしてる方が損っしょ！」

「あれだけフルボッコにされてそう言えるメンタルが羨ましいわ。投手としては見習うべきなんだろうけど。ま、1億の高みで待つてるよ」

「黒鷲座パイセン1億行ってないっすよね？」

※黒鷲座の年棒は9500万です（第六回放送参照）。

「四捨五入すれば1億だろいい加減にしろ！」



「で、その使い道っすよね？ まー女の子と遊ぶのに結構ねだられるし。バッグとかネックレスとかに使う事も多かつたっすね」

「はー、遊び人！ 女の敵！ このチャラ男！」

「いやいや俺っちはいつだって真剣ですよ？ というか黒鷲座パイセンはそういう事無いんすか？ てつきりプロ野球選手ってそういうものだど……」

「お前プロ野球の事なんだと思ってんだよ」

おいやめろ。その曇りなき眼でこつちを見るんじゃない。こつちが惨めになってくるじゃないか。このままだどこちらがメンタルをやられそうなので話を転換することにした。

「はい、じゃあ僕の使い道について話していきましょうか」

「あ、逃げた！」

「黙らっしやい！ 司会の権限はこつちにあるんだからガタガタ言うんじゃないですよ全く。それで、僕もまあ契約金とかは確かに寄付したけどそれでもちよっとぐらいだからね？ だってドラフト4位なんて大して貰えないんだから。最近で言う大きな出費と言えば……ああそうそう、うちの実家の水回りがあんまり良くないらしくて。そこから辺の一新に使った感じですね。いやーこの年になるまで野球をやらせてもらったわけだから、少しくらい恩返ししないかね」

「さらっとファンからの好感度ブチ上げようとしてない？ 一人だけ抜け駆けしようたつてそうはいかすみパスタよ？」

「……ちえっ、ばれたか。あ、でもそれにお金を使ったのは本当の話で

すよ？　つてかिकासミパスタってなんだよ。後は、そうですね。家に安らぎが欲しいなーって思ったんで、そっち方面でそこそこ使いましたね。安眠まくら、アロマ、後は高音質の音楽プレーヤーとか」

寮から離れて暮らすようになってから4年目。そろそろ一人暮らしにも余裕が出来たころなので色々試してみていたのだ。家というものは心休まるどころだし、そうあるべきだと思う。だからそのために準備するのは思いの外楽しかった。

「へー、黒鷲座パイセン音楽とか聞くんすね。何聞くんすか？　EDMとか？」

「EDMって何？」

「ああ、そういうレベルね。なるほど」

「おい、その哀れむような眼をやめろ」

※EDMはエレクトロニック・ダンス・ミュージックの略です。主にクラブで使われる事が多いのだとか。

「まあ音楽の好みなんて人それぞれだよな」

「そういうこった。ではそろそろコマーシャルのお時間です！」

#8 part 3

「えーでは次のお便りに行ってまいりましょう。じゃあ海原、このお便りボックスの中から適当に一枚取っちゃって」

「ういーつす！ 不肖海原浪男！ 引かせてもらいマックス！」

両手をわきわきとさせながらお便りボックスに海原が手を突っ込む。んー、これか？ いやいやこれじゃないなど何やら呟きながら中身をシャッフルしていく。中身見えてんのかお前。

「早いところ引いてくれ。話す事無くなるから」

「いやいや、こういうのはしつかりと選んだ上で読んであげないと相手にも失礼っしょー！」

「透視でもしてんのかよ」

「そんな急かさしないで下さいよ。はい、じゃあこれ。ペンネーム』とある高校の主計科選手』から」

「……ん？ 何か聞き覚えがあると思ったら前にお便りを送ってくれた人みたいですね。熱心に放送を視聴いただき、ありがとうございますまーす」

「えーつと、話続けていいつすよね？ 『黒鷲座選手、海原選手こんにちは』。ちーつす、どうもこんにちはー！ 『お二人にそれぞれ質問があります。まずは海原選手。海原浪男選手の名前には「浪」という文字がありますが、もしかして戦艦三笠が好きなのでしょうか』」

「みかさ……？ みかさって何……？」

そこまで学力も歴史に関する興味も持ち合わせていない黒鷲座にとっては、聞いたこともない単語であった。それもそうだ。戦艦なんて大和くらいしか知らないのだから。

「あー、分かってない黒鷲座パイセンに分かりやすく説明すると。戦艦三笠っていうのは日露戦争で大活躍した戦艦の事っすね。あの東郷平八郎が乗っている絵が有名です。東郷平八郎繋がりでいえば、日清戦争で『浪速』艦長として勝利を収めた事も有名で、もしかするとこれの事を言ってるかもしれないっすね」

「えっ、怖ッ……ひよつとして海原ってミリオタなの？」

「いやいや、これくらいは高校で勉強した事そのままよ？ んな大した事じゃないっしょ！ えーつとそれで、名前がそういうものに関係しているかっつー話よね？ んー、多分その可能性は低いんじゃないかな。こういっちゃなんだけど、ウチの両親あんまり頭が良くないのよ。子供の名前に『ウェイブ』なんて付ける程度には」

「あ、そこ気にしてたんだ」

「俺たちは別に気にしなかったけど、結構名前でいじられる事も多かったから。つってもいじめられてたわけじゃないけど！ でもまあ子供の名前に付けるのはちよつと違う感じがするよね」

確かに……。浪男って字で書けば（ちよつと古臭そうなのは置いといて）一見普通の名前に見えるけど中身はかなりキラキラネームだから、海原があんまり快く思わないのも頷ける話である。子は親の背中を見て育つというが、海原はそれを反面教師にしてきたという事なのだろう。

「あ、だけど親が嫌いとかそんなんじゃないよ！ むしろいつも明るくて元氣貰えるつつーか、感謝している事もたくさんあるし！ ただ親が歴史好きだったとかそういう事は無かったと思うから、多分そういうのじゃないなってわけ！」

「とりあえずお前が両親大好きなのは伝わったよ」

「続きあるつすね。『好きな提督は誰ですか？』 あー、困っちゃったつすね。俺っちあんまり詳しくないからこれはつらみざわたけし！ メジャーな所しか分からないんでここは無難に東郷平八郎大先生にしちやいましょう！ はいじやあこの話は一旦終わり！ 次は何を隠そう黒鵜座パイセンへの質問つすよ、んじやバイブス上げてこー！ ウエーイ！」

「ウエーイ……他人について追及するときに限って人間って元氣になるよな。いやこれに関しては僕が言えたことじゃないとは思うんですけど」

「はいじやあ行ってみよー！ えーつと？ 『新球種の使い心地はどうですか？』 つつー事ですけど、え！？ なになに黒鵜座パイセンいつの間に新しい球種覚えちゃったの!？」

「あ、ばれた？ いやゝばれちゃったかゝ。本当は言いたくなかったけどなく。ばれちゃったら仕方がないなー」

黒鵜座は口ではそんな事を言いつつも顔をにやつかせている。それはまるで、いたずらがバレた時の子供のようだった。今の彼は言葉と表情が完全に矛盾している。

「あははっ、そんな事言ってるのにめちやくちや嬉しそうじゃん！」

「そろそろ(思うのも無理はない)よ。だってそれだけ熱心に見てくれてたってことでしょ？ そりゃあ感動するし、教えたくもなっちゃうよね」

「それで、いつから練習してたわけなんすか？ いやー黒鷲座パイセンも隅におけないなー！」

「そんな彼女が出来たみたいに言うなよ。話を戻しましょうか。えーっと、練習自体は昨シーズン途中から始めてたんですよね。今まではストレートとチェンジアップの組み合わせで何とかしてたんですけど、やっぱ決め球、つまりはウイニングショットが必要だなというのはひしひしと感じてまして。え？ お前にはもうストレートっていう立派な武器を持つてるだろって？ いやあ、あはは。ありがとうございます。ただそれだけじゃ心もとないですよ。特にこれを覚えようっていうのは無かったんですけど、落ちるような球が理想かなと思います。例えばフォークやスライダー、スプリットなんかですね。ただ最初はどれも上手くいかなくて、僕自身そこまで器用というわけではないので苦労しましたね」

「確かに、新しい球種を覚えるのって中々時間がかかっちゃうよね。それでバランスが崩れちゃった！ なんてケースもザラだし」

「そこでたどり着いたのがチェンジアップからの変化なんですよ。パームとチェンジアップの間って言えばいいんですかね。その名も『高速チェンジ』！ 握りはこんな感じですよ」

そう言つて黒鷲座は軽くボールを握って、その握りをカメラへと映す。

「コツはほどほどに脱力しながら上手く指から抜くことって感じですね。これを実戦で投げるようになったのは今シーズンからですけど、

その効果は抜群ですね。通常のチェンジアップよりも大きく変化するんで空振りも取れるし。僕って基本的に直球を狙われがちなので、よく振ってくれますよ。球速も一瞬ストリートと錯覚させられるんで覚えて良かったって感じですよ。それでもまだコントロールに難があるのは否めませんし、向上の余地はありますけどね」

「いいっすね高速チェンジ！俺っちにも教えてください、オナシヤス！」

「え、嫌だよ。だってこれは僕のアイデンティティになる（予定の）球だし。そう簡単には教えられないね」

「あ、そっすか。だったらいいっすわ」

「切り替え早ッ!? いやもうちよつとグイグイ来いよ！これだから最近の若者ってやつはすぐ諦めたがる！」

「え、じゃあ教えてくれるんすか」

「いやそういうわけじゃないけどさ……もうちよつと粘れよ。はい、ではここでCM入りまーす。次はお悩み相談室のコーナーでーす」

#8 part 4

『黒鷲座一先生のお悩み相談室』のコーナー！ それではやってまいりましょうと言いたい所ですが。言いたい所なんです……」

「ん、どうかしちやった系？」

「いや。また悩みとか無さそうな奴が来ちやったな」と

いきなり黒鷲座は頭を抱えていた。このコーナーが始まった当初の回（第五回参照）のゲストであった八家と同様、目の前にいる海原もこれといった悩みとは無縁そうな男なのだ。元々深く考えるようなタイプにはとても見えないし、人間関係でよくよと悩む姿など想像できない。

「あ、めっちゃ失礼な事考えてね？ そりや俺つちだつて悩む事の一つや二つくらいあるに決まってるでしょ、人間なんだから！」

「ふーん、例えばどんな？」

「今一番悩んでるのはあれっす！ 外野手の志村しむらさんとの付き合い方がよく分からない事っすね！」

「え、志村さんど？ そりやまた物好きいな。投手で志村さん好きな人ってそうそういないよ」

ここであんまり野球を見ないリスナーのために説明しよう！ 志村さんとは！ 今年でプロ11年目を迎えるベテラン外野手、志村光真しむらこうまの事である！ ブルーバーズに所属する日本人で唯一とあっていいほど安定して2桁本塁打が期待できる右の中距離打者であり、なおかつ毎年3割に近い打率を誇る好打者である。「ミスター



ブルーバース」の二つ名でファンにも親しまれている選手だ。今シーズンはここまで打率・288、本塁打4本を記録している。かといって成績を鼻にかける様子があるわけでもなく謙虚である事から、ファンだけでなく野手からの信頼度も高い。

……と、ここまででは良い点ばかり挙げてきたのだが。黒鷲座がこう言うのもちゃんと理由がある。問題はその守備である。まず志村はそこまで肥満気味の体ではない割に足が遅い。それも物凄く。多分保護者リレーに出ても普通のおっさんよりも少し速い程度のレベルである。それだけならまだいいのだが。さらに酷い事に守備力が小学生並みなのだ。本当に小学生の頃から野球をやってきたのか疑わしいレベルである。ちなみにファーストとサードとショートも守れる(自己申告)(守れるとは言っていない)が、まあその実力は見ずとも分かる。見なくても分かるから守るのはマジでやめろ下さい。そして極め付きには送球のコントロールが悪い。肩はそこそこだが、結構ばらつくし時折物凄い方向へと飛んでいくことがある。鈍足、守備下手、制球難。これの意味する事はつまり、投手陣の破滅である。

「そうそう、よくSNSで他の選手との2ショット写真上げてんだけどさあ。黒鷲座パイセンのもあるよ、見る？」

「え、マジ？ あ、ホントだ。そういや前写真撮ってくれて言ってきたな。そのためなのかよ。……っておい、盛りすぎだろこりゃ」

そのスマホに映る自分の姿に黒鷲座は思わず顔を歪めた。何か小顔になってるし、肌も実際よりも若干白い。自分のはずなのに、なんだか他人のような気がして気持ちが悪い。

「これくらい普通じゃないっすか？ 改めて見ると、ははっ、すげー仏頂面じゃん黒鷲座パイセン」

「そりやあ急に言ってきたからそうなるよ。っていかそうじゃねえ。何でそれが志村さんと繋がるんだよ」

「あ、その話ね。えーっとそれで他の選手にも色々かけ合って写真撮らせてSNSに上げさせてもらってるわけなんだけど。志村さんとだけまだ2ショットの写真が無いんだよね。なんてーの、避けられてるってカンジ？」

あー、何か察しがついた。そういう事か。はーん、あの小心者め。あの件をまだ引きずってるわけか。コメント欄も志村の名前が出た途端に盛り上がっている。志村はリアルでは前述の通りだが、ネット民にも人気がある。良くも悪くも話題に事欠かないというか、まあそんな感じの人だ。

「……多分それな、お前のプロ初登板で初勝利の権利を消したことを未だに気にしてるからだと思うぞ」

「デジマ？　んなちっちゃい事で俺っちがカリカリするような性格に見える!?　だとしたらめっちゃショックなんだけどー!」

「やめろやめろ、肩を揺らすな。あれはそういう人なの。周りがどう思おうと勝手に気にしてしまうような人なんだよ。それにしても……はあく、若手相手に何逃げてんだあの人は」

思い起こされるのはあの事件。ホームで迎えた試合で初登板初先発を果たした当時の海原は快調に投げ進んでいた。打線も大爆発とはいかないものの、早々に3点を援護し試合はブルーバース優勢。海原は5回を順調に投げ終え、理想的な試合展開に見えた。……そう、アレが起こるまでは。

6回に1点を返され、なおも1死一二塁のピンチ。マウンドには先

発からずつと投げ続けている海原。もう球数は100球へと達しようとしていた。そして相手は5番打者を迎える。外野は定位置、1点までは仕方がないという体制だ。そしてバッティングカウントから放たれた打球はレフトへ。そこを守っていたのが志村だ。打球はかなり伸びたが、球場が広いのもあって本塁打とはいかない。際どいがまだレフトフライの範囲だ。だがここで悲劇が起こる。足をもつれさせて転倒、ボールを取ろうと手を伸ばすも無情にそのままボールが落ちて転がっていった。これには次の打者に向けて準備していた海原も思わずロジンバッグを落としてしまうレベルである。センターの李がフォローするも二塁ランナーが余裕で生還。1塁ランナーも3塁へと滑り込んだ。

結果この一打が決め手となり、海原は降板。後を継いだ石清水も同点に留めるのが精一杯で、海原の初勝利の権利は泡と消えた。それ以来、きつと志村はその件を引きずっているのだろう。繊細な志村らしいと言えはらしいが。

「で、どうしたらいいと思います!? こういう時頼りになるのはコミュ強の黒鷲座パイセンくらいしかいないんすよ!」

「何て? まあお前が気にしてないって一言言つてやれば済む事なんだろうけど、まず状況のセッティングだよな。多分一対一で話そうとすると確実にあの人が逃げようとするから」

「え、逃げるんすか? 何で?」

「何でって、そりゃ志村さんが志村さんだからとしか言いようが無いな」

「追いかければよくない? あの人は遅いし」

「追いつめるのは逆効果だぞ。この前後逸した志村さんの事を追いかけてたら何て言ったと思う?。」

「何て言ったんすか?。」

『「一万円あげるんで許して下さい」だぞ。あの人の肝っ玉の小ささを舐めてちやいけない!」

「はー、それはまた重症で草生える!」

コメントでは「志村www」「うーん、これは志村!」なんて発言が流れているが、これが事実なんだから仕方がない。いやいい人なのよ? いい人なんだけどちよつと気が小さいというか周りからの視線を気にしすぎるところがあるのがキズなだけで。

「まあ時間あるんで続きは次のCMまたいでから考えましょう。それではCM入りまーす!」

#8 part5

「それではただ今より、『対志村逃亡阻止用作戦会議』を始める！」

「あつはは、なんか仰々しくてウケる。で、志村さんが逃げないようにする方法ですよね」

「そうそう、まず大事なのが必要以上に追いかけてまわさないこと。志村さんは小動物と同じくらい危機意識が高いから下手に刺激を与えるのはNGね」

「でも志村さんって目を合わせたらすぐに逸らすし、何か話そうと思っただらいつの間にか周りになくなってるし。それじゃあどうやって話せばいいんだって話になりますよね」

「誘い出す事自体は案外簡単なんですよ。あの人野手とは普通に仲がいいから、野手の誰かと結託すれば特定の場所に連れてくる事も可能っちゃ可能です。ただ会った瞬間に逃げに転ずるけど」

「そもそも気になってたけど、何で志村さんって移籍しなかったんだろ。確か数年前にFA権取ってたよね？ 守備でそこまで怯えるくらいならさあ、指名打者のある海洋リーグのチームに行くのも一つの手なんじゃね？ ちよつと年俵は高くなるかもしれないけど、あの人レベルの選手なら引く手あまただろうに」

「うん、それは僕も思ったんだけど。守備からリズムを作っていくタイプの選手っているじゃん？」

「え、まさか……」

「そうなの。志村さんはそういうタイプなんだよ。……あんまり良く

ない意味で。ミスした後で取り返すように打つからタチが悪い」

実際、守備で好プレーをすると打撃でも良い結果を残せる選手というのは多い。テンションがハイになっていると言えいいのか、その分丁度いい気分で行席に入ることができると言えるからだ。そんな選手が多くいる一方で、逆のパターンも存在する。守備でミスをした後に打つ選手だ。こういう選手はあまり多くないが、結構厄介である。自分のミスを自分で取り返す、という気持ちで粘り強く戦うからだ。志村は後者の最たる例である。外野手は記録にならないミスも意外に多いが、後逸などでエラーがつくこともある。そもそも後ろに誰もいないポジションである外野手がボールを落としたり、逸らしたりするなどというのは当たり前の話だが、その後の志村は怖い。エラーをした後の打率、何と4割。2割5分打てれば御の字、3割打てればいい選手と呼ばれるプロ野球の世界において、この数字は異質である。……そもそもあまり取り上げられないから意味がないのだが。

「あー、確かにエラーした後にはよく打ってるような……？　そういえば俺っちがプロ初先発で降板した後にホームランを打って気が」

「打ってた打ってた。投手に援護点をくれるっていう意味ではいい打者かもしれないけど、守備面のマイナスが多いんだよ。しかもエラーが付かないくらいのミスが。打球判断をミスったり前にチャージして後逸したり。だからまあ、投手の防御率だけが上がっていくんだよね。ただ志村さんが打線にいる事へのプラスとマイナスを示し合わせた結果、プラスの方が勝っているわけなんだけど。その分投手からの信頼は低いというか、正直僕個人の意見として後ろを守ってほしくないというか……早いとこ守備固めをしてほしいというか……」

「黒鷲座。パイセンは志村さんがこのチームに残留して正解だったと思うわけ？」

「おお、中々ハードな事を言うな前も。確かに守備はちよつとアレだけど、打撃面で言えばあの人より打てる日本人打者がいないからなあ。外野手の李選手、一塁手のドウリトル選手がまず結構打ってくれるわけだけど志村さんはその三番手だからね。足は遅いけど長打も結構打てるし、今のところは良かったというか残ってもらうしかなかったんじゃないかな。あと志村さん、このチームが好きだって言うてたし」

フリーエージェント

F A 権。一定以上試合に出場した選手のみが得られる、唯一と言っていい選手個人の意思で移籍できる権利。それは選手にとつて自分を売り出す絶好の機会だ。この権利を取得するために奮闘する選手も多いくらいである。一部例外はあるが、移籍するにしろしないにしろ選手の年俵は上がるケースがほとんどだ。現在所属している球団も、獲得に動き出す球団も他の球団にとられまいと良い条件を出したり高い年俵を提示するためである。そのため他球団に移籍する選手も少なくなき、オフシーズンにはファンが悲鳴を上げている様が見られる。

では志村の場合はどうだったのか。シーズン中にF A権の使い道を記者に質問された際には『今はまだシーズンを戦い抜くことに集中したい』と言葉を濁していた。そもそもシーズン中に『移籍したい』という選手は滅多にいないのだが。そしてシーズンを完走した後は、メディアに対して『少し考える時間が欲しい』と発言し、ネットでも『これは移籍か』と騒がれた。しかしオフシーズンとなつて一か月後会見を開く。内容は『F A権を行使した上での残留』という結論だった。一度行使すると再びの取得まで数年がかかる。つまり彼は、ブルースの選手として最後まで戦う事を決断したわけだ。その理由として彼が挙げたのはチームに対する愛情であった。

『やはりこのチームで、ブルースで最後までやらせていただきたいと思っています。今までここでお世話になった分、今度はここで残

せるものを残していききたいという考えです』

「へー、いい話じゃん。ひよつとして泣かせに来てる感じ？」

「僕が知るかよ……」

実のところ彼が残留を決めたのは、FAした選手の後を考えた際に移籍した選手の寿命が短いからという理由もあったらしいが、美談にしておきたいのでやめておく。

「それで呼び出すのは簡単なんすよね。後はどうするか……」

「真摯に向かえば普通に応えてくれると思いたいけどねえ。あの人肝っ玉が小さいから」

「あつ、そんな事言ったら志村さんがヒット打ちしましたよ。ここで……代走ですね。武留選手が代走という事はもうこのまま守備固めに入るつもりなんですかね」

「よし、じゃあちよつと行ってくるわ」

「えつと、どこへ？」

決心したようにすつと黒鷲座が立ち上がる。不思議そうにそれを見つめる海原をよそに、黒鷲座はドヤ顔で語り出した。

「決まってるでしょ、迎えに行くんだよ。志村さんを」

「え、こっち来るの？ 警戒してこないんじゃない？」

「その点は大丈夫、ヘイスタッフ！」



「はい、交代したら裏に向かう様に連絡しておきました！」

「抜かりなくて草」

「じゃあ行つてきまーす！ 楽しみにしとけよ海原！」

「あんま期待できないけど、りよ」

手を振りながら黒鵜座がカメラ外へと歩いていく。少しした後、黒鵜座と志村の会話が聞こえてきた。

「いやだから僕ら投手は別に怒ってるわけじゃないですつて」

「そんなはずはない！ 毎回ミスばかりの僕に痛い目を合わせに来たんだろ！」

「あつ、ちよつ、志村さん！ おいこら待て、ちよい！ 志村アアアア！！」

「あはは、注意点全部忘れてら。じゃあ次回予告です。次回のゲストは……未定？ 未定だそうです！ それじゃ次回をお楽しみにー」

その後、テレビ局公式のSNSにある写真がアップされた。笑顔の海原と、若干汗をかいている黒鵜座、そして真ん中に引きつった笑顔の志村の3ショットである。ネット上では「#志村光真」と話題になったとか何とか。良かったね！

## #9 part 1

「はい皆さんごきげんよう！ メインパーソナリティーの黒鷲座一です！ 本日もやってまいりましたブルペン放送局！ というわけで今回は第8……え、9回？ 9回だそうですね！ まあそんな細かい事は忘れて元気にやっていきましょう。さて今回のゲストは？ 今回のゲストは？」

耳を澄まして誰かの登場を待つ黒鷲座。ところが彼の問いに答えるものは誰もいない。後ろから仲次コーチが白けた目で見ていただけで、ブルペンにはキャッチャーと黒鷲座、そして仲次以外誰もいない。ドームの中だというのに冷たい風が吹いたような気がした。

「え、はい。あの、投手陣の皆さんに声をかけてはみたんですけどね。今回は総スカンを食らいました。今現在収録中なんですけど、誰もいません。もう一回言います。誰も！ いません！ んどうしてこうなった！ リスナーの皆さんには申し訳ない気持ちでいっぱいでございます」

黒鷲座が深々と頭を下げる。しかしそれも一瞬の内だった。ぼつと頭を上げてカメラに顔を近づける。

「で、すが！ 安心してください皆さん！ 転んだところでただでは起きないのがこの僕、黒鷲座一です！ ブルーバースのクローザーの力をそう舐めないで下さい。というわけで『パイが無いならケーキを食べればいいじゃない作戦』を執行して呼んできました！ それでは登場していただきましょう、『外野の魔術師』武留選手です！」

「えっへっへ。ちよいちよいそう言われると何か照れますやん。ども、外野手の武留です」

明らかに表情を崩しながらブルペンのドアを開けたのは、黒髪の坊主頭でくりつとした瞳が特徴的な青年である。身長はそこそこ高いがプロ野球選手、というには線が細く見える。

「つていうのはほとんどリップサービスなんですけどねリスナーの皆さん」

「ちよいちよいちよい!! ちよお待ってーな黒鷯座先輩、いくら何でも梯子外すんが早すぎやろーが! もうちよつとくらい上の景色を楽しんでもええやないですか!」

「上の景色つてなんだよ」

「えー、つてなわけだね。やって参りましょうと思うんですけどね」

「漫才かよ。そもそも何で仕切つてんだお前」

「え!?! この番組つて面白い野球選手を発掘するためのもの tochやうんですか!?!」

「うん、伝言ゲームでももうちよつと正確に伝わるぞ。誰から聞いたらそうなるんだ」

「八家さんですけど」

「あぁ〜……」

確かにあの人なら誤解を招く事を言いそうだ。彼の事だ、きっと君の個性を出す場だからね、思うままに羽を伸ばすがいいさ。何、大丈夫。大抵の事は一君がフォローしてくれるから」的な事を言ったんだろう。人任せにしゃがってあの人はもう……。

「しかあし！ 俺は諦めへんで！ ここで笑いを取って球団の人気を上げるんや！」

「あれ、何か気合入ってる？ いやあ協力的なのは助かるわ。久しぶりにまともな奴が来てくれたおかげでこつちも自由にやれるっついてうか」

「そんでもってサイン会でぎょうさんの行列作ってスターの仲間入りするんや！」

「ん？」

「トークショーでコアなファンか転売屋しか集まらないような思いはもう二度と……もう二度と……！」

「私怨混ざってるぞ。というか欲丸出しじゃん。いや別にいいんだけど」

「黒鷲座先輩みたいな目立つポジションの選手には分からへんでしようけど、死活問題なんですよ俺たち若手にとっては！」

「あーはいはい悪かったよ」

「さてはまともに聞いてへんなこの人。まあええですわ。それで何で俺をゲストに呼んだんですか。あ、答えなくて結構。当てて見せますわ。俺のお笑い精神にビビツと来たんでしょ！ そうやろ!？」

ドヤ顔で黒鷲座を指差す武留。その姿はさながら名探偵のよう。失礼、訂正しよう。迷・探偵のようであった。

「そういう事にしてもいいけど」

「ん〜？ なーんか引つかかる言い方ですなあ。怒りはしないですからちゃんと saying してくださいよ」

「だって暇そうだったし」

ぴくり、と一瞬だけ武留の肩が震えた。コメント欄には「あかんですよ！」とか「あく地雷を踏み抜く音〜」とか流れているが言ってしまったものは仕方ない。取り消すつもりもないのだけれど。

「あー、はい。なるほど。俺がまだ準レギュラーとして立場が微妙って言いたいわけやな！」

「理解力が高くて何より。話しやすくて助かるわ〜。はっはっは」

「……ふっ、あっはっはっは！」

「あっはっはっは!!」

実に和やかな空間である。見るがいい、黒鷲座も武留も満面の笑みを浮かべている。これ以上に素晴らしい景色があるだろうか、いやない。コメント上では「何この空間怖い」「不気味」という声が上がっているが、全く何を見ているのやら。

「はっはっは。っすー(息を吸い込む音)……っつて笑えるわけあるかいアホンダラアアア!!」

「あっ、スイッチ入った。一応これラジオで聞いている人いるから音量に気を付けようね、いやもう遅いか」

「笑ってられんのも今のうちだけやからな！ その内俺はビッグになる！ そうなったらこうはいかへんですからね！」

「そういうのは練習で僕からヒットを一本くらい打ってから言いなよ。それはそれとして今更ですが武留選手の説明に参りましょう。知らない人もいるかもしれないですからね」

「だーかーらー！ 一言！ 余計やねん黒鷲座先輩は！」

ふんすこと怒る武留をガン無視して黒鷲座は話を続ける。

「えー武留選手はですね。高校時代には主に投手として、いや時々外野も守ってたのかな？ まあいいや、投手として活躍されました。一時期二刀流とかで話題になってましたね。球が速い事が有名で、今でも球速は速いんだよね確か」

「最速は153km/hや！」

「わざわざ覚えてるあたり自慢に思っそう」

「!？」

「入団する時は二刀流をやるのか？ という噂になったんですが結局外野手一本で絞るといふ事で解決しまして。それから順調に二軍でステップアップを積み、3年目くらいからちよくちよく一軍の試合にも出場するようになりました」

「お、ええ話もやればできるやないですか！ もー最初からそう言えればいいのに！ 黒鷲座先輩のいけず！」

「まあ打撃成績はてんでダメなんですけどね」

「落とされた！　上げて落とされた今！」

「そして4年目となった昨シーズンは自己最多の63試合に出場。主に代走や守備固めなどスーパースブとしての地位を確立した感じですね。ウチには志村さんという守備の重りがいるから運がいいですね。武器は……身体能力の高さですね。何より肩が強い。今シーズンもまだ序盤ながら1回、いや2回くらい捕殺(投げてアウトにする事)を記録していますし」

「そもそも俺の肩は天下一品よ。俺の送球を見たファンが驚きのあまり顎が外れるくらい」

「弱点は調子に乗りやすい所ですかね」

「ちよいちよーい！　一回褒めたらけなさんといかん理由でもあんのかい！」

「それではCM入りまーす」

「無視すなー！」

#9 part 2

「というわけでやっていこうと思うんですがね。今回はあんまりお便りが来てないみたいです」

「それは俺に人気がないっちゅう事やんな!？」

「いや、そういうのじゃなくて。急に決まったでしょ？ だからリスナーの方も何を聞いたらいいか分かんなかったじゃないですかね」

「何だ。そげな事なら早く言ってくれなきや困りますっつて」

無遠慮に武留が黒鵜座の背中を叩く。海原といいこの球団の後輩たちは敬語というものをどこかに忘れ去ってしまったらしい。自分相手だから？ ……いやいや、そんな事はないだろう。多分。

「あんまり肩を叩くな。不敬であるぞ」

「何やねんそれ、宮内先輩の真似でつか？」

「まあとにかく何が言いたいのかというと、今回はお便りがないのでコメント欄での質問をメインに進めていくことになると思います。……え？ お便りあるの？ 誰から？ まあとりあえず読むとしましょうか、というわけで武留頼んだ！」

「よっしゃ！ 任せとき！ あれ、でもこれペンネームないんやけど。まあええか！ えーつと『目立つための方法を教えてください。……」

名古屋ブルーバース所属 とりのなごみ 鳥野和』

「和じゃねーか！ あのアホは……直接聞けやそんなもん！ こんな回りくどい事してるから地味なんだよ！」



鳥野和、彼らしくひっそりと参戦——。ほとんどのブルーバースファンなら名前くらいは知っていると思うが一応説明しておこう。鳥野和は右投げ右打ちの外野手。東京の有名大学出身、ブルーバースが誇るヒットメーカーにして黒鷲座の同級生である。とはいえ鳥野は大卒・黒鷲座は高卒であるため同期ではない。投手と野手。一見交わらない立場の二人だが、お互い下の名前で呼ぶくらいにはいい交友関係を築いている。

そんな彼の持ち味は鋭いバッティングと安定した守備。本職は外野手ながらサード、ショートも守れるいわゆるユーティリティープレイヤーで正確な送球に定評がある。加えて打撃も年々確実性を増し、昨シーズンは惜しくも3割にこそ到達しなかったものの李や志村に続く打率・298を記録した。特に右打ちの技術は群を抜いて上手く、チャンスに強い。ここぞという場面できっちり最低限以上の仕事をしてくれる縁の下の力持ちとも言うべき選手だ。

実力は十二分に兼ね備えている鳥野だが、弱点というか欠点もある。それは実力に人気釣り合っていないという事だ。鳥野はパワーはいささか不足気味だが、堅実に1点を取りに行くチーム方針と相性が良く昨シーズンから主に3番打者として打順の核を担っている。3番打者と言えば、何でも器用にこなせるオールラウンダーが多く人気が出やすい。はずなのだが何故か人気がでない。

「出場機会が比較的少ない俺はまだしも、レギュラーなのに人気がそこそこな鳥野先輩は何て言うか……不憫やなあ」

「おいやめろ、それ以上言うんじゃない。それ以上のデイスりは和にとって致命傷だぞ」

「傷が思ったより深いやん！ うーん、いいバッターやと思うんやけ

どなあ」

「この前のサイン会で和と一緒にになった時は、ほとんど最初僕の方に並んでましたね。僕のサインを受け取ってから和のところに並ぶ人が結構多くて、和の方にはあんまり行つてなかつた記憶があります。その時の和の嫉妬と悲しみの混じった表情が妙に印象に残ってるんですよ。人間あんな顔できるんだな〜つて」

「それ黒鷺座先輩のついでとして見られてへんか？」

「……」

「何とか言つたらどうなんや黒鷺座先輩！」

「いやだつてこの質問どう答えても和が傷つくじゃん。人をいじるのは好きだけど傷つけるのはポリシーに反するとか……答えなくても傷つけるかもなんだけど」

「まあとりあえず質問に答えるとしましょうや。俺はそこまで人気ないしそこら辺黒鷺座先輩に教えて欲しいなー、なんて。こんな可愛い可愛い後輩のお願いを聞いてあげると思つて？ な？ な？」

キラキラと目を輝かせながら武留が黒鷺座へと熱い視線を向ける。こういう視線は女子以外お断りなんだが。

「そんな事言われても大した事言えないぞ僕は。だつて人気が出たのは自然の事というか、自分から何か特別な事はしてないからな」

「人気選手はいつだつてそういう事言うんや！ 何かあるでしょ何か！」

「僕も最初はファンなんてほとんどいなかったからね。縁故採用なんて言われてたし、大して期待もされてなかったし。そこからここまで人気になれたのは運が良かったというか……逆に和はさあ、最初から首脳陣からの評価も高かったし1年目からそこそいい成績を残してきたわけでしょ？ 何でそこまでお膳立てされてるのに人気が出ないのか不思議なんだけど」

「やめたげてよおー！」

「もつと評価されてもいいと思うんですよね。あれだけきっちり仕事してくれる選手は和くらいしかないし。志村さんも打率はいいけどチャンスに弱いし、ブルーバーズ日本人野手であそこまで無難に色々こなしてくれる選手もいないはずなんですけど。なのでこれを聞いたファンの皆さん、ぜひとも鳥野和という選手を認知してください。そしてあわよくば応援してくださいー！」

「ひよつとして鳥野先輩はあれなんか？ 『いなくなつてから価値が分かるタイプの選手』っていう……」

「間違つてないかもな。バランスが整っている選手よりも一芸に特化した選手の方が評価されやすいっていうのは時代の常だし、今は長打力のある選手の方が人気が出やすいからな。和は器用貧乏っていうか……出来る事は多いんだけどそこまで突出した成績を残せていないのが可哀想だよな」

「はあ……これじゃあ人気が出る前に戦力外になつてまう。やだなもう」

「何言つてんだ。これからだろお前は。お前は外野守備が上手いし何より肩が強い。もうちよつと試合でそれを発揮できれば人気も出てくると思うけどな」

「あれっ、今褒めました!? 褒めましたよね今!」

「まあコアなファンしか集まらないかもしれないけど」

「そーやってすぐけなす! たまには素直に褒めたってええやろが!」

「お前は褒められて伸びるタイプじゃなくて叩かれて伸びるタイプだからな。多少厳しい環境で育てられたくらいが丁度いいんだよ」

「時代錯誤やー! 昭和脳やー! とりあえず厳しく育てとけばいいなんて傲慢で横暴やー!」

「やかましいわ。ぐだぐだ言っていないでお前はちゃんと練習すればいいの! ただでさえ安泰な立場じゃないんだからもつと色々磨かないといけないだろ!」

「え、じゃあ何で俺をここに呼んだんですか?」

「……」

「ちよい? ちよいちよーい? 無視はあかんで黒鷯座先輩!」

「……ここにお呼ばれされないくらいに活躍しろって事だ」

「上手い事言っってはぐらかそうったってそうはいかへんですからね!

大体黒鷯座先輩はなあ……」

「長くなりそうなんでCMのお時間です。それではCM後ごきげんよう!」

「逃げんなコラ！」

## #9 part 3

「あれこれくどくど……」

「……あのなあ。話長いのよ。言いたい事つてのは本来一行にまとまっていればそれでいいの。話を無駄に引き延ばすのは自分が端的に説明できないって証拠だからね？ あーあ、そんな事言ってるからCM明けちゃったよ。え、さっきのセリフも入ってた？ ……えーつとまあ、説明の仕方なんて人それぞれですよね」

「急に媚売るやないですか」

「ファンからの評価は大事だから。何か失言しちゃいけないって政治家みたいだな、いやでもあっち方面の人は割と……失礼。何でもありません。口が過ぎました。とにかくブルペン放送局、続けていきましょー！ じゃあコメントを読んで行きますよ。えー、『お二人の子供時代に好きだった球団を教えてください』と。これは面白い質問が来ましたね。じゃあ武留一言」

「中々波紋を呼びそうな話題やんなあ。あかんくないですかこれ」

「子供の頃の話だから大丈夫でしょ。……FAしたら話に尾ひれつくかもしれないけど、そこに移籍しなければいいだけの話だし」

「ねえさらっと退路塞ぐのやめてもらえます!? 俺はそうやな……まあ生まれが関西の方から子供のころからぎょうさん野球は見てましたけど。そういう意味で言えばやっぱ大阪オリオールズとか兵庫パンサーズですかね。うーんでもなあ……」

結論を一応出したというのに武留はまだ何かを悩んでいる様子だった。悩んでいるというよりは、口に出すべきか迷っている。

「何かあるわけ？」

「いやこれ言ってもええんか迷ってるんですよ。聞く相手にとっては批判に聞こえるかもしれないし」

「まあ所詮地方のラジオだしいいんじゃないの。あんまり過激じゃなければの話だけど」

「んーじゃあ、言いましょか。いやね、『隣の芝生は青く見える』って言葉あるじゃないですか。それと同じような感覚でして。現地にちよくちよく足を運んでいたから分かるんやけど、やっぱ野次が多いんすよね。怖い兄ちゃんがビール片手に叫び散らかす様を見たらちよつと引くでしょ？」

「それは確かに……子供からしたら嫌かな」

「でしょ？ トラウマってほどじゃないけど、そういうの見てたら怖くなつちやつて。どつちかと言えば他のチームの応援歌が好きだったし。ほら、埼玉ホワイトソックスとか千葉マリナーズとか応援歌凄いいこってるでしょ？ 一体になって応援している感じがするし。そこら辺に惹かれる事が多かったちゆうことですね」

「はあくん……なるほどね、入り口は一つじゃないってところか」

「で、黒鷲座先輩はどうなんですか」

「僕？ 僕はもうそりゃあブルーバース一筋ですよ。何たって地元ですからね！」

胸を張って堂々と答える黒鷲座。話の信憑性は話す人物によつて

引つ張られる事が多いが、果たして黒鷲座の場合はどうなのか。

「うわ何か胡散臭っ！ ……アレっ、先輩の子供の頃っていうと大体15年前くらいよな。あの頃のブルーバースって確か絶賛暗黒時代だったような気が……」

「うぐっ」

「あれ何か今言いました？」

「イヤナニモイツテナイデスヨ」

「何で片言？ まあええっすわ。それにあの時期って主力が次々とチームを離れていった時期やん？ あの頃からのファンって相当な忍耐強さが求められると思うんやけど」

「……」

確かにあの頃はあまり野球を見ていて面白くなかった。テレビを見ても負けているし、勝っている状態で中継が途切れても翌日のニュースでは何故か逆転されて負けている。そりゃあ心もすり減るというものだ。

「黒鷲座先輩？ おーい黒鷲座先輩？」

「まあでも、違うチームのファンになる気持ちも分からなくないよ？ だってほら、負けてばっかのチームのファンやってるのって結構鬱憤がたまるし。好きな選手も出ていくんだからもう悪循環だよな。まあだからこそこのチームに入りたいと思った人間がここにいますけすけども」



「今の文脈のどこに入団したいって要素があつたんや!？」

「漫画とかでよくあるじゃん、弱小チームに一人のスターが現れて優勝へと導く展開」

「弱小って言った！ 今弱小って言ったでこの人！」

「昔はそうだったんだから仕方ないでしょ。いや本当にね、当時のチームの成績を見れば分かってくれると思います。僕は意外とロマンチストだからね。そういうヒーローになりたかったんだよ」

「はえ〜」

「興味なさげ！ まあいいや、次の質問行きましょう。『武留選手はどうして選手名を変えたんですか？』という質問です。あ、これ僕も気になってたんですよ。元は名字の『湯川』だったよね。何でわざわざ変えたわけ？ デリケートな問題だったら答えなくてもいいけど」

「あ、ええですよ。別にそこまで深い意味はないというか大したもんじゃないんで。ファンの方ならご存知の通り、最初は『湯川』って本名でプレーさせていたいただいてたんですけども中々結果が出なくてですね」

「ぶつちやけ今も出てないでしょ」

「黙らっしやいこのバカチンがあ！ ごほん、えーまあそんなわけで不本意なシーズンを過ごしていたんですけど。このままじゃもう後がない、まともに爪痕も残せないままで終わってしまうと思いません。オフシーズンに占いに行ってみたんです」

「練習しろよ練習」

「いやほら、名前って結構大事やないですか。『名は体を表す』っていうことわざがあるみたいに。それで相談してみたら『名前を変える事から始めたらいんじゃないか』という風に提案されまして。あの、音声だと分かりづらいと思うんですけど前の本名が武士の『武』。この一文字だったわけやね。それがまあ、いつまでも強く居続けるという意味をこめて『武』に留学の『留』。これで今の名前になったっけうわけです。OKですか？」

「……まあ僕としては正直どうでもいいんだけど」

心底興味なさげに返事をする黒鷲座。事もあろうにこの男、鼻をほじっている。それだけに飽き足らずあくびをする始末である。

「本音と建前つてもんがあるでしょ！　せめて一瞬くらいは興味を示すそぶりくらい見せんかい！」

「だって読み方変わんないし……ねえ？　名前の呼び方とか順番が変わるんならまだしも、そうでもないから多分ファン目線でも『何が変わったん？』とか『変える意味あったん？』って思うでしょ」

「身も蓋もねえ！　この鬼！　悪魔！」

「はいはい。で、結果は出たわけ？　名前変えたんだからそれなりの結果は出さないとねえ」

「あ、乗ってくれるんや。えーつと名前変えたのが3年目の始めでしょ？　そこから二軍でも安定していい成績を残せるようになっていって……昨シーズンは最初に言った通り一軍での出場数はキャリア最多だったし、初本塁打も記録した。まあ75点つてところやな」

「やっぱ自己評価高いぞお前。そんなんでやっていけるか僕は心配だ  
なく」

「オカンか！」

「はい、じゃあCMです。CM明けは恒例のコーナーです」

## #9 part 4

「えー、では恒例のコーナーやっけてまいりませう！ 『黒鷲座一先生の  
く？ お悩み相談室ー！』」

「ようテンションもちますなあ。そういうところは素直に尊敬できます  
わ」

「全部まるっと素直に尊敬しやがれ生意気な後輩よ。まあいいでしょ  
う。僕は寛容な先輩なので許してしんぜよう。それはそれとして、早  
速悩みを聞かせてもらおうか！ ……大体予想はつくけども。どう  
せレギュラーが取りたいとか言い出すんでしょ？」

「へえっ!? なして分かるんですか!? さては……エスパーか何かや  
な！」

「はあ……しよーもな。もつとさあ、捻ったものを用意してくれよ。  
エンターテイナーとしての資質に欠けるなあ」

「んな芸人でもあるまいし！ え、扱いひどない？ 一応俺ゲストな  
んやろ？」

「ゲストである前に後輩だし」

「そういう事言ったら後輩から嫌われますで黒鷲座先輩」

「いいんだよ言うべき相手はちゃんと見極めてるから。お前みたいな  
のは底から這い上がってくるタイプ。海原みたいなのはノればノる  
ほど調子を出せるタイプ。はい、この差」

「鬼や！ 鬼がおる！ てか、そこまで言うからには何か対策とか用

「意してるんでしょね！」

「まあ水でも飲めよ」

「え、あ、ありがとうございます」

黒鷲座が武留へコップ一杯の透明な液体を差し出す。武留が喉に流したそれは、無味無臭。言うまでもなく中身は水だ。ブルペンでの飲み物は基本的に水である。スポーツドリンクもなくはない。

「……水やん」

「水ですが何か？ 旨い水があればエネルギーが湧く。そして何より、安い！」

「随分安上がりな事で。つてか水代とか考えなくてもいいのでは？」

「うるさいよ。昔からの習慣なんだから仕方ないでしょ」

「で、何かアドバイスくれはるんですか？」

「まず第一に、言うまでもなく僕は投手。武留は野手。そこは分かるよね？」

「……まあ」

「投手には投手でプロフェッショナル。野手には野手のプロフェッショナルがある。だから正直あんまり参考にならないというか、あんまりピンと来ないかもしれないけどそれでもいい？」

「いやもう本当に打撃コーチにも監督にも色々指導をもらった末でこ

れなんです！ 藁にもすがる思いなんです！」

「頼りないのは分かってるけど今から教えを乞う相手に藁とか言うな」

「あ、すみません。何とかお願いしやす！」

「そうは言ってもウチは外野陣の面子が固いからなあ……。センターには李選手がいるし、ライトは和でレフトに志村さんでしょ？ 正直言って穴がないよ」

「んな殺生な！」

「いやだって本当に外野手は基本固定だし仕方ないよね。ああたけるよ、しんでしまうとはなさけない」

「ちよい待って待ってまだ死んでないから！ バリバリ生きるから！ 生涯現役だから！」

「てへっ」

舌をペロリと出しながら黒鷲座は笑みを浮かべる。美少女とかならまだしも、アラサーのてへぺろ顔なんて誰が欲しいのだから。全く需要が分からない。

「軽めにジャブをかましたところで冗談はさておき、本題に移ろうか」

「ジャブ!? 右ストレートやろ今のは！ ストレートつちゆうかもはやただの全力直球やわ！」

「はいそこ五月蠅いよー。まあ自分に持ってないものをあれこれ悔や

むのも仕方ないし、今持っているものを考えよう！」

「持つてるもの？」

「じゃあシンキングタイム！ 武留が今持っているものはなーんだ！ リスナーの皆も考えてみて下さいね！ ①高い身体能力。②人並み外れたバツティングセンス。③スラッガーの素質。④残念ながら何も無い。どーれだっ！」

「えー、何やろな。うーん④は無いやろうし……どれも捨てがたいな」

「ごー、よん、さん、にー……」

「え、制限時間あんの!? うえー、じゃあここは③で！」

「ふむ。コメントでは①と④が多いみたいですね。では正解発表といきましよう」

「ごくり……」

「はい不正解。どれでもありません」

「クソ問題やんけ！ いくらなんでもずるいでそれは！ 汚い！ 黒鵜座先輩汚い！」

「ありがとう、最大の褒め言葉だ。というわけでリスナーの方も残念でした。え、一人だけ当てた人がいる？ やりますね、素質ありますよあなた」

「今のどこに素質とかあるんや！」

「いいか武留。常識に囚われてるようじゃまだだだぞ。真に優れている者とは壁を簡単にぶち破る事の出来る人間なのだ。一流になりたくば殻を壊さなくてはな」

「ひねくれ者がひねくれた事喋ってる。つてかそう言うからには黒鷲座先輩にはあるんやろな、殻をぶち破るような何かが！」

「……あるヨ」

「え、何その間。何で片言っばいの？」

「いやホント、ちゃんとあるヨ」

「あ、露骨に目え逸らした！ 人に対して言っておいて自分は無いのかよこの裏切り者！」

「まあ無いけど……例外っているもんじゃん？」

「それはそれとしてそろそろ教えてもらいませんかね。黒鷲座先輩が何を思っているのか」

「愚かな君に教えてしんぜよう」

「シンプルにうざい」

「武留の持っているものはズバリ、守備の上手さ。元々高校で投手やってただけあって並外れた肩の強さは勿論、足が速くて打球判断もいい。無理に突っ込んで逸らすケースも少ないし、ここぞという時は果敢にダイビングキャッチでチームの危機を救える、まさに『フェンス際の魔術師』とさえいいのか。まあ地味だけど」



「……褒めてるんよな？」

「投手としては本当に助かるんだよね。センターには李選手がいるから中々守る機会はないだろうけど、ライトやレフトの守備はもう80点よ」

「何とも言えん点数やな！　そこは100点とかとちやうんかい！」

「レフトなんて基本志村さんが守ってるからそれに比べたらもう軽快だのなんの。やっぱ野球は守備だよね！」

「お、おお……ありがとうございます」

「でもそれだけじゃレギュラーになるには足りない。打つ方でも、特に得点圏でどれくらい結果を残せるかが大事なんだよ。普段は大して打てないような選手でも、チャンスに強ければそれだけ好印象だしレギュラーとして使おうと思えるでしょ？」

「あれ、それって暗に俺が現実性の低い打者だって言っていないですか？」

「あ、バレた？　だって打率2割前半じゃあねえ……」

「うっ、痛いところ突きますなあ。だから教えてもらおうって言ってるやないですか」

「はい、じゃあ得点圏打率言ってみ？」

「1割9分です……」

「……終わったな。では解散！　かいさーん！」

「えっちよつと待つ、カメラさん!? カメラさん!? ?でしょマジで  
終わるの!?!」

#9 part5

「何かめっちゃCM長かった気がする!!」

「ん？ 何言ってるんの武留」

「いやいや黒鷲座先輩気づいてへんの!? 多分これかなり放置されたパターンやろ!」

「CMがちよつと長かったただけでしょ、そんな怒らなくても。多少シャワーの時間が長かったとかでも誰も気にしな……え、気にする？

あつそ、知るかそんなの」

「どういう情緒してんねん……」

吐き捨てるようなセリフやめんか——。武留が両腕を組んで天(井)を仰ぐ。彼の口からため息がこぼれた。

「はい、というわけで。終わったと思いました？ 残念！ 続くんだなこれが！ リスナーの皆様もう少しお付き合いいただけますかねいただけますねよっしややるぞ武留!」

「せめて相手が答える余地ぐらい残せや！ 嘘やろ俺もボケたいのに入る余地が無いんやけど!」

「んで何の話してたっけ」

「忘れとるやないかい！ 俺がどうやったら打てるかっちゆう話やろ!」

「あーそうだったけ。……何でそんな話を？」

「いや俺に聞かれましたも」

「まああれだよ。なるようになるって。あ、そうだ。今の内にヒーローインタビューの練習しとくか。出来る自分をイメージしておくのも大事でしょ」

「それって要するに捕らぬ狸の皮算用ってやつでは……」

———というかこれ漫才とかコントの導入みたいじゃないの。武留は訝しんだ。

「放送席、放送席！ ヒーローインタビューのお時間です！」

「あ、もう始まつとるんや」

「それでは登場していただきましょう。本日のヒーロー、ブル選手です！」

「武留<sup>たける</sup>や！ そこ間違えちやあかんやろ！ いやまあ確かに初見だと3割くらい間違えられるけども・やり直し！」

「本日のヒーロー、武留選手です！」

「いやーどうもどうも」

「今日は三打数無安打三打席連続三球三振という大活躍でしたね！」

「負のトリプルスリー！ 活躍させてくださいよ想像の話くらい！」

「注文が多いなあ。分かったよ。今日のホームラン、お見事でした」

「ありがとうございます」

「その心境はどんな感じだったのでしょうか」

「そうですね……最初は入るかと思ってなかったのです。風に乗ってくれて助かりました」

「あ、いやそうじゃなくて」

「いやそれ以外に何があるんですか」

「打たれた時のピッチャーの心境を教えてください」

「国語の問題か！ 知るかなもん！」

「ちなみにこの問題の得点配分は八割です」

「たっか！ ていうか得点配分ってなんやねん！ 完全に国語の問題になつとるやんけ！ 『この時の作者の心境を答えなさい』とか苦手やったわー、ちゃうねん！ っていうかそこまで言われると他の二割が気になるわー！」

「正解は『馬鹿なあ！ この黒鷲座がこんな雑魚なんぞにい！』です」

「打たれたのアンタかい！ っていうか思考が三下のそれじゃん！」

「はい、それはさておき」

「ほんで話題の拾い方が雑やねん。腹立つわー、なんなんこのインタビュアー」

「えー守備でもファインプレーが光りましたね。地面すれすれのボールをダイビングキャッチ。チームの危機を救いました」

「あ、はい。そうですね……あの時はがむしやらでしたね。もう何が何でもボールを取ってやろうと思っていたので。とにかく取れて良かったです」

「その結果地面に擦ってユニフォームと顔が大変な事になっておりますが」

「何が起こったん!? つーかどんなシチュエーション!?」

「ははは、なんか芸術的」

「いや何わろとんねん。ユニフォームはともかく顔は生まれつきや！」

「そのせいで僕が登板することになったんですがそのところどう思います?」

「とりあえずインタビュアーをクビになったらええと思います」

「では最後にファンに一言お願いします」

「えー、来てくださったファンの方。ありがとうございます! 今後  
も頑張っていくきますので、是非とも球場に足を運んでいただければ  
……」

「長い」

「え」

「長いよそれじゃ。お客さんが早く帰れるようにそこは巻きでいかな  
いと」

「ああ、はい。じゃあ『明日も勝つ!』とかですか?」

「それを実際にやって連敗したチームがどれだけあることか……」

「ええ。じゃあ何が良いっていうんですか」

「いやそれはこうやって」

そう言つて黒鷲座は両手でピースサインを作つてそれをくつつけ  
て見せる。

「ヴィクトリー!」

「いやVが二つくつついたらWやん。それはもう別物やん」

「はいというわけでありがとうございました武留選手。……ところで  
バットにコルクとかは」

「入つてねえんだよこの野郎。もうええわ」

「二ありがとうございました」

武留は頭を下げながら思う。途中からノツてたけど、これももう漫才  
とかコントだよな。というかお客さんがいないところでやってるか  
らウケてるかどうかも分からないんだけど。

「いや、あつたまつてきましたね」

「どこが？　　っていうか今の時間なんやったん？」

「まあ誤解の無いように言っておくと、あんまりここで専門的な話をしても視聴者からすれば盛り上がりがないだろうし。ここで明確に弱点を晒されて打てなくなるのも問題でしょ」

「うぐつ、そりやまあその通りですけども……」

「あ、でも今の時点でもそもそ打ててないからどっちでも意味ないか」

「やつかましいわ。結局それかい。でもそうなんよなく、打撃で進歩しないと一生このままぱつとしない立場のまま終わりそうやし」

「補足すると打撃に関しては光るものがないわけでもないから。映像は……ここでは出せないけど多分動画サイトに公式のが残ってるからそれを見てもらうのがいいですね、うん」

「？」

「えーつと去年の7月、神宮で打った第二号ホームランですね。結構内角厳しめに来たボールだったんですが、腕をたたんでライトポール際へ運んでいきました。僕は打者じゃないので的を射た指摘はできませんけどもね、力が抜けてないんですよ。それで回転を活かして上手く飛ばしますから入るんですよ。球場が広いこの球場じゃ入らないかもしれないですけど、充分にパンチ力はあるって事です」

「せ、先輩……！」

「伊達にチームメイトやってないからね。ちゃんと見てんよ僕も」



どうだと言わんばかりに黒鵜座が鼻を鳴らす。この男、好プレーにはしつかりと目を通す派である。対戦する予定のないチームメイトも例外とはならない。勿論試合でデータを活用するためでもあるが、本質は別のところにある。その理由は至ってシンプル、見ていて飽きないからである。

「……何かそこまで早口で言われると正直なところキモい」

「しばくぞお前。まあこの通りバカなのが欠点だけど、今後順調に進歩すれば芽が出ると思われるくらいには腐っても元トッププロスペクト。サインとかもらっておくなら今の内だと思えますよ」

「先着1000名ですー！」

「心配しなくてもそんなに来ないから安心しろ。えー、はい。そんな事を言っている内にそろそろお別れの時間ですね。次回のゲストは……えーっと3試合挟むので誰になるんでしょうかね。一度出たゲストかもしれないし、そうでないかもしれない。それでは次のホーム戦で会いましょうー！」

「さいならー！」

## 選手名鑑（コメント有）

名古屋ブルーバース

投手編

黒鷲座一

ブルーバースを支える快速リリーバー。驚異の奪三振力を誇るストリートは日本でもトップクラス。昨シーズンは途中から抑えに転向し、相手打線をシャットアウトした。今シーズンも守護神として9回を任せられる活躍を見せられるか。

黒鷲座のひとことコメント

まあ経験値はベテランにも負けない自信がありますから。今年もドンと任せてください。胃薬とかいららないですよ。

石清水緑郎

勝負所でのハートの強さが光るアンダーハンド。昨シーズンは火消しとしての役割を担い、キャリア最多の登板数を記録した。魅惑のシンカーで打者を手玉に取り、凡打の山を築く。

黒鷲座のひとことコメント

ピンチじゃないと満足できなくなったやべーやつ。普段から吹っ切れてくれればもつといい場面で投げさせてもらえと思うんだけどね。何というかスロースターターみたいなどころがあるのかな？ 僅差で投げる分勝ち星は貰えるからそれはそれでいいのかもね。

芝崎怜司

独特のフォームから球威あるボールを投げ込む中堅右腕。フォークとツーシームを織り交ぜたピッチングで打者を打ち取る。登板数は一時期より減りつつあるが、今シーズンもリリーフの一角としてチームを支える。

黒鷲座のひとことコメント

決め球は緑郎と同じシンカーだけど、それぞれ軌道が違うのが野球の面白いところだよ。でも今時スマホ持ってないとか珍しくない？ ちよつと普通の人とずれてるところがあるんだよ。そんなもって天然。あとゲームだと謎に強いんだよ。この人。

熱田炎也

最速160km/h近いストレートを投げ込む剛腕サウスポー。潜在能力の高さは誰もが認めているだけに、現状で満足するわけにはいかない。コントロールを改善し、目指すは夢の舞台の頂点。開花の時は近い。

黒鷲座のひとことコメント

褒めすぎでは？ いや確かに能力があるのは事実だけど、あいつ良い意味でも悪い意味でもバカだよ？ それはさておき、スタミナはあるんだからリリーフより先発向きではあるんだけど……急に制球が乱れるのがなあ。ハマれば中々打てないけどその頻度が少ない。

カービー・カイル(KK)

長身を活かした投げ下ろすような剛速球と縦に大きく割れるカーブで三振を奪う助っ人。昨シーズンはセットアッパーとしてチームの勝利を繋ぐ役割を果たした。60登板、防御率1点台を目標として掲げる今季は回またぎもいとわず。どれだけ三振を奪えるかも期待。

黒鷲座のひとことコメント

いい奴だよ。投手としての完成度も高いし、向上心めっちゃあるし、日本文化大好きだし。結構日本球界向きなのかなと思うけど。ただたまに変な言葉覚えるんだよ。大体が熱田の差し金なんだけど。

八家亘

現代野球では珍しいナツクルボールの使い手。ナツクルボールとスローボールで打者を幻惑する。好不調の波が分かれやすいが、ハマった時の爆発力はピカイチ。どれだけシーズン中で安定した成績を残せるかが課題。

黒鷗座のひとことコメント

リリーフとしては長いイニングを投げて欲しいというのが本音だけれども、ナツクルと心中するメンタルがあるのがえげつないというか。肝が据わっている感じがするよね。ラップに関してはあんまり期待しない方がいい、上達の見込みがない。

滑川削

かつてエースと呼ばれた好投手もベテランの域に。去年から中継ぎに転向しチームの為に粉骨碎身の精神で挑む。度重なる怪我もなんのその、不屈の精神で立ち上がるその姿はチームメイトやファンを鼓舞する。今シーズンこそは離脱なしで完走できるか。

黒鷗座のひとことコメント

怪我を繰り返しながらこの歳で未だに150km/h投げられるのは凄いと思う、ここは素直に。元エースなだけあって安定感もあるし、あとは怪我だけが課題だよな。……いやホントに。そこさえもつと良くなればと思うけど体質なのか？

左津陸真心

変則的なサイドスローから投げ込まれるスライダーが左打者からアウトをもぎとる。順調にリリーフとしてのキャリアを積み上げ、今や対左のワンポイントを任せられる立場に。仕事人として今シーズンも左打者から三振の山を積み上げる。

黒鷗座のひとことコメント

真心はまあ……真面目すぎたんだよ。いや染まりやすいっていう方が当てはまるかな。左キラーになれって言われて何でサイコキラーになろうとするかね。でも時々ちよつとヤバい言動があるのはあれも演技の一環なのか、それとも……？

名古屋ブルーバース 野手編

扇屋守

卓越したリードと熟練のキャッチングがウリのベテラン捕手。このごろはスタメンマスクを被る機会こそ激減したものの、抑え捕手として首脳陣からは強い信頼を得ている。後輩たちの教育もしつつ、胴上げ捕手を目指し今日も切磋琢磨する。

黒鷲座のひとことコメント

裏をかくのが上手いというか、読み合いではまだまだ引けをとらないね。キャッチングも上手いし、この人にいつも受けてもらえばいいなどは思うけどそうはいかないよねえ。地頭がいいから今後何やつでも大体うまくいきそう。

角井輝

強肩強打が武器の若手捕手。徐々にスタメンマスクを被る機会が増加し、打撃でも粗削りながら7本塁打と自慢の長打力の片鱗を見せた。今シーズンはさらに長打力を磨き、正捕手の座を手にした。

黒鷲座のひとことコメント

これからって感じ。打撃もムラがあるし、守備もたまにパスボールするし。でも間違いなく光るものは持つてるって扇谷さんも言ってたし、将来の正捕手候補である事は間違いだね。でもあんまりボールを受けてもらった事はないし、そこまでコミュニケーションを取ってるわけでもないのが気になる。

エリック・ドウリトル

規格外のパワーを持つ怪力助っ人。軽いバットを小枝のように振り回し長打を量産するその姿はまさに怪人。広いホーム球場にも負けず、昨シーズンはチームトップとなる27本塁打を放った。今シーズンは30本塁打・100打点を目標に掲げ、一心不乱にバットを振り抜く。

黒鷲座のひとことコメント

味方からすればいいバッター、投手としては嫌なバッター。高めに浮いた球絶対許さないマンだからコントロールミスができないのが怖い。その分空振りを取れると気持ちいいんだけど。一塁守備も無難にこなせるし、今年も四番打者として信頼してる。

美濃達也

安定した守備力でチームを支える職人。昨シーズンは下位打線としてしっかりと上位に繋げる技術を見せ、守備でも失策の少なさが群を抜いて秀でていることが評価され2年連続のゴールデングラブ賞を獲得した。契約更改後の会見では失策0を宣言し、万全の態勢でシーズンを迎える。

黒鷲座のひとことコメント

超いい人。同期だつて事で色々なところでお世話になってるし、守備でもたまに助けてもらつてる。ラジオにも出て欲しいけど、武留みたいに準レギュラーってわけじゃないし厳しいだろうなあ。打率はそこまで高くないけど謎にツーベースヒットが多いのが不思議。あれなんなんだろうね。

武留

優れた身体能力から繰り出される派手なプレーが特徴的な外野手。150km/hをコンスタントに投じられる鉄砲肩と積極果敢な守備でアウトをもぎとる。打撃に課題はあるものの、毎シーズン春秋

キャンプでは光るものを見せているだけに今年こそは飛躍したい。

#### 黒鷲座のひとことコメント

時々やらかすところ以外は優秀な外野手。とはいえチャレンジ精神が強いのは良い事ではあるから変わらなくてもいいとは思うね。打撃はね……警戒が薄い時はいい当たりを打っているみたいだから、その流れにのって調子を上げていければって感じ。ちなみに名字は湯川。実に面白い。

#### 李白諭<sup>リ・ベクジュ</sup>

韓国出身の国民的スピードスター。他の追隨を許さない積極的な盗塁スタイルで相手打者をドン底へ追いつめる。母国韓国では数々の最年少記録を打ち立てブルーバースへ移籍。一年目こそ悔しい結果に終わったが、今ではセンターとしての地位を確固たるものとし打率3割超えと35盗塁を記録した。

#### 黒鷲座のひとことコメント

速いよね、うん。とにかく速い。さっすが韓国の誇るスピードスター。塁上に立てば圧倒的な存在感があるから打者に集中しづらいし、ただでさえ打率は高いからねこの人。ただチャンスにあまり強くないのが欠点かな。辛い物大好きらしいけど僕は遠慮したい。

#### 志村光真

高いバットコントロール技術を武器にヒットを量産するベテラン外野手。毎年高いアベレージを記録する能力の高さは折り紙つき。鈍足の右打者ながら首位打者2度、最多安打3度を記録したバッティングは年齢を重ねるごとに深みをましてきた。まだまだ若者にレギュラーの座は譲らない。

#### 黒鷲座のひとことコメント





#10 part 1

「塩だろ」

「いやソースだろ舐めてんのかバカ」

「はあ？ 馬鹿って言ったやつが馬鹿なの知らないの？ 全くこれだから頭小学生は……」

「黒鵜座さん、マイクオンになってます！」

「えマジ？ こういう事前にもなかった？」

「ごほん、と咳ばらいを立てて黒鵜座が仕切り直す。

「というわけで皆さんごきげんよう！ 今夜もやってまいりました『ブルペン放送局』、司会はいつても変わらぬ安定感と安心感でおなじみ黒鵜座一でございませう！」

「どこに安心要素があるんだよ」

「うるっせえバーカ今こっちが話してる途中でしようが！ えー、というわけだね。記念すべき第十回にのこのこと来やがったのは今回が2回目になります、熱田炎也です」

「のこのこじゃねーし！ お前が言うから仕方なく来てやっただけだしー」

「えー、はい。男のツンデレほど醜いものはないですね。まあこの通り、というか前回のやりとりを見てもえれば僕ら二人の相性が悪い事はすぐわかると思います。なんてったって焼きそばの好みすら

合いませんからね」

「いやソースだから」

「ああん!?! まだ言うかこの野郎!?!」

二回目となればもうスタッフも慣れっこである。火花を散らす二人をもはやネタとしか見ていない。

「まあそれはそれとしてハガキを読んでまいりましょう。というわけで頼むぞ熱田」

「そうだな……どれにしーよーおーか」

「引き伸ばしてないでさっさと決めろ」

「おらよ!!」

「んな乱雑に取るなよ」

「じゃあどうしろってんだよ!」

「フツーに引けつつってんの! ……はい、ペンネーム『恋するビスケット』さんからいただきました。『私は今野球部の先輩に恋をしています。マネージャーとしてそこそこ話す機会はあるのですが、中々次の一步に踏み出せません。どうすれば進展するでしょうか、プロ野球選手としての観点から教えてください』……だそうです」

「来たか」

「ああ、来たな。ついにこの時が」

恋愛相談！ それは匿名性の高いラジオやテレビに度々出てくる定番である！ 経験豊富な大人からのアドバイスを求めてまだ尻の青い学生たちが送る恋のSOS！ それを前にしたこの二人はとうと。

「やばいやばいやばい！ おいコレ！ どーすんだコレ！ とんでもないモノ引きやがってお前！」

「おおお俺に言っつてんじゃねーよ！」

ものの見事に慌てふためいていた。

彼らはプロ野球選手である。幼いころから白球を追いかけ、その能力の高さを買われプロになった。学校生活では（例外はあるが）常に野球と共にあった彼らはちやほやこそされてはいた。しかし悲しいかな、恋愛経験など赤子同然に等しかった。

なぜなら野球部のエースをしていれば自然とモテるから！ 駆け引きもクソもあつたものではないのである！

「まあこの人が求めているのはアレですから。プロ野球選手としての観点ですから。……いやプロ野球選手にそんなこと求められても」

「露骨にトーンダウンしてんじゃねーよ。もう手っ取り早く告白しちゃえばよくねーか？」

「それが出来てたら苦労してないと思うけどな！ お前みたいに単純じゃねーから」

「は？ 俺はみっちり外堀から埋めるタイプだが？」

「知るかなもん」

「まあ安心しろ。今日のゲストが俺で良かったと言わせてやる！」

「何、自信あんの？ さっきまで僕と同じくらいうろたえてたくせに」

「任せとけ！ 何たって俺はあの大人気ラブコメ『くたばれ♡ロマンティック』を履修してるからなあ！」

「いやその漫画名前しか知らんけど……」

そう！ 男子は普段恋バナなどは修学旅行の夜くらいしかしない。だがしかし、興味が無いわけではないのである！ 男向けの恋愛漫画が人気になりやすい事がそれを証明している！

ちなみに恋川夢乃先生こいかわゆめのが描く『くたばれ♡ロマンティック』はどちらかと言うと少女向けの漫画である。単行本は現在10巻好評発売中である。お財布と相談して買おう！

「で、何を言うの？」

「そりゃあ、こうやって相手に壁ドンして……」

「おい待て。何で俺が相手なんだよ」

「相手ほかにいねーだろ」

「そうじゃなくてお前と仲良いつて思われるのが嫌なんだよ！」

「こんなんで盛り上がるファンなんていねーだろ」

「たまにいらんだよそういうタイプのファン！」

「まあいいや」

「よくねえ！」

「とにかくこうやって相手と距離を詰めて、ちよつとワイルドな感じを出して」

「お前かきあげるほどの毛量ねえだろ」

「やかましいわ。それで声を少し低めにして」

軽く咳ばらいをして熱田がささやくように喋る。

「私の男になれよ、……ってこんな感じだ。分かったか？」

「……ああうん。分かったよ、お前じゃ全くときめきもしないことが」

「死ね！」

「テメーが死ね！　っていうかこういうのはもつとオラオラ系とかき。少なくとも送ってくれたこの子は中々勇気が踏み出せないわけでしょ？　そういう子がいきなりそういう事しだしたらどう思うわけ？」

「怖いな！」

「うむ、正直でよろしい。そこで下手におべっかを使う奴は大抵ろくでもない奴だからな」

哀れ、熱田の策は一瞬にして瓦解した。

「じゃあさ、どうすんだよ。中々接点がありそうで無いぞマネー  
ジャーと部員って。しかも年上だろ？ だったら余計誘いづらいだ  
ろ」

「そこなんだよなあ……」

ここは二人とも頭を抱えるところである。関係の進展というのは  
簡単なようで難しい。そこに恋愛要素があるなら余計にだ。

「あーでも、共通点から探してみるのはいいかもしれないですね。ほ  
らー例えば好きな漫画とか音楽とか聞いて、そこから話題を広げてい  
けばね。会話ってキャッチボールですから、うん」

「そんな回りくどい事聞かなくても良くね？」

「あ？」

「いやだつてさ、二人とも野球部じゃん」

「……………」

「……………」

「あゝッッ!!」

見落としていた。いやこれを見落とすってどういうことだよ我な  
がら。

「うるさっ！」

「いや、今回ばかりはお前の言う通りだわ……。何かお前にシンプルな事を指摘されてことがすごい癪に障るけど。そうだよ野球見に来ればいーじゃん！ 寮生活とかだったらまた話は変わるだろうけど！」

「なら俺の登板する試合を見に来い！」

「それは先発に戻ってから言うべき台詞だろ。あ、でも彼が先発に戻る時は先輩がもう引退しちゃってる可能性があるんで早めに来ることをお勧めします」

「おい。おい」

「いやーでもウチのチームって強いには強いけど試合の盛り上がり欠けるところあるからなあ。まあもし、困る事があったなら選手コラボメニユーでも頼んで楽しんでください。それこそね、えー僕プロデューズのかき氷とかいいんじゃないかと思えます！ それではCMのお時間です！」

「お前だけさらっと宣伝すんな」

#10 part 2

『黒鷲座一のブルペン放送局』く！ いやー言ってみたかったんだよねこういうタイトルコール！ えーというわけでね、次行きましよう次」

「また恋愛相談とかだったららずっこけるぞ」

「なんだそのしよーもない脅迫。勝手にずっこけてろって話ですよねえ皆さん！ まあ大丈夫ですよ、ここのリスナーは皆『分かってる』人たちですから。……特にこれといった根拠はないけどね」

そんな事を平然と口に出す黒鷲座だが、実際根拠は無い。思い付きをそのままべらべらと口走っているだけだ。

「目えそらすな」

「というわけで続いているお使いり！ えーペンネーム『玉子王子たまごおうじ』さんからですね。『おうじおうじ』って読むところでしたよ。プロ野球選手に滑舌求めてどうするんですか。そんな話はとりあえず一旦置いといて、ハガキの中身ですね。『プロ野球選手が髪を染めていたり伸ばしたり、チャラチャラした金色のネックレスを付けている事について黒鷲座選手、また熱田選手はどうお考えなのでしょう。ご意見聞かせていただけると幸いです。よろしくお願いします』だそうです。……なんか今日の僕らに対する風当たり強くない？」

「二件目が恋愛相談で、二件目が説教か」

「説教って言うなよ！ いや否定はしないけどな！ うーん……これどう答えるのが正解なんだ？ っていうか僕ら髪長い？」



黒鷲座がいじいじと前髪を指で撫で始める。熱田も熱田で前髪を掻き上げていることから、矛先が自分に向かっているか不安なのだ。

「普通じゃね？」

「だよね安心した！　ちなみに熱田の髪は赤いですけど地毛です。でも食べたなら唐辛子みたいに辛そうですね」

「何で味覚の話になるんだよ」

「さて、どう説明したものか……。一言で表すのなら『反動』ってところなんでしようね」

「反動？」

「ほら、僕ら高卒だから大学とかの決まりはよく分からないけど高校の野球部って結構厳しいじゃないですか。スポーツ刈りとか坊主頭にしろってところが未だに多いからそういう経験を分かってくれる人そこそこいるんじゃないかと思うんですけど。するとどうなるか、はい答えろ熱田！」

「……まあ伸ばせる時に伸ばしたいと思うわな」

「そういうことなんですよね。大学やプロに入っている程度自由に伸ばしたり染めたりする人が多い、これがからくりってわけです」

「アクセサリーの話はどうなんだよ」

「ん——、まあ皆光るものが好きなんじゃない？　知らんけど」

「それでいいのか」

「あ、これだと納得しないか。えーっとじゃあ自分なりに解釈するなら、の話ですけど。ナメられないようにって言うのもあるんじゃないですかね」

「プロ野球選手の事ヤンキーだと思ってるのかお前は」

「いやほんとほんと。体感7割くらいはそんな人なんじゃないですかね。いやだつて考えてみるよ、社会人ってただでさえ身なりをすごい見られるでしょ？ で、プロ野球選手ってただでさえ人の注目を浴びるだろ？ プライベートでもファンに見つかったら『サインください！』とか言われるでしょ？ そんな時にダサイファクションしてみ？死ぬぞ？」

「んな事ごときで人が死ぬかよ」

「社会的な話だよ！ そういうキャラなら別にいいけどさ、違うだろ？ いや違わねえか」

「否定しろよそこは！」

「だから大事なんですよ見た目は。で、プラスアルファで後輩にナメられない。これも大事な要素なんですなまた。どんだけいい成績を残していてもやつすいブランドものを身につけてたら、『うわあ……この先輩みたいにはなりたくねえな』って思われんのよ。それに引きかえ価値のあるものを身につけるとどうなるか。返ってくるのはリスペクトだよ。『あの先輩かっけえな』ってなるわけでしょ？ そしたら若手のモチベも上がってチームにとって得になるのよ」

「……まあ言いてえ事は分かったがよ。それってお前の経験談なのか

「？」

「え？ 違うけど？」

「は？」

「これ全部勝手な妄想。一年先の未来も危うかった若手時代の僕がそんな事気にしてる暇なかったし」

「クソが!! じゃあ説得力全くねえじゃねえか! え、さっきの話は何? お前ちよつとそれは……キモいぞ」

「キモかねえよ!! 色々とアンテナ張って勘ぐるのは当たり前前の話だろうが! まあ少なくとも? 僕はお前よりもファツションのセンスあるけどな?」

「は？」

「あ?? 服に『焼肉定食』なんて書いてある奴に負けるわけがないだけど?」

「じゃあコメントで聞いてみりやいい話だよなあ! ファンの生の声ってやつを!」

「え、いやないない。やる前からもうこっちの勝ちですから。マイナスとプラスくらい差があるから」

「なんだよビビってんのか黒鷲座さんよお!」

「……ビビるわけねだろ! ああ聞いてやろうじゃねえかこの野郎! というわけで皆さんどっちのファツションの方がセンスがあるか

コメントお願いします！」

黒鶉座の発言を皮切りにコメントが少しずつ活発になり始めていく。

『黒鶉座かなあ』

『にわかには黒鶉座。玄人が選ぶのは熱田だから』

「お、良い感じに拮抗してるんじゃないの？ まあ僕の方が優勢ですけどね！……ん??」

『黒鶉座はちよつと自信とセンスが釣り合っていないからなあ。中途半端な奴ってコメントしづれえ。その点熱田はネタに振り切ってるからいじりやすいよね』

『それな』

『何でちよつと違和感感じてたか分かったわ、サンクス』

そのコメントに共感する声の流れっていく。残酷な事に天才と馬鹿は紙一重であるように、馬鹿と芸術もまた紙一重なのである。ならば振り切れた方が有利というのもまた世の常なのである(知らんけど)。

「……………え、待って焼肉定食に負けるの僕？」

「んだはははは!! 見たか俺のポテンシャル!!」

「お前ポテンシャル意外強みねえだろ……。ダメだこれ以上言い返せねえ。うわー、なんかショック」

「そこまでショック受けてんじやねえよ！」

「ちよつと立ち直れそうにないからここでCMのお時間です……」

「おいー！」

#10 part 3

「試合は現在ブルーバーズが志村選手のタイムリーツーベースで2点を先制して4回の表、2対0、先発の那須選手が相変わらずの安定感でお送りしておりますブルペン放送局。えーまあ、本日も、ね。那須さんは流石といったところだと思いますが。お前の出番無さそうだぞ熱田」

「つるっせーな分かつとるわんな事。不思議なんだけど、久里さんひさと（※本名、那須久里）ってあんま炎上するイメージねーよな。別に直球が早いわけでも必殺の決め球があるわけでもないのに」

「そりゃ別にスピードガンを競うコンテストじゃないし。よく言われるでしょ、『投手は総合力』って。那須さんは影薄いけど曲がりなりに投手大国のウチの開幕投手だから。細かく丁寧ていねいに四隅に投げられるのがあの人の良さってわけですよ皆さん。あんまり影薄いとか言わないであげてくださいね。可哀想ですから」

「言い出したのテーマだろうが」

「まあいいじゃん過去の事は別に」

「数秒前じゃねーか！」

「えー、まあそんな事を口にしたところですね。次の質問参りましょうカモン！ はい、ではペンネーム『X』さんから頂きましたこちらの質問。『黒鷲座選手、ゲストの方どうもこんばんは。私は今度球場に試合を見に行く予定なのですが、誰に注目して見るのが良いでしょうか。プロ野球選手ならではの観点で教えてください』、という事ですね。んーまあ確かに！ 誰に注目するかって結構大事ですよ。実際球場に足を運んでいただいても目移りしている内にあつと

いう間に試合が終わっちゃいますから。ウチなんかは特に」

「やっぱり見てもらうべきは投手だろ！ 守りの基本、誰もが注目するスター！ そして俺！」

自信満々に胸を張る熱田に対し、黒鷲座は嘲笑を含んだ息を吐く。

「いや何？ そこまで考えてたの？ そりゃ投手って注目も集まるけどさ。ダメだった時辛いよ？ だから僕はあんまりおススメはしないな。それにさ」

「それに？」

「大体お前が出てくる時ってあんまりプレッシャーじゃないビハインドか大量差じゃん？」

「だから俺は先発志望だからな！！ 決める時はバシッと決めるから！」

「ああそう、まあ期待しとくよ。少しだけな。……で何の話でしたっけ。ああそうそう、誰に注目するのがいいかって話でしたよね。んーじゃあまあ自球団と他球団、それぞれ一人ずつくらい代表を挙げていきましようか。すいませんパネルとペンもらえますか」

スタッフが持ってきた四つのまっさらなパネルとペンを二人が受け取ると、それぞれ筆を走らせていく。そうして書くこと数分後。

「書けた？ んじゃあ発表していきますか……。まず自球団の選手からですね。セーのっ、ドン！！」

黒鷲座と熱田がパネルをひっくり返す。黒鷲座のパネルには『武

留』、そして熱田のパネルには珍妙なイラスト、具体的に言えば小学生の書く似顔絵のような髪をした謎の男の顔と共に『北きた駿一郎しゅんいちろう』と書かれている。

「はい、というわけですね。僕が選んだのが武留選手で、熱田が選んだのが北……え、あの聞いていい？ 何これ。誰？ 北君の親父さん？」

「あ？ 何でんな回りくどいもん書くんだよ。北本人に決まってるろ」

「いや北君こんなじゃねえよ！ 禿げてっし！ つーか鼻ねーじやん！ どこ向いてるか全然分かんねーし！ ……はあ、お前画伯の才能あるよ。悪い意味で。あれだな、そういう番組に出られるといいな。これをきっかけに」

「おい、何故そんな同情したような視線を送るんだ」

「まあいいや、で、何で北君を選んだの？ 大体想像はつくけど」

「そりゃあ勿論ボールの速さよ！ まだ21なのに160km/h投げれるからなあいつ！ そんなでもって鋭く落ちるスプリット、あれを投げられちゃあ打者はもうきりきり舞いよー！」

熱田はまるで自分の事かのように鼻高々と語り出す。その表情からは子供さながらの無邪気さを感じさせられるものだった。

「ふーんなるほどねえ。やっぱ『滑川チルドレン』(※#6 part 2参照) 同士通じるものがあるって感じかねえ。実際どうなの、仲良いの？」



「おう！ あいつにスプリットの握りをアドバイスしたのは俺だからな！」

「あーそう。じゃ抜かれてんじゃん。大丈夫？」

「へっ、俺にはチェンジアップもスライダーもあるからな！ 別に……別に抜かれてとか、そういうのねーし。全然平気だし」

熱田の声が少しづつすぼんでいく。割と本人もそういう所は気にしていたらしい。言うんじゃなかったかな、と黒鷲座が熱田から視線を逸らした。

熱田は割と繊細な人間だ。不遜な態度を取っているように思えて、実は周りの人間の目を気にしやすい。故にドラフト一位で入団した焦りもあるのだろう。そういう所が一人前の投手として独り立ちできない理由なのかもしれない。

「あー、今のはこっちが悪かったよ。いいんじゃねーのお前はお前で。三振取れるのがお前の魅力だし」

「ふん、俺より奪三振率高いお前にはそれを言われたくねーな」

「んだと人がせつかく励ましてやろうつてのに。もういいや、話進めましよ。僕が注目してほしいのは武留選手ですね。理由、肩が強いから。以上」

「もつと話広げろよ。会話のキャッチボール下手くそか」

「つつてもそれくらいしか……、あーそうかキャッチボールね。キャッチボールとか見るといいと思いますよ。軌道が違いますから。他の野手の人ってこう、ボールが多少山なりの軌道を描くものなんで

すけど。彼はそうじゃなくてかなり真っ直ぐなんですよ。低く落ちづらい軌道で相手のグラブを正確に捉える。ああいうの見てたらやっぱ元投手なんだなって思わされますね」

「速球なら」

「速球なら負けてないとか言うなよ熱田。面倒だから。おっと、そろそろCMのお時間ですね。というわけでもう半分は次に回しましょう。それでは一旦さようならー！」

## 番外編：ブルーバースのシヨート事情

「ブルーバース」激戦区のシヨートを制するのは？ 候補に挙がる“3人”の内野手（3月25日の記事より）

昨年優勝した名古屋ブルーバース。その裏で選手同士の熱い正ポジション争いに今年も注目が集まっている。中でも最も激戦が予想されるのは守備の華とも呼ばれるシヨートだ。現役時代シヨートとして名を轟かせた金子監督の目は厳しく、昨秋キャンプでポジションの白紙を宣言。最多出場みなみかせとおるの南風透（31＝沖縄大海大）をはじめとした各選手に対して「フラットにやっていく。実績どうこうではなく、今の調子や実力で判断していくつもりです」と口にした。

外野やには実績と実力共に兼ね備えた選手がそろっているものの、やはりセンターラインの固定は急務と言えよう。オープン戦では二遊間を様々な選手でローテーションしており、若手・中堅・ベテラン関係なく横一線の争いを続けている。

正シヨートとしてのポジションを手にするのは誰か。候補として挙げられる3人の内野手にクローズアップしていく。

### 【勝利を運ぶ南風 南風透選手】

第一候補に挙がるのはやはり昨季シヨートとして最多出場を果たした南風透選手だろう。プロ入りして10年、そのバッティングは円熟味を増している。昨季は右の中距離砲として打率・244ながら7本塁打を記録した。左投手からは、292と打ちこみ持ち味をアピールした。また守備でも安定感を見せ、守りのブルーバースとして役割を全うしていた。

しかし満足はせず、「この年齢、このポジションとしては物足りない成績。もつと自分が引つ張っていく選手になつていけないといけない」と悔しさをにじませた。「左殺し」の名を返上し不動のレギュラーとなれるか。

【勝負強さ光る西の若き仕事人

にしきどよしき  
西木戸吉喜選手】

こちらも昨季までの立場を脱したい選手だ。西木戸吉喜(25 〓 帝都広島高) 選手は主に代打として出場し、得点圏打率・302を記録した。特に終盤の重要な場面で起用され、去年の6月21日の交流戦では自信2度目となるサヨナラ本塁打を記録。少ない打席ながらも首脳陣に抜群のインパクトを残したシーズンだった。

自主トレではOBのショートからマンツーマンで指導を受け、課題としている守備力を磨いた。「誰が相手だろうと勝つくらいの気持ちでないといけない。もつと打席に立って自分の実力を証明したい」と強気の姿勢を見せている。

【東の宮の守備職人

みやひがしなつき  
宮東夏樹選手】

守備力でアピールしていきたいのは今年社会人卒3年目を迎える宮東夏樹(24 〓 虎ノ門精工) 選手だ。抜群の身体能力から繰り出されるダイナミックな守備を武器として存在感をみせた。代走、守備固め中心ながら金子監督からは高い信頼を置かれている。課題の打撃を克服すれば、より深い信頼を置かれる可能性も十分にありうる。

自主トレでは同チームの鳥野和選手に師事。昨季は打率・220、2本塁打に終わっただけにバットコントロール技術での進化を目指す。「これくらいの選手に収まるつもりは全くない。数年後でもな

く、今レギュラーを奪えなければダメだという思いでやっていく」とライバル心を燃やす。

日本一に燃える名古屋ブルーバース。激しいポジション争いから頭一つ抜きんでるのは王道か、ダークホースか。これからの試合にも注目したい。

#10 part 4

「ここでおひとつ、アンケートみたいなものですね。そう、次回誰を読んでほしいかっていうアンケートを取ってます。よろしければ是非ご投票をお願いします。というところで話を戻しましょう。えー前は自球団のイチオシ選手は誰かというだったんですけどね」

「俺が北でお前が武留だったよな」

「そうそう。そんでもって次は他球団ですね。……」

「おい、どうした」

「いやあ、ねえ?」

熱田が隣を覗くと、そこにははしたり顔で目をぱちぱちと開閉する黒鵜座の顔があった。その表情に熱田の胸からはなんとも言えない不快感がせりあがってくる。

「その顔うざいからやめろ! てか言いたい事あるなら言えやタコ!」

「まあ皆さんの言いたい事は分かりますよ。『他球団の選手のことなんてどうでもいいからブルーバースの話しろや』ってね。でもしかし! しかしね! 僕はあえて彼らの話をします!」

掌を突きだし仰々しくリアクションを取る黒鵜座。まるで演説家を気取ったかのような喋り方である。残念ながら熱田の頭に具体的な演説家の名前は上がってこなかったが、腹が立つ。それだけは理解できた。

「あえて言いましよう！ 他球団に推しの選手を作らないファンはまだまだヒヨッコであるよ！ ブルーバースだけに！ ……ブルーバースだけに！」

「やかましいわ。今思いついたただけだろそれ」

「というわけでドーン!! 僕のおすすめる選手は東京タイタンスの二塁手、ハロルド・マクドナルド選手です！」

「……改めて聞くとやっぱドが多いな」

「なんでそこに注目すんだよ。えーというわけでマクドナルド選手なんですけどね、大リーグでも二塁を守っていた実績の通り守備が上手いんですね。ちよつと日本の選手とは違うスタイルの守備と綺麗なハンドリング技術。これだけでもう見る価値ありますね」

ハロルド・マクドナルド選手。今年から日本でプレーする新助っ人の一人である。彼の持ち味はなんとと言ってもダイナミックな守備だ。足は速くないものの一歩目が早く、地肩が強いためかなり広い範囲をカバーできる。

「まあ肩は流石に強いよな。座った姿勢で投げるのとかオープン戦で見た事あるし」

「そうそう。そんなもって本人が取材で答えてた『型にはまらない守備』。これは見てて楽しいですよ。右手でボールを掴んで投げたり、グラブトスだったりで華のある選手だなと僕は思いました」

守備の上手さで言えばウチの美濃さんだって負けてないんですけどね。とこぼして黒鷲座は水を口にする。そもそもブルーバースの正二塁手にして去年のゴールデングラブ（略してGG）賞受賞者であ

る美濃達也とマクドナルドではスタイルが違うために比較は難しいが、今のところ美濃はエラーの数が0。対してマクドナルドは2つエラーをしている。

と、数値で決まるのなら（シーズンがまだ始まったばかりとはいえ）美濃が有利なのだが。問題はGG賞選考の基準である。基本的に記者による投票で受賞者が選出されるために、印象が強い方が有利となる。かつてGG賞を取れなかったとある遊撃手が言っていた「打てばいいんでしょ、打てば」という言葉が体現するように、打撃の成績如何で左右される場合もあるというわけだが。今後の行方は神のみぞ知るといったところだろう。

ちなみに補足までに書いておくと、美濃の成績は現在打率・250、0本塁打、7打点。マクドナルドの成績は打率・232ながら本塁打2本、6打点である。若干マクドナルドの方が打席数が少ない。

「それはそれとして、打撃は今のところ未知数じゃないか？ 今のところ大暴れとかはしてないし」

「良くも悪くも外国人打者って感じがするな。速いボールに対してはかなり強いけど低めに落ちる変化球には弱い。攻め方は一貫しているけどいいと思うけど、中途半端に攻めたら逆にこっちが手痛い一発を浴びる。いやー、投手ってのは大変だよね。一球で結果が出るんだから」

「やっぱパワーはあるし置くならクリーンナップか？」

「僕的には6番打者がいいと思うね。クリーンナップにわざわざ置くほどではないと思うし、ああいう振り回してくるバッターが下位になると打線の厚みが増してくる」



でも他にクリーンナップ候補がいらないならいいんじゃない、別に5番とかにおいても。そう言って黒鷲座は締めくくる。これはあくまでも自分が監督になったら、と仮定としての話である。加えてタイタズは恐らくそこまで余裕というか層の厚みがない。その証拠に今までの出場はほとんど5番での起用となっている。

「ふーん……」

「あ、お前みたいな直球バカとは恐らく相性悪いから気を付けろよ。空振り取れる変化球ないときついぞ」

「はあ!? 直球バカっていったらテメーも同じだろうがよ!」

「違いますー、僕はストレートが一番空振りを取りやすいから多く投げてるだけですー」

「へっ、お前まだあの人の言いつけ通り縛りプレーみたいな真似してんのかよ」

「……あのな、僕の場合はこれが100%なの。高速チェンジを覚えるのだって苦労したし、そもそも器用な方じゃないんだよ。先天的に。っつかお前もいい加減カーブをマスターしろよ。今のカーブはあれだぞ、尻すぼみへっぽこしよんべんボールだぞ」

「いちいち悪口がなげーんだよハゲ!!」

「というわけで次は熱田の発表です! それではCM!」

#10 part 5

「そろそろ試合も終盤に近付いてきましたね。順調に那須さんが抑えて6回の裏、6―1でブルーバースがリードしております。球数的にも次の回で降板でしょうね。そろそろ僕らも肩を作り始めるころなのですが、本日は僕、お休みの予定をいただいております。まあこの前まで3連投だったんで、妥当ですよね」

「このままいけば8、9回に誰かが回またぎが理想だろうな。じゃあ俺の出番を作るためにも、さっさと発表するか！ とうわけで俺のイチオシ選手は……こいつ！ 広島レッズの内野手、たいらあおし平青司だ！」

「お、いいじゃん平か」

「いいだろ!?! な!?! 分かるだろ!?!」

「そうそう、僕どっちかっていうと源氏より平家が好き。義経よりも清盛派」

「……………きよもり?」

「分かれよ！ いや分かってよ！ 今ツツコミ待ちだったの僕！ え、これ説明しなきゃダメなパターン?」

黒鷲座が空振りした歴史の話はさておき、平青司は高い身体能力が魅力の右打者である。バットを担ぐような打撃フォームから繰り出されるフルスイングで高校時代にはいくつものアーチをかけてきた。ボケっとした顔からはとても似合わないようなスイングにギャップを感じるファンも多いらしく、玄人のレッズファンにはよく話題に上がるほどの選手である。

「やはり男はスケールの大きさだろ!! こいつは近いうちに20発20盗塁するぜ!」

「やや現実的。今ちよつと予防線張ったろ。スケールの大きさって言うておいてお前の器の小ささ発揮してどうすんだ」

「外したくねえんだ俺は!」

「外したくて予想する奴はそもそもいないんだよ。……で、どうやって知ったの? お前相手バッターにあんまり興味持つような奴じゃないだろ」

あの人ストレートのサインにしか首を縦に振らないんですけど! とブルーバースの捕手に愚痴られた記憶が黒鷲座の頭に蘇る。こいつはとりあえず生、みたいな感覚で直球を投げる。様子見に直球。そして空振りしたのでさらに直球。締めにあえて直球を地で行く男である。アホだ、人の事を言えた筋ではないが、自分だつてコースとかは流石に考える。あと一球くらいは変化球投げる。流石に。

「いい質問だな! あれはそう、去年の二軍での試合の話だ……」

「過去編とかやめてね。引き延ばしだと思われるから」

「ビシュツ! 俺が投げる! カキーンと鳴り響く打球音! 俺、撃沈!」

「はつや。一行じゃん。意味あつた今の? ねえ、意味あつたの? いや短くしろつて言ったのはこっただけどき。簡潔に。簡潔にやれつていったのね? 漫画みたいに効果音とモノログだけで喋れつて言ったわけじゃないんだけど。せめて球種とカウントくらい言ってくれよ」

「打たれたのはストレートだったな。ちょっと高めに浮いたけど内角寄りの悪くないコースだった。カウントは……確か1球ストライクを取った後だった気がする。ストライクゾーンのスライダーにぴくりとも反応してなかったから、おそらく直球狙いだったんだろうな」

「ちゃんとコメントできんじゃない。ほれ、塩分補給のタブレットいるか？」

「いちご味で！」

「ほーれほーれ、グレープフルーツ味だぞーう」

「クソが！」

「やつぱり振れるバッターはいいよな。……そんであいつ、モテるんだよな」

平青司。彼は謎のアイドル気質の持ち主であった。SNSで彼の写真が載せられた際には大抵「かわいい」だのコメントが寄せられる事が多い。

「そりゃあ人間的な魅力だろ。あいつ謙虚そうな顔してたし」

「いや、ギャップだね！ ヤンキーが捨て猫を拾うアレも！ クールぶっている美人が実は家で可愛らしいアレも！ ギャップだから！ 落差で攻めてるだけだから！ ストレートからのフォークボールで三振を奪うようなもんだから！ ちょっと抜けてそうな顔していて打つ時はガツンと打つ、そういう選手に魅力を感じるだけだから！」

人気を持つ者というのは、華があるのは第一前提として親しみやすい何かがある。実は庶民派、実は仲間思い。そういうのだけで魔力を持つのだ。

「ごほん、とかいつてる僕にもね。えーギャップとかありますよ」

「無理だぞお前には。……無理だぞ」

「二度も言つてんじゃねえよタコ！　じゃあちよつとアピールしてみるわ。えー僕はですね、こう見えて虫がダメです」

「それはただの情けない男だぞ」

「僕はですね、自動車よりも二輪車の方が好きです」

「どうでもいいぞ」

「僕はですね、友情に厚いタイプです」

「そういう事言う奴は大抵嘘だぞ」

「やかましいわ。じゃあお前言ってみ？」

「俺？　別にいらねーよギャップなんて」

「お前お化けとかダメだろ。映画見たらひとりトイレいけなくなるくらゐ」

黒鷲座の言葉に、熱田の口がピタリと止まる。少しの静寂の後、熱田の大声が響いた。

「は!? は!? はああ!? そんなわけねーじゃん! 別にフツーですけどフツー!」

「上半身しかない女、人の顔をした犬、呪いのテレビビデオ、盆踊りするゾンビ……」

「ぎゃああ——!! やめろやめろやめろ——!」

「勝ったのに負けた気がする……はい、というわけで第10回放送は以上になります! えーSNSなどでね、質問の募集だったり次回選手のアンケートだったりしますので、そちらもどうぞよろしく願います! それでは次回!」

「もう今日一人でトイレいけない……。よし、今日は特別に泊めてやるよ黒鵜座」

「誰が行くか」

## #11 part 1

「皆さま(きげんよう。司会の黒鵜座一でございます。今回は第11回ということ、……まあ数字なんてどうでもいいのですけれども、始めていこうと思います。口調が変なのは今回のゲストに合わせて都会派お嬢様になりきっているためですわ。そういうわけで、ゲストの紹介からしましょうか。『都会育ちのエリート型遊撃手』、宮東<sup>みやひがし</sup>夏樹<sup>なつき</sup>選手です」

「その喋り方はやめてください。キモいです」

「あ、そう？ そりやそうか、じゃあやめます。この前アンケートをとらせていただいたんですけどね、北君と宮東選手の同票ということになりました。で、野手の方が出れる機会は少ないだろうということを考えまして。現在軽いねん挫でベンチを外れている宮東選手に来ていただきました」

宮東のシューズのかかと部分には軽く包帯が巻かれている。診断の結果軽症であり、大体5日くらいで実戦には復帰できるだろうと報告されていたため、登録抹消(二軍落ち)の対象には入っていない。

「というわけで、現在怪我している宮東夏樹です。よろしくお願いします」

「はい、自己紹介ありがとうございます！ 宮東選手と言えばブルーバーズのショート三人衆の一角を担っている事でにわかには有名ですね。『打』の西木戸、『守』の宮東、『総合力』の南風と僕の中では話題になってます」

黒鵜座の言ったこの評価には裏がある。つまり、挙げなかった方に少しばかり問題があるということだ。

西木戸はショートとしては守備がよろしくない。宮東はシンプルに打てない。南風は安定感があるが、今年で30になる年齢を踏まえるとずっとショートというわけにもいかない。こういう話になると、大抵消去法で「じゃあ今はとりあえず南風でいいか……」という結論に至るのが現状である。

「守備の事を取り上げていただけるのは光栄ですね。やはり守備が一番の武器だと俺も自覚していますから、今後もブルーバースのショートには宮東がぴったりだと言っていただけのように頑張ります」

「おお、優等生……。なんかこういうコメントされると逆に照れるな」

今までがアクの強い（選んだのは黒鷲座なので自業自得だが）ゲストだっただけに、黒鷲座は目頭が少し熱くなるのを感じた。

「と、いうわけですね。お便りの方読んでいきましよう。黒鷲座さんお願いします」

「あ、うん。……はい、お便り『名古屋キッド』さんからです。『守備が上手くなりたいです。どうすればいいでしょうか』という事ですね。これはショートの宮東選手にぴったりな質問が来ましたね」

「俺がゲストで良かったなと思います」

——さてはこいつ中々にプライドというか自己評価が高いな。適当に相づちを返しながら、黒鷲座はそう思った。

「ではまず使うグラブの選び方から」

「待って。そこから？　そこからなの？」



「当たり前前でしよう。『弘法筆を選ばず』なんてことわざがあります  
が、あんなものはまやかしです。そもそもプロでもそんな選手はいま  
せん。現実をみてください」

「うん、ちよつと言い方がキツイかなあ〜!? 恐らく相手は学生だか  
らそこまで言っちゃうと凹むと思うなあ」

「そうですか、それはよくありませんね。ではまず根性を叩きなおよす  
ための精神統一法を……」

「相手が聞きたいのは守備の話だと思うんだけど」

「過程をもらもろとすつ飛ばして上っ面の話を信じようなど言語  
道断です。『千里の道も一歩から』、必要なのは準備です。それを怠ろ  
うなどとは笑止」

ああ、今回はそういうタイプなのね。なるほどね。

普段のピッチングを3球種で乗り切っているだけあって、観察力に  
はそこそこの自信がある。これ上手く話を誘導しないと延々と説教  
が続くわ。観察眼はそう告げていた。

「じゃあ宮東選手はアマチュア時代どういうトレーニングをしてきた  
のかな?」

我ながら中々上手い切り返しだ。速球をセンター前に運ぶくらい  
には上手い。

「トレーニング法ですか。そうですね。俺の場合はまず野球用具店を  
ハシゴするところから」

「聞いた事の無いワードを簡単に並べないでくれるかな?」

「勿論ちゃんと根拠はあります。道具をしつかりと見る事は鏡を見る事と同じです。それに店の間にはかなり距離がありましたから、体力をつけるトレーニングになります」

「ああ、うん。割とまともな返答がきてちよつと僕驚いてるわ」

「そして録音しておいた実況音声の流れしながら練習します」

「あれかな？ どういう打球が来るかイメージしながら練習に取り組むとか、そういう話？」

「いえ。ファインプレーの音声を流します」

「なんで？」

「褒められてる気がするからです」

「なんて？」

「いいですか、成功する自分をイメージするんです。大舞台で好守を見せて歓声を浴びる自分を。そうすれば多少の事は気になりません。何かミスをしたとしても『自分なら取り返せる』と思えます」

思ったより参考になるぞ。

というか自分を褒めて伸ばすタイプなのか宮東選手は。

「虎ノ門精工（※宮東が所属していた社会人野球チームの会社）に入つたのも語感がいいからです。精工、つまりは成功ですね。縁起がよいです」

「そんな理由だったの……？」

「精密機械を製造するところが自分と通ずる何かを感じたところもありましたが、やっぱり一番の決め手は語感ですね」

「思ったより肝心なところで適当だな。えー、でも今の宮東選手があるのはそういう前向きでストイックなおかげですね。では一旦CM入ります！」

「はい、ではそろそろ次の質問に参りましょう。今日は宮東選手あてに色々届いてるんでね。まあテンポよく進められればと思いますけども」

「心配には及びません。一流とは質疑応答の時間でも堂々としているもの。死角はないです」

「打率2割2分は死角しかないだろ。えーペンネーム『wataridori』さんからですね。『宮東選手は去年から両打ちに挑戦しましたが、どうしてなのでしょうか』と。簡単さ坊や。打てないからだよ」

「ごつちあての質問を取るのやめてもらっていいですか。まあ確かに打てなかったのも事実ではありますけど、別にそれだけじゃないですよ。両打ちだと選択肢が増えるじゃないですか。左に強い投手に対しては右の打席に立てますし、左打ちだとより足が活かせます。それに右で打った方がボールはよく飛ぶんですよ」

宮東の言う通り、いざという時に打席を選べるのはアドバンテージになりうる。出来る事が増えるという事は起用の幅にも大きく影響を与え、上手くいけば出場機会の増加にもつながる。

「でも昔に比べれば両打ちはかなり減ったよな。海外はまだかなりの数があるみたいだけど日本だと少数だし。何より練習量が増えるのがなあ……」

両打ちの打者の何よりの難点。それは単純に必要なとされる練習量が増える事だ。右打ちも左打ちも両方練習しなければならぬわけだから当然練習量は増える。そして、本来片方だけに集中して打ちこ

めたはずの練習を半分にしななければならないわけだから、むしろ打撃成績が下降する選手もいるわけである。

「そこは大丈夫です。俺、一流なので」

「その自信はどこから来るんだよ」

「でも黒鷲座さん達投手からしても厄介じゃないですか？ 両打ち打者」

「いや俺はあんまり……昔コーチに言われたからなあ。『目の前の情報だけに囚われるな。左に立とうが右に立とうが、例え分身していうが相手が打席に立てばもうそれはただの打者だ』って」

「忍者でも相手にしてるんですか？ 流石プロのコーチをやっている方ですね。胸にしみます」

「『だからマウンドに立った以上、相手を○す気で投げろ』だってさ」

「やっぱしみないです。取り消してください今の発言。というかそんな綺麗な顔をしながら言うことじゃないですよそれは！ バトル漫画のセリフじゃないですかそれ！ コーチ鬼すぎませんか!」

「これ本当にすごい爽やかな顔で言われたからね？ あそこまで綺麗な顔で『○せ』とか言われたの初めてだったから新鮮だったよ。いやあ懐かしいなあ。今も元気でやってるのかなあ。そうだと嬉しい……いやあんまり嬉しくはないかも。被害者が増えると思えば気の毒に思えてきた」

「そんな朗らかな笑みをしながら話す内容じゃないと思うんですけど。じゃあ、そろそろ次の質問いきます。ペンネーム『金色のウニ』さ

んから。『黒鷲座選手、宮東選手に質問です。投手、野手のお二人からして正直相手にイラつとくる出来事はあるのでしょうか』だそうです。どうです黒鷲座さん、ありますか?」

「え、宮東くん例の『死んだ目スパイラル』をご存じないの?」

「知りませんよ。何でそんなに仰々しい言い方なんですか」

「これはね。投手陣に常に蔓延るおつそろしい負の三角関係だよ。先発、リリーフ、そして野手。この3つでスパイラルしているわけ。先発が燃えたりテンポが悪いと野手と駆り出されるリリーフから死んだ目を向けられ、リリーフが燃えたと勝ちを消されたり負けがついた先発と野手から死んだ目を向けられ、そして野手はエラーをするたび先発とリリーフから死んだ目を向けられる。おお、考えるだけでも身震いしてきた。見てこれ鳥肌」

「流石にそれは考えすぎなんじゃないですか? いや、まあ確かに常にボール先行の先発がいるとテンポが悪いですけど」

「今のブルーパーズは平和だからみんな優しいんだよ。しかも最近推しとかいう言葉が出てきたでしょ? そういうファンもいる中であんまり過激なのはねえ。5年くらい前なんて殺伐としてたぞ。もう肩身が狭いのなんの」

「なるほど、時代背景もあるわけですね。その時代に生まれなくて良かったです」

「お前ちよつとは言葉選べよ。はい、というわけでCMでーす!」